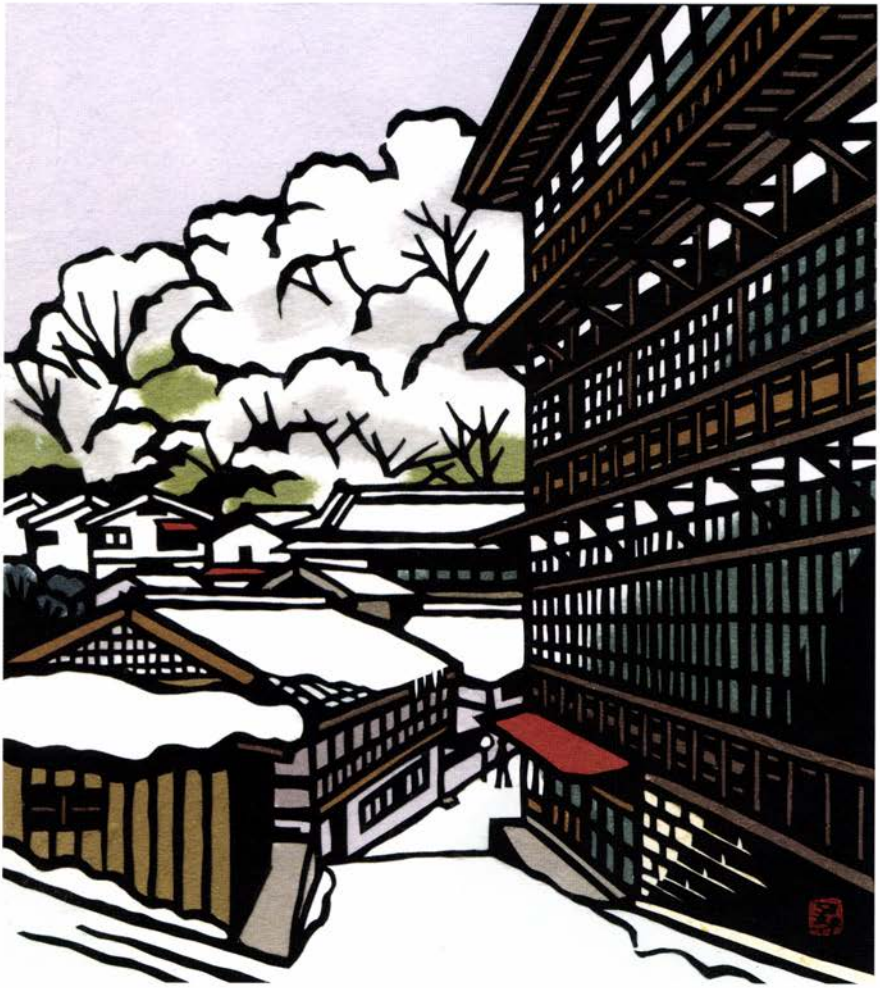
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十六年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一〇四一号



日川協加盟

No.1041

二月号

川柳雑誌・川柳塔創刊
九十周年記念

合同句集 川柳塔 発刊ご案内

「川柳塔」は大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて、平成二十六年で九十周年を迎えます。これを記念して合同句集「川柳塔」を発刊致します。

合同句集は昭和四十九年以来十年ごとに刊行し、今回は平成十六年に続く第五集となります。同人・誌友はもちろん、一般の方々のご参加も歓迎致します。一人でも多くのお申し込みを心からお願い申し上げます。

川柳塔社

☆刊行　平成二十六年七月一日発行

☆締切　**平成二十六年四月十日（木）**

☆体裁　B6判・ハードカバー・上製本
八〇〇頁（予定）

☆参加費　五千円（句集一冊呈・送料込み）

☆掲載句　一人　十五句（自選）

☆申込　所定用紙に掲載句（平成十六年以降の発表句、または未発表句）を記入し、左記川柳塔事務所へお申込み下さい。
なお、参加費は同封の払込用紙でお願いします。

☆送付先
〒543－0052
大阪市天王寺区大道一－一四－一七
花野ビル二〇一号
川柳塔社　合同句集係　宛
TEL・FAX（〇六）六七七九－三四九〇

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

日本現代詩歌文学館

小島蘭幸

日本現代詩歌文学館は、岩手県北上市にあります。昨年、第5回日本現代詩歌文学館館長賞を句集『生きる』で田中新一番傘川柳本社主幹が受賞されたことで文学館の知名度はかなりアップしたと思われますが、他の三部門に比べるとまだまだ低いようです。

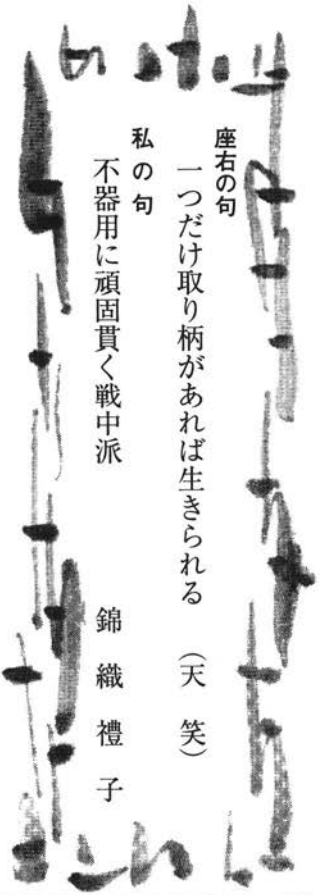
昨年11月10日に第5回現代川柳の集いが同文学館で開催され、受賞者の新一氏は「出会いに学ぶ」と題して記念講演をされました。この集いの模様は番傘11月号巻頭言で詳しく書かれています。過去の館長賞受賞者は、第1回　森中惠美子、第2回　大野風柳、第3回　今川乱魚、第4回　大木俊秀の各氏です。

川柳マガジン1月号の現代川柳時評の中で、同文学館振興会常任理事でもある大野風柳一般社団法人全日本川柳協会理事長は次のように書いておられます。―篠弘館長のことばの中に、毎回採り上げられていることがある。それは、川柳の句集が他の詩集、歌集、句集と比較して非常に少ない、ということである。他の分野では作品を続けて発表と同時に期間ごとに一冊まとめることが当たり前になっているのにだ。私はいつもそれを聞かされ、何か川柳界の弱点というか、貧しさというか、いつも淋しい思いをして聞いている――。

以前、文学館から送られて来た資料の中に、広島県の柳誌の展示コーナーの写真が掲載されていました。その中に〝川柳たけはら〟が写っていたのです。私の所属する竹原川柳会は、毎月発行の柳誌、川柳たけはらと会員の個人句集は文学館に送付しているのです。川柳塔も毎月送付しています。昨年の暮れ、文学館から封書が届きました。平成26年度常設展への作品の揮毫依頼でした。テーマは「大震災と詩歌…」。私は一句だけ作った記憶がありましたので、2011 3.11以後の川柳塔から探すことにしました。その作品は6月号自選集5句の2番目でひっそりと呼吸をしていました。

海を見つめている怒りはありません　蘭　幸

正月3日に、常設展示という光をあてて頂いた事を感謝しながら色紙に心を込めて書きました。現代詩歌文学館に一度は行ってみたいと思います。



座右の句

一つだけ取り柄があれば生きられる　（天　笑）

私の句

不器用に頑固貫く戦中派　　錦織禮子

川柳塔　二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「鎌先温泉・白石」

■巻頭言　日本現代詩歌文学館……小島蘭幸…（1）
趣味に生きる……遠山可住…（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…（4）
川柳塔の川柳讃歌 ⑩……木津川　計…（45）
自選集……（46）
温故知新……（49）
水煙抄……川上大輪選…（50）
西尾　栞句抄……（71）
新川柳鑑賞 ㉔……麻生路郎…（72）
英語 de Senryu ㉖……吉村侑久代…（73）
誹風柳多留一二篇研究 8……（74）
愛染帖……新家完司選…（76）
檸檬抄　「明　暗」……竹治ちかし・大内朝子共選…（80）
一路集（「磨　く」……三浦強一選…（83）
「ケース」……山中康子選…（84）

趣味に生きる

遠山可住

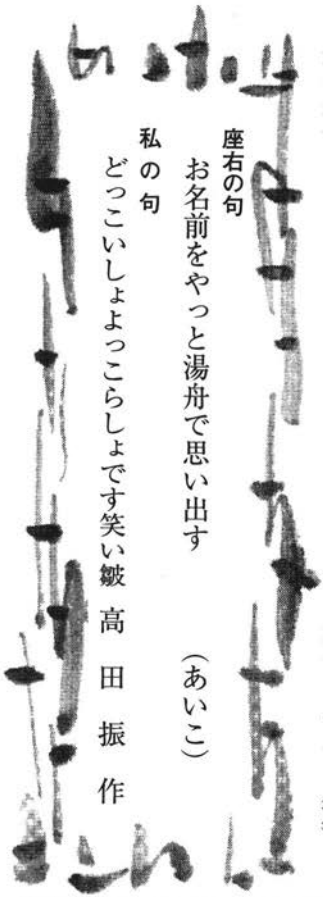
活かされて大正―昭和―平成に及ぶ、本物の後期高齢者になりました。

仕事に生き、地域に生き、そしていま趣味に生きる長い人生。青春の友、仕事の友、戦友、多くの友が年末になると毎年のように喪中のハガキで消えてゆきます。そして全国の趣味の友こそ生涯の友として、会わなくても心が通じる有難い心の叫びを実感しています。

太陽の光に朝を起き、田んぼ、畑、山に健康を戴き、周りから「お元気ですね」と声をかけられる毎日。「ハイ、川柳で笑ろています」と言う日が続いています。

想えば路郎先生をはじめ、大阪から多くの先輩先生方をお招きして、篠山支部の発会へ出席したのが川柳への御縁のはじまり。当時の諸先生、諸先輩は既に亡く路郎先生の揮毫になる

一路集「念入り」……森本弘風選…(85)
江戸を楽しむ⑭……小栗清吾…(86)
民族の詩歌⑳……三好専平…(87)
追悼 亜弥さんと きゃらぼくと……八木千代…(88)
追悼 峯村勲弘さんを偲んで……片山かずお…(89)
初歩教室「逃げる」……山口光久…(90)
川柳塔鑑賞……藤村亜成…(92)
水煙抄鑑賞……井丸昌紀…(94)
せんりゅう飛行船㊳……新家完司…(95)
『麻生路郎読本』余滴(19)……桒原道夫…(96)
一月本社句会……(100)
句会燦燦……青砥たかこ…(104)
各地柳壇(佳句地十選／髙橋宏臣・山岡冨美子)……(105)
二月各地句会案内……(118)
柳界展望……(120)
朝日なにわ柳壇 **今年の十秀**……(121)
■編集後記……朱夏・まつお…(122)



座右の句

お名前をやっと湯舟で思い出す　(あいこ)

私の句

どっこいしょよっこらしょです笑い皺　高田振作

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

の額が今も篠山小学校の講堂に輝いています。

お色気川柳という程度の認識しかなかった川柳、支部の創始者、小西無鬼先生の**「神様を鈴で起こして頼んどき」**の句と共に、はじめて川柳に出合った感動から、入会させてもらったのがはじまり。

以来、諸先生の名句をノートに集めた「名句集」三冊が今の私を育ててくれ、時にふれ、開いてみては、初心に返らせてくれてます。

この感謝と喜びを、まだ川柳を知らない人達に一人でも多く誘いの手を広げたいと思うこの頃です。

敗戦後の青春時代、未知の世界への挑戦へ友を誘い、「生け花」「お茶」「書道」「俳句」「謡曲」等々、地域の師を求めたのがなつかしい。

「川柳」の師がなかったのも、何かのご縁になったのかもしれません。

出しゃばるな遠出するなと風の声

川柳塔

小島蘭幸選

島根県　伊藤寿美

やまなみの雲が晴れたら旅立とう
雪しきり独りの冬が重くなる
幸せな振りをしているパンの耳
独居十年馴れた師走の冬支度
別人になって下り立つ風の駅
三十一文字亡母にもあった火のページ

和歌山市　古久保和子

世界遺産になったかあさんのお煮しめ
錠剤も手から零れる秋深し
ガラス玉とずっと前から知っていた
百均で買うた鏡がよく喋る
物差しを昭和のままに振りまわす
父親のようにふんばる木の机

枚方市　伊達郁夫

充電をしすぎて爪が良く伸びる
居酒屋に今日の微罪を置いてくる
介護する母健やかに病んでいる
獨流に流され故郷の海に着く
愛だけはほんのり解かる認知症
しんみりと過去を時時撫でてやる

羽曳野市　三好専平

一捨九入これでゆく
原爆は正しかったと威張る国
宇宙から足の先まで監視され
蓬摘む媼は人をこばまない
この年で貧乏ゆすりとまらない
一本気コロッケだけを売ってます

堺市　桒原道夫

鉄橋を風が渡っているところ
飛び過ぎて困るボクの紙飛行機
花壇跳び越えてまで追いかけたのに
枯れ枝の方がユーモアわかりそう
笑ってる顔はつまらぬ福笑い
猫と手をつないでどこへ行こうかな

芦屋市　竹山千賀子

ユニホーム脱いだ自分がほんまもの
晴れ着より鯉口似合う母が好き
大空を借りて亡夫へ便り書く
ロッキングチェア揺らすと母の歌になる
つまずいた話が出来る歳になる
七五三孫のお蔭で晴れ着買う

堺市　澤井敏治

冬の景Z切りする虎落笛
炭火を熾すばぢばぢばぢと国訛り
箸を置く仕草にもあるお人柄
迷いつつ嘘いうときもある介護
存問もなき無機質の年賀状
賀状読むときはいつでも独り言

倉吉市　牧野芳光

メビウスの輪から出られぬ愛煙家
ケータイは利口で何も返事せぬ
人間が動かぬように臍がある
介護施設に行ってしまって残る靴
カレイとヒラメ裏に寂しいものがある
商売にならぬ話が心地よい

篠山市　酒井真由

猿酒を提げて竹馬の友が来る
肩書きを捨てた男を愛おしむ
運は天にひいてみますかあみだくじ
卓袱台が消えて平成核家族
ピンクサロンってなあにカマトトお姑さま
舞台暗転よせてはかえす波の音

和歌山市　木本朱夏

真っ白い猫を侍らせ冬籠り
またひとつ赤い錠剤増えて冬
枯葉舞う人待ち顔のベンチにも
原っぱに陽は落ちははが呼んでいる
猫みかんコタツまあるい冬景色
風を探して芒ヶ原にわけ入って

橿原市　安土理恵

忙中の閑それが見付からないのです
夕日のように平然としていたかった
どちらかを選べと迫る天秤座
もみじ一葉天から届くメッセージ
予測つかぬ所にきっとある答え
何度でも試すほどけぬ結びかた

香芝市　大内朝子

真っ白い画布へ今年の夢無限
早春の風にハートの丸洗い
わたくしに黙って逝った好きなひと
身の程を悟り素直な葦になる
北風に怯まぬ笑顔冬薔薇
無印をにんげんらしく生きている

和歌山市　楠見章子

気力なら誰にも負けぬつけ睫
曖昧にできぬ初デートの記憶
ふところは誰にも見せぬハイネック
涙壷あふれるまでは夢を追う
信号は青どなた様にも寛大に
ポケットの夢の欠片を握りしめ

泉佐野市　山本蛙城

亡き妻へ葛湯供える寒さかな
ああツナミ世界共通語だなんて
深夜便聴く丑三つにある至福
街に出て杖つく人の多いこと
責任者出ろとガレキの声を聞く
娘来て終活グッズ置いて去る

鳥取市　岸本孝子

おそろしや酒がだんだんうまくなる
庭の草往生したか枯れ果てた
金婚を越せばダイヤへ欲がでる
投資した着物の出番作らねば
断捨離をしたが不便は感じない
数に溺れ思うがままの政治する

和歌山市　牛尾緑良

足跡が途絶えて私だけの道
大根の穴が冬へと続いてる
もしかしてだけど自公に騙された
どの駅で降りようあての無い旅で
喜びを伝えたいのにひとりの日
花束は私のために買いました

河内長野市　村上直樹

咳払い近ごろ猫も寄りつかず
メカ音痴ずっと昭和に生きている
妻指輪ボクは鼻輪で五十年
凸凹の凹でまあるく生きてきた
ゴールド免許これで極楽フリーパス
やっと喜寿さあ咲かせるぞ恋の花

米子市　竹村紀の治

撫で易い丸さになった僕の背
孤独死のニュースにそっとミカン剥く
古着売り古着を買ってリサイクル
二切れをぶり大根と鰤味噌煮
賄いも奉仕も兼ねるひとり鍋
森が病む酒が助けを呼んでいる

札幌市　三浦強一

自転車で足りる老後の守備範囲
長寿更新預金残高確かめる
字余りも字足らずもある老いの日日
東京五輪見る約束の喜寿傘寿
待ち時間柳誌一冊あればいい
出雲へ行かぬ貧乏神と山の神

八幡市　今井　万紗子

うぶな人目配せだけで発火した
東北本線温もり貰う国訛り
北風が運んでいった愚痴小言
今日もまた昨日と同じひとと住む
連れ合いに虫除けたんと持たせとく
おままごとしたく伴侶探してる

京都市　高島　啓子

軸足を置いて耕す現在地
現状維持はむつかしいことである
ぐし縫いをするこだわっているところ
崖っぷちで振るサイコロは凶と出る
思っていることを顔に書いておく
躓きと書き転倒と書き直す

大阪市　谷口　義

如月や父に逢えただろうか　母
眉の位置少し動いてお正月
うしろ暗いところもあってカレーうどん
キッチンは私の集中治療室
とりあえず今日は遊んでおきました
運動不足のままで古くなりました

西宮市　西口　いわゑ

枯葉ひらひらドラマは風に預けます
秋一日技芸天女に跪く
溶けるなら紫色に溶けようぞ
かぐや姫うっとりさせたのは罪か
万葉の佳人の影か萩すすき
誕生へ拍手も入れてある袱紗

大阪市　古今堂　蕉子

創作料理国境越えた味になり
お互いの身体に聞いてからの旅
諦めた頃に出てくる月がある
前から横今やうしろに居る夫
眉つばの話が通りすぎていく
老衰という自然死が難しい

鳥取市　両川　無限

絵の中にイケメンひとり飼っている
ふたつ目のケーキを悔いているメタボ
次の日も男は広い海に出る
触れた手の温み錯角だっていい
平熱に戻った唯の人だった
雪景色ポストがあってほっとする

大洲市　中居　善信

引きずっているのは僕の尻尾です
CTで覗くお医者が大丈夫
夏の名残のまだ生きている夜盗虫
ポテンヒットで何とか生きた気もするが
転んでも起きても土の上にいる
男も女も一途でなけりゃ信じない

河内長野市　山岡冨美子

冬ざれの超高層の無表情
真っ直ぐなこころ失くしてから寒い
柚子風呂の首に思案をのせたまま
追憶だけが揺れる冬のぶらんこ
募金箱乾いた街に灯を点す
幸せの形で湯気が満ちている

富田林市　中井アキ

深い皺刻んでる分勝っている
ささめ雪女の胸に降りつもる
塩こんぶじっくり炊いている独り
幸せな独りの時間持っている
棚上げにした慕情にも灯を入れる
答にはならないけれど聞いたげる

大阪市　升成好

病人の足取りになる診察日
銘柄米冷めて真価を見せつける
この世とはすべて残像ではないか
ヨーイドンみんな勝者の顔をして
探し物すると出て来る捨てる物
紙一枚あれば祈りの鶴を折る

藤井寺市　鈴木いさお

哲学の道スマホなど繰りながら
アルバムの中に愛しき日々がある
休んだらそのまま老けてしまいそう
ええ人やジョーカー引くと顔に出る
三年前の大吉の札捨て切れぬ
六巡目まだ夢を追う年男

長岡京市　山田葉子

ぬらりくらり迷彩服で生き延びる
ネイルマニュキュアきらり元気を盛り上げる
出掛ける日おでんいっぱい作りおく
居場所がない子供や孫に囲まれて
未来図は光射す方むけておく
重い服捨ててまどろむ落葉樹

海南市　堂上泰女

逆転の子らに頂くアドバイス
カゴメカゴメ生垣越えてきた元気
パソコンから取り出している宝物
孫の笑顔浮かべサンタになっている
弦少し緩めて友を呼んでいる
今の世へ改めて書く座標軸

弘前市　浅田隆樹

東京が暑い寒いと言っている
俯いて歩くと犬がよく懐く
楽天の帽子かぶって喜寿似合う
抜けてなお女の髪はからみつく
楊貴妃に黒子はいくつあっただろ
ゆで卵輪切りにすればひよこ出る

東大阪市　笠井欣子

はらからが次々逝って雪しぐれ
テレビから貰う知識は一寸無理
機嫌よくおとなりさんはホーム入り
戦事物読んで夫を忍んでる
九十歳笑い袋もつかれ気味
会われない友も元気と便り来る

和歌山市　福本英子

少しだけ嘘ついてます頑張ると
やっぱりね夜中に決まる秘密法
ファイトファイト天辺のモズ空威張り
救急車私よりも若い人
他人さまの優しさ貰い生かされる
説明書読んで納得いかぬまま

大阪市　津村志華子

少年よ駿馬のように駆けて行け
枯葉かさこそ人の噂をしています
遠い日の苦いページは閉じてある
寒椿ぽとり我が身の置き所
妻と母両立させて来たキャリア
ローカルの駅の名前がおもしろい

和歌山市　松尾和香

表裏見つめ人生自然体
海鳴りの音に命を抱きしめる
どきどきと抱いた曾孫もひとり立つ
躓いた心冬眠させてます
七坂を越えてはんなりする余生
不器用に生きる私に恋あかり

尼崎市　春城年代

秋が好き淋しいけれど秋が好き
木枯しが吹いて世間がせまくなる
耳遠に雑音消えて生き易し
住む人をなくした庭の木守柿
老齢の重さの日々もケセラセラ
コンビニのお萩で済ます十三夜

大阪市　澤田定子

PM2.5マスク姿の急ぎ足
夫にもありがとう言うなごやかさ
童謡を流してゴミの収集車
社会との交わり減って曜日聞く
アンパンマン子等が遊んだ作者逝く
年重ね和食がやはり好きになる

弘前市　今愁女

十二月こんなにあった喪の知らせ
ガラス戸に動かぬ蟷螂いつか消え
散りぎわも色艶失せぬ柿落葉
カメ虫の跋扈 大雪占われ
なにもなかったかに北三陸の海の凪
彷徨うは魂帰る家もなし

札幌市　小沢　淳

反論にちょっぴり毒を盛っておく
血の絆へばり付いたり離れたり
原画には戻れぬみちのくの涙
一歩引くだけでは世間丸くない
ない尻尾振って軋んだ尾骶骨

黒石市　相馬一花

特売日嫁も姑も気ぜわしい
ミラクルはもう起らないわが人生
りんご食う栄養豊富な皮を捨て
詐欺師には滅法弱い高齢者
リハビリを続けてやっと八十歳

平川市　小寺花峯

横町の近道知った縄暖簾
仏壇の味は淡泊亡母がいる
目隠しをしたら浮かんでくる事実
晩酌の香りを嗅いで今日を生き
膝の痣判らぬままの二日酔

弘前市　稲見則彦

失恋の傷口君に見せようか
挨拶をされて戸惑う脳回路
天気図に弄ばれる雪だるま
手習いをするには遅いキーボード
津軽にはアナタの知らぬ雪が降る

弘前市　岡本花匠

笑福の生き甲斐満ちる三ヶ日
エンピツを掌に大願の初句会
繰り返す愚かを笑う玉子焼き
千の風に癒され笑顔日向ぼこ
くず湯飲む夫婦茶碗へさくら餅

弘前市　高瀬霜石

スランプと言うなよ努力不足だろ
わたくしを助けてくれる辞書と君
ここだけの話　二一・二二が四　二一・四が八
コンビニが建つ前ここは何だっけ
10年満期あなたはいつも楽天家

弘前市　高橋洋子

老いて尚夢追いかける羽繕い
右見ては左忘れるそそかしさ
ふたつ目の駅から無人北の果て
長寿電球今更不要喜寿米寿
一病が癒えて悟ったマイペース

弘前市　福士慕情

新そばを啜る時雨の音消して
真新しい下着気持を引き締める
日の当たるまでに流した汗がある
体制に浸かり個性が枯れてゆく
頑固一徹取り付く島のない横座

青森県　松山芳生

一人旅してます窓いっぱい開けて
蕾のよろこび笑いが止らない
地方紙にほんとうの冬乗って来る
喝采を浴びた記憶で石を積む
神さまがくれた天と地のバランス

さいたま市　星野育子

雑音という無関心デモの声
強行採決に一票を悔やむ
要介護者の受け皿という目線
尖閣に負けるな大きく新島
中中終らない古手紙の処分

東京都　岸野あやめ

黙ってるけれど何でも見てる孫
いつかこの指環を孫が嵌めるとき
虫干しはしない着る日の無いキモノ
最後の最後の相談相手です長女
居酒屋で話し上手が網を張る

東京都　まえでとよこ

ハンカチとヘヤピン買えば孫の顔
歩行者天国いつもの空がひろくみえ
うしろからベビーカーきて追いぬかれ
戸締りはあとでゆっくりとはゆかず
あかねさす「遠い夜明け」へ翔けた人（悼・マンデラ氏）

横浜市　小野句多留

新聞をすぐ読み終える平和かな
紅葉狩り済ませ心を冬にする
新装も老いては客でないらしい
若くても笑顔ない娘のレジを避け
日に何度カレンダー見る十二月

横浜市　菊地政勝

コンビニのない古里を自慢され
大人びる孫との距離が遠くなる
偽物を食べて一流を意識する
福島の野菜進んで買う絆
暇だけはあるのにやる気湧いて来ぬ

富山市　島ひかる

ふるさとに家族集まる母が居る
真っ直ぐな人にもあった回り道
内視鏡きれいな世界見て安堵
全開の心海風独り占め
ゆとり教育などに惑わされた日本

可児市　板山まみ子

家中の汚れ気になる術後の眼
シワクチャの自分が見える術後の眼
旅の日の天気今から気に病んで
米農家オヤツ以上になれぬパン
その時に戻れるならば五十三

犬山市　金子美千代

応援歌うたう真っ赤なシクラメン
書き出しで躓き義理を欠いたまま
一言をひきずりちっぽけなワタシ
大掃除も望みも手の届く範囲
葉牡丹を植えて正月らしくする

犬山市　関本かつ子

言葉にもおしゃれが欲しいお嬢さん
馬の背に託す今年の積み残し
マナー良い日本のデモをテロなんて
他人にはもうなれません箸二膳
紅葉の名所に近付けぬ車

愛知県　早川遡行

三千円足せば部屋から海が見え
連れ立って冥土の道を一歩ずつ
居る人がいないと会話弾まない
思いっきり叫んで過去を忘れたい
捨てるには惜しい在っては邪魔になる

京都市　西村益子

計画はしっかり立てた大掃除
大掃除怪我すりゃ損と終っとく
同じ事出来る喜び亡母の言
出る時に急に雨降る京の冬
ヒヨドリが最後の柿に姦しい

京都市　藤井文代

怪しいと思うが疑念もみ洗う
心の傷忘れるという処方箋
日記帖本音吐き出し大欠伸
若い日の解けぬ結び目緩めとく
うるさくても元気ならばと耳塞ぐ

京都市　桝本宏子

花便り追って北へと誘う旅
少年には遠い遠い七〇歳
ハンバーグウインナ子の箸泳ぐ
いい日でしたか連なり帰るユリカモメ
非常識を常識にするギャル神輿

京都市　三宅満子

君の手を入れるポケット空けてある
カラフルな布団で寝てる東山
帯解くとどっと疲れと空腹と
素っ裸になるまで散ってまた生きる
習い事でお疲れの子にマッサージ

大阪市　阿野壽美子

子離れでやっと自分と趣味探し
無事平穏変らぬ主人立てている
妻の機嫌優しく言って点稼ぎ
お人好し無い袖振って四苦八苦
目力で幼子叱るパパの顔

大阪市　池上清治

年越しにもう一仕事賀状書き
逝きかけて救われたのにまた飲むの
悪童の餓鬼が優しい医者になり
熱烈な歓呼に笑みのキャロライン
優勝で星野 選手を褒めちぎり

大阪市　井丸昌紀

増税前に買っておきたいものがある
一杯に満たすともっと欲しくなる
騒がない男に下駄を預けとく
とりあえず咳でノーだと言っておく
忙しいと鼻の頭で光る汗

大阪市　岩崎公誠

頂点の椅子へ策略ぶつけあい
団子虫てっぺん知らず転げ落ち
年金で寄付はつらいと言う勇気
老々の介護弱点支えあい
ピンコロが望みとしつつサプリ飲む

大阪市　江島谷勝弘

父母の長寿越せるか昭和っ子
キュウキュウと腹の虫鳴くダイエット
電気ガス戸締り役を降ろされる
しっかりと決めることなく古稀になる
カミさんのお供は避けて図書館へ

大阪市　榎本日の出

耳元で言われた言葉離れない
一言も喋らぬお茶と花一輪
年取った顔にいつしかなって来た
外は雪熱いコーヒー飲んでいる
忘れるという特技あり救われる

大阪市　榎本舞夢

八十路過ぎゆっくり日日を楽しんで
夫朝見守り隊で御出勤
昼それぞれ趣味ボランティア出かけてる
暑かった夏も元気で乗り切れた
外は北風ショッピング街活気付く

大阪市　大川桃花

ゆるキャラに手を引かれてる迷子の子
家の恥明して友へアドバイス
イルミネーション夜の散歩に誘われる
控え目の肥料に野菜よく育ち
拭き掃除空気も凛と澄んでくる

大阪市　奥村五月

生きている証と今日も酒二合
不器用と悪い酒ぐせ父ゆずり
寝れぬ夜川柳僕を抱いてくれ
頼りない夫に遺産億の金
ロボットは愛社の心欠けている

大阪市　笠嶋恵美

母と娘の願いが叶う伊勢もうで
御垣内石踏み鳴らし参拝す
伊勢えびあわび大人の時間身に余る
ＯＦＦにしてしばらく家に籠ります
原因ははっきりしてるでも言えぬ

大阪市　神夏磯典子

干し大根おいしく炊けてお裾分け
冬の陽に押されて歯医者整骨医
洗いざらい喋って不眠症治る
どん底を見たからすみれ美しい
告白のつづきをお聞き冬銀河

大阪市　川端一歩

今年の計 路郎読本再挑戦
鬼百句読んでトンネルから抜ける
スマホより月の灯りがいい二人
孫が杖なってやるよに二人泣く
夜のペンきわどいことを書きたがる

大阪市　熊代菜月

母のとし越えてまだまだフラダンス
初恋の君逝く今日の茜雲
足ぶみをしたまま一句巣立てない
楽も苦も生きた証しの八十路坂
好きな人まだ居るのかと野暮が聞く

大阪市　小谷集一

身の丈の暮らしに慣れて自然体
好奇心一人歩きがしたくなる
自信あるうちにピリオド打っておく
自分史に働き蜂の汗の跡
冷静になると空しい褒め言葉

大阪市　近藤正

逆流にさすが九条倍返し
桜咲く頃は増税パニックに
升酒の盛りが足らんと愚痴を言う
経ヶ岬風花騒ぐ基地要らん
日めくりの吉の日だけを読んでいる

大阪市　坂裕之

こつこつと働いてきてやっとこれ
都合よく話し合わせるのが嫌い
直せない意固地な私 でも生きる
失敗を上司の所為と言いますか
後戻りせずに歩いてきた誇り

大阪市　佐藤忠昭

敵無限味方は一人広辞苑
数字にも相性あるのかロトセブン
数よりも心の広い友を持ち
人の価値密かに測る順位付け
お蔭様皆出席で来年も

大阪市　田浦　實

優待パスがスーツ買う気にさせてくれ
社訓掲げる店の雰囲気締りあり
輸入松茸おかげで孫に顔が立ち
賞味期限お人柄にはありません
東京タワー生駒が勝った背の高さ

大阪市　寺井弘子

電子カルテがっちり余命にぎられる
この一年振り返りつつ聞く第九
さくらさくら歌って昭和振り返る
ケイタイを忘れ終日落ち着かぬ
貴方とはラストダンスは踊らない

大阪市　津守なぎさ

今が旬全山紅葉のおもてなし
年賀状震える腕にはっぱかけ
年の瀬に一喜一憂再検査
食べきれぬ馳走温泉やみつきに
初笑いいろいろあって大家族

大阪市　原田すみ子

着飾って本音など言う訳がない
そのままを返したいけど聞いている
いろいろな夢が足元照らしてる
冬は鍋湯気でしっとり夫婦仲
色とりどり冬の花屋は万華鏡

大阪市　板東倫子

強盗や殺人いちど休んで話そうよ
名力士断髪式の大涙
今聞いてもう忘れたと言える年齢
御先祖が驚くだろう無洗米
馬車からも見える日本の茶番劇

大阪市　平嶋美智子

寒風に揺れつ裸木春を抱く
燃えた秋もはや古里から雪便り
申告をして高すぎる税払う
申告し収入隠す気もわかる
税務署がびっくりいやに親切だ

大阪市　伏見雅明

片意地を張った暮らしはすぐ疲れ
ふと見ると敵も欠伸を噛み殺し
前置きが長いと碌なことがない
マスクした医者も咳する診療所
褒めことば人伝に聞くうれしい日

大阪市　松尾柳右子

終戦日明暗わけた幼き日
孫が来る馳走考え忙しい
会合日予定ないかと確かめる
一月の寒さも少し馴れて来た
木8の釘付けになり演歌聞く

大阪市　山崎君子

娘はやさしぬくぬくパンを届け来る
三時です美味しい昆布茶ゆっくりと
今日もまた昔を想うアルバムに
一枚の写真にシンガポールのあの頃を
シクラメン夕陽をうけて風にゆれ

大阪市　山本加お里

飼い犬に愚痴を聞かせて決意する
あわてない寿命が来たら死ぬんやで
人波に押されてやっと辿り着く
悲しみを乗り越え今があるのです
古希過ぎてまだまだまだと夢を追い

大阪市　吉内タカ子

ライトアップ増えて明るい年迎え
長生きで宇宙映像ご褒美だ
元気かな声の絆で長続き
朝ドラの大阪弁が懐かしい
赤々と春連れて来る実南天

堺市　大久保のん子

満月や一夜を語る友が欲し
片づけの本も一緒に積んである
笑い袋の底にたまっている涙
雑念をきっぱり断った空の青
今を咲く花のいのちと響き合う

堺市　奥時雄

偽装してまで高いカネとるホテル
バイキング袋に詰めて帰る人
誇大表示でないか二合徳利
料理人扱いされないおでん屋
反日が煽る日本の国家主義

堺市　柿花和夫

高齢化の頂上付近僕もいる
キリン草枯れて冬野をらしくする
追伸で完成目指す恋の章
しがらみが取れて明るいデスマスク
無視されて無視した頃を悔いている

堺市　加島由一

子に嫁が歌はうまいし美人です
懐かしいものが見つかる大掃除
一億でいいバラ買いの宝くじ
金杯で今年の運は吉と出る
来年の屠蘇まで酒は飲みません

堺市　源田八千代

共に生き長らえるよう初詣で
日本人こそ見直す時代和の文化
マンデラ氏の融和と対話とこしえに
孫の服選ぶ売場に友の顔
介護して加齢現象諸に出る

人間を磨く努力を惜しまない
走るのを止めると人がよく見える
歯痒いが昨日できても今日できぬ
指輪いらぬ妻でよかったなと思う
セラピーで短い秋の日が落ちる

堺市　遠山唯教

年かいなジングルベルが響かない
年の瀬に増税紙面埋めている
景気よいアベノミクスがピンと来ぬ
子の老後心配したら笑われた
五つ星ホテルがこんなおもてなし

堺市　齋藤さくら

社に減税年金者には消費税
頼み事膝を崩してから本音
朝寝坊アンカの温さ一人じめ
石段を避けない人と避ける人
敵味方笑顔こぼれる雪合戦

堺市　内藤憲彦

心地よい目ざめ水さす耳の蝉
同じ事考えながら出る違い
堂堂めぐり出口さがしている焦り
あいまいな返事は都合よい方に
ほどほどの距離で絆があったかい

堺市　宮本かりん

天変地異病んだ地球の喘ぎだろ
食べ過ぎると下す食べないと痩せる
経験談の中に潜んでいる自慢
難題が過ぎ去るまでは死んだ振り
冷風に顔だけ晒す露天風呂

堺市　村上玄也

十七歳孫は時々魔女になる
大切な予定逆算して毛染め
真赤より薄紫の品が好き
好きだった花一輪を仏壇へ
私には大樹だったの喉仏

堺市　矢倉五月

手袋は無用ポケット暖かい
スニーカーがんばってます寒稽古
寒げいこ終れば春が待っている
豆撒きの後の宴に鬼もいる
合掌と拍手教えてあげましょう

堺市　山本半錢

あせってもあせらなくてもはや二月
名ばかりの立春覚悟する寒さ
健康であれば今年も大丈夫
迫り来る8パーセント慣れるでしょ
秘密保護世情が変わらないように

池田市　栗田久子

天辺を目指した頃の名刺です
啖呵切るきれいな顔と口を持つ
手は出さぬ父の気迫に満ちた咳
脇役のままで生涯終えそうだ
老僧が浅学ですと切り出した

和泉市　横山捷也

忘れたいのに点滅の思慕と悔い
将軍様のまわり固めるおじぎ草
電飾の樹が眠れぬと夜を嘆く
間引かれてエリートだけ伸びる森
旅の湯へじんわり流すわだかまり

茨木市　島田誠一

過去形の傷を突きにくる他人
花道を飾り余生は回顧録
風邪薬並べ高価な方を買う
マイペース切札持っているゆとり
グルメ旅女三人春姿

茨木市　藤井正雄

来る年は明るい事が続くよう
真っ新のカレンダーに書く夫の日
真心の介護豊かな義姉の顔
時時は電話で今を確かめる
一頻り戒めとなるお葬式

大阪狭山市　矢野梓

近頃は妻に監督されて生き
俺様は並の亭主で恙ない
消費税奥の手はもう無いと妻
年末にとろとろ事故を見て走る
八十路坂自分自身を持て余す

交野市　森本弘風

さあどうしょ便利で不便電池切れ
諦めていても時々迷ってる
ガンコさに意地も見えます辛かろう
理想と現実むつかしい老いが来て
ショートステイ日当り景色良好なのに

河内長野市　植村喜代

遠目にも年格好は誤魔化せぬ
五輪リニア僕の余命をけしかける
おふくろの口ぐせだった世間さま
まかないを常連顔で所望する
運嘆く前にリセットお早めに

河内長野市　梶原弘光

スケジュールいっぱいにして狂いそう
痛いところ突かれ言い訳ばかりする
母の愛無料分配して終わる
焼き餅を焼くのは未だ脈がある
リフォームへ思い出生かす裁ち鋏

河内長野市　木見谷孝代

河内長野市　黒岩靖博

義理人情すたれ世間が暗くなる
ゴール終え好きな路いく日々至福
遅咲きの姫に金庫の箍外れ
嫁ぐ娘に嬉し寂しい同居する
銀河系など芥子粒ほどと大宇宙

河内長野市　坂上淳司

咳込んだワイフの丸い背をさする
M2.5に五星紅旗が咽せている
臨月の丸いお腹が誇らし気
騙られたバナメイエビは初心なのに
神曰く運欲しければ万札を

河内長野市　谷久美子

牛窓で老いの青春蘇り（旅の句）
纏うもの脱いで春待つ落葉樹
落書きの相合傘にある未練
惚れ抜いて刺を落した赤い薔薇
村外れ子供こいしい地蔵様

河内長野市　松岡篤

観光地僕外国に居るみたい
積み残しされて事故にはあわず済み
ほめられて向学心に燃える古希
引退をほのめかしつつ首つなぎ
良い事はわしが決めたと胸張るが

河内長野市　山室光弘

デパ地下の試食で浮かす糧ひとつ
愛嬌を捨てて老舗の味を出し
惚れる癖抜けないままに喜寿の坂
独り住まい指差し喚呼して出かけ
人生を鋏で切れば明と暗

岸和田市　岩佐ダン吉

ヒト科とは優しさ以外ないだろう
半分んこ耳にとっても快い
世事のこと疎くいつでも窓睨む
きっと成る今はひとりの道に立つ
四面楚歌夜明け前なんだと思う

岸和田市　堤楢代

お向いの花を見つめて今日も過ぎ
豊さが私をなまけものにする
重ね着もほどほどにする重くなる
満開の花に想いをよせて見る
演歌にはなぜかせつないものがある

四條畷市　吉岡修

精いっぱい咲いた誇りで散っている
傘寿かて夢も希望もてんこもり
鬼の声か仏の声か耳が鳴る
痛い目に会って人間また育つ
メル友が朝昼晩は見ろという

吹田市　大谷篤子

なるようになると呪文で今日終る
バラの香にめまい忘れて来た時間
明快な答え出ぬまま卵割る
締切りが来るのにペン先動かない
冬蝶はやわらかい羽広げてる

吹田市　木下敏子

紅葉の中に倖せ立ちつくす
思い出を纏い寒さを乗り越える
健診の歯を誉められている八十路
大阪弁飴なめながら丸くなり
賀状書くまだ達者だと墨の彩

吹田市　須磨活恵

辛抱も我慢もしてきた土ふまず
立ち止り確かめて見る現在地
寒くても縮まるまいぞ心まで
冬木立決して春を忘れない
平凡な倖せ揃う夫婦箸

吹田市　瀬戸まさよ

整形に同じ仲間がわんさいる
あの人もこの人もみな医者通い
きょうだいも友も高齢うまが合う
よくできた嫁と姑でも隙間
心配ばかりかけている友がいる

吹田市　野下之男

そこのけを平気で言うの大国だ
外国(とつくに)の横綱二人国技です
お返しに喜ばれている自衛隊
人生は色々あるのほんとです
老人の食事覗くな雀達

吹田市　山本希久子

まだ笑う余地あり仰ぐ寒の月
忘れましたと正直な顔が言う
体感温度あなたの側はあたたかい
地球を歩くセンターライン越えぬよう
思い思いに吹くそれからの風よ

高石市　浅野房子

古い服ばかり着回しあきちゃった
話かけられすぐに信用してしまう
大根をおいしくたいて下さった
断捨離も出来ぬままああ年が行く
寒いのはこれから春は遠のいだ

高槻市　井上照子

底ついた暮らし味ある日にも逢う
嫁姑愁眉開いてきた絆
安い値のかくれた傷を見てしまう
年金が減って電気を消しまわり
多事多忙夜がすぐ来る師走だな

高槻市　片山　かずお

大丈夫ですかと声に手も添える
好きになった理由は僕にも分らない
貰い物ですがとお福分けが来る
何万回も食べたが飽きぬ米の飯
服選びセンスと値札せめぎ合う

高槻市　初代　正彦

ふと湧いた遊び心で途中下車
夫婦でも易易読めぬ胸の内
小さい字も取説だけは読んでおく
気のせいか足音までが十二月
忙しくても新聞だけは目を通す

高槻市　島田　千鶴子

年金で向う三軒恙無く
会えぬから思い続けている冬日
十二月だんだん歩幅広くなる
樹木葬これもいいかと見学に
五十回忌赤いローソク揺れている

高槻市　杉本　義昭

一浪の机に母のにぎり飯
初恋の名前刻んでいる机
親の背を越える気迫の三代目
花火師の命をかけるタイミング
記念樹に好きなあなたと訪れる

高槻市　左右田　泰雄

決めかねて言葉にごしている弱気
あわて者回転ドアに挟まれる
響き合う形で支え合う暮らし
カラオケで意外とうけたしぶいのど
照れくさいふりしてどもるパピプペポ

高槻市　富田　美義

何事も無いときゃ妻の目も温い
窓際で効き目の薄い咳払い
この頃はボケが呑気の前を行く
甦生して歓迎なのか思案する
悪ガキを叱らぬ躾未来地図

高槻市　富田　保子

かぼちゃ食べ柚風呂入り風邪引いた
冷え込みの朝の散歩は義理で終え
孫二人素直に育ちありがとう
底冷えを回避も出来ぬわが財布
墓参り父に似た人すれちがう

高槻市　安田　忠子

車内皆スマホと虜世の移り
サービスと読んだ工事の請求書
射しはじめた陽光浴びて読む至福
勧められ阿修羅の如く読み耽る
十二月タンゴの夕で締めくくる

豊中市　池田純子

のんのんと雪が降ってる露天風呂
応援歌青春の声甦る
熱が出てやんちゃがチンと座ってる
不揃いのみかんは味も個性持つ
御主人に従い犬もルイ・ヴィトン

豊中市　江見見清

引き潮の人生これからが勝負
両隣旅行中だとポツリ妻
耳寄せて聞いてメモまでもろてくる
運命と思えたとこで寝てしまう
み仏は高くにおわしても縋る

豊中市　松尾美智代

ありのままの自分を出せば気が軽い
遠い日の母に似てきた前屈み
撫の森やさしい水の音がする
実りある人生でした木守柿
ひたひたと残り時間が押してくる

豊中市　松村里江

ありふれたものと手土産そっと置き
まだ宵の口と一本つけに立ち
姑米寿嫁孝行にヨガはじめ
失言の本音は保留しときます
イチビリはピンチヒッター要員に

豊中市　水野黒兎

健康に悪いものほど旨い秋
古稀過ぎて北風に向きペダル漕ぐ
駅までの道に更地が増え師走
デパ地下の雑踏泳ぐ年の暮
周回の遅れ気にせず喜寿目指す

豊中市　藤井則彦

医学書を読むほど上がる血圧値
マンネリの会議を覚ますボスの咳
散歩する歩幅は広い年金日
情報が溢れて乾く思考力
第三者機関の好きな永田町

富田林市　片岡智恵子

転ぶたび情けを貰い立ちあがる
極限にはいつも頼れる父がいた
翔んでみたいが羽根は重たいものと知る
磨きぬかれたりんご自分を見失う
いくつ訃に出合うか暮れの薄あかり

富田林市　中崎深雪

老いの道こんな病が待ってたか
スタスタと歩ける脚が夢になる
ヘルパーに要らぬ気遣う要介護
寝たきりの優等生の記事チラリ
障害をいまだ達観できぬまま

旅立ちの大志煌く滑走路
人間が寄って個性の花ざかり
世渡りの上手な靴に履き替える
取り返しつかぬボタンの掛け違い
緊張がパッと和んだ呱呱の声

富田林市　山野寿之

お隣の夫婦仲にも安堵する
むつかしい話はスルーしてしまう
友達がいい友達でいいのは男
スピードの出しすぎわかってはいるが
それぞれに耳かきもっている家族

寝屋川市　籠島恵子

籤が当たれば一人で暮らす道選ぶ
おだやかにひと日ひと日を傘寿すぎ
なまなかの覚悟では同居出来ぬ
紫香先生生きておわせば思われる
主幹四人にとても大事にしてもらう

寝屋川市　冨山ルイ子

お隣は就活わたし終活
現実と夢のはざまにいた独居
父・母の恩に答える生きている
最後かも三人姉妹久し振り
八日間姉妹で語り合えた冬

寝屋川市　平松かすみ

就活の始まる孫に空の澄む
負けん気が後ろ姿を崩さない
吾亦紅古寺に夕日が透き通る
多目的小ホールです囲炉裏ばた
パズル埋めるカタカナ辞典くりながら

寝屋川市　森茜

紅葉の木々に囲まれ住む団地
落ち葉踏み今日も元気に万歩計
習慣でヨッコラショと席を立つ
新聞の死亡記事の歳見つめ
朝夕の新聞配り子を育て

寝屋川市　山本三郎

おばさんの笑顔が良くて買った籤
コンビニのおでんに決めた今日一人
紅葉を愛でる間もなく落葉踏む
更新に認知テストがあるそうな
半年先の予定があって元気です

羽曳野市　宇都宮ちづる

葉をみんな脱いで桜もリニューアル
天空の貴方に届け吊し柿
多数の傲りいつまで続くぬかるみぞ
太陽の温み逃さぬシャッたたむ
ポストまで駈けて脚力たしかめる

羽曳野市　徳山みつこ

羽曳野市　永田章司

禁煙を未練たっぷり墨書する
散らかった居心地が良いひとり部屋
勝つ為にプライドそっと置いておく
一強で無理を承知で通す法
こわもてで啖呵を切って後引けず

羽曳野市　安芸田泰子

古里は他人ばかりが増えている
ぎりぎりの賞味期限のおすそわけ
投函の後に迷いがまだ残る
おでんぐつぐつ木枯しの唄を聞く
情けなや畳のヘリにけつまづく

東大阪市　北村賢子

生きのびたか細い蚊なら叩けない
寂しくてうったメールに来ぬ返事
世渡りの上手な人のフライパン
もうあかんまだひと花と古希の春
この世の空気まだたっぷりと吸うつもり

東大阪市　佐々木満作

五時間の手術を終えて自由の身
健康がなにより欲も得もなく
好奇心まだ旺盛な古希半ば
人生の修羅場に耐えた顔の皺
四十半ば家を建てると子の意欲

枚方市　海老池洋

道楽が仕事になった定年後
十歳ほど歳を値切ってみたくなる
はかなさをアイソン星に教えられ
幸せの門の開くのを待っている
傷口を押さえ小さくするくしゃみ

枚方市　小林わこ

昨日という過去にやっぱり縛られる
サビ落とすゆとり少うしできました
昨日までの幸せ奪ったのはガン
昨日の心きょうは少うし前を向く
明日へあすへ昨日の風が後を押す

枚方市　丹後屋肇

裸並木春のリベンジ誓い合う
意気投合紙とペンとの睦み合い
立派過ぎて嫉妬が蒸発してしまう
カサブランカ脹らむ店に立ち止まる
前向きにブーケが出迎えてくれる

枚方市　二宮紫鳳

石仏にロマンをはせる古都ウォーク
紅葉舞うおしゃべり弾む同級会
老い風に歯止めをかけるスニーカー
花ひとつ咲いて嬉しい老いの暮れ
初孫にサイフもゆるむ七五三

一年の無事を祈りて寺参り
故郷の稔りが届く秋の暮れ
日溜りを求め散歩の老夫婦
老い二人どうにか乗り切る師走風
露天風呂見知らぬ人に話しかけ

枚方市　二宮山久

大切に余生を趣味で埋めていく
ルールからはみ出せないでつまらない
シャワー全開今日の苦労を流すまで
削除キー押すと淋しい住所録
全身でわたしスマホに溺れてる

枚方市　寺川弘一

軒先のつるし柿もう食べ頃に
師走の街往き交う人の忙しさ
重ね重彩り詰めて祝い酒
内緒だよ胸の小窓は明けてある
大丈夫見張っていますその油断

藤井寺市　伊藤アヤ子

終章は誰にでもくるピーヒャララ
スランプをぬけると町は晩秋に
編んであげたのに可愛くない夫
転けたのはひとりでそれがわたしです
ゲンコツで涙を拭いた秋のはじまり

藤井寺市　太田扶美代

花弁をいくつ犠牲に来る来ない
今はもう飛べないけれど自由の身
クリーニングから戻っては来ない羽根
結び目の固さは母の愛だった
ポインセチアの赤にまみれて歳を越す

藤井寺市　鴨谷瑠美子

お日様と半分こしてお弁当
お腹一杯食べた罰です一万歩
あの時は幼な過ぎたと赤い薔薇
年月流れしみじみとトーシューズ
この坂で自転車こいだのも昔

藤井寺市　津田シルク

氏神でお屠蘇いただき初詣で
初夢の亡夫の笑顔に背を押され
美人より笑顔やさしい人が好き
一筆箋恋もモミジも散りました
山茶花の赤にほっこり亡母偲ぶ

藤井寺市　増井ヨシ枝

デートだから付いて来ないでお月様
あくび咳クシャミ夫も忙しい
お互いに時々留守にして平和
十年先も使うつもりで歯を磨く
めぐる四季の早さどうにか付いていく

藤井寺市　俣野登志子

藤井寺市　吉田喜代子

情け無いあゝ日展も汚れてた
晴れ女の友を誘って東西
年金の話をすると愚痴になる
気丈さもギックリ腰に負けました
何時までも何時も会えると思ってた

藤井寺市　若松雅枝

三猿に徹して気楽老いの知恵
辛い日も辛くない顔して生きる
境遇が同じになって知る痛み
氏神様の献灯会へ寄付一つ
イルミネーション流石大阪綺麗だな

松原市　森松まつお

段取りを考えながら日向ぼこ
出不精の僕アウトドア過ぎる妻
テレビ欄まず時代劇チェックする
町内にコンビニがまた一つ増え
開店に行くと風船くれはった

箕面市　酒井紀華

風の盆一夜の契りまぼろしか
幻のおとこ待ってる冬の駅
幻と消えた初恋ほろ苦い
幻か今日は命日君に逢う
ジェラシーが行ったり来たりおんな坂

箕面市　出口セツ子

極寒のドイツへ男二人旅
海外より毎日電話くれている
日々電話元気確認して安堵
優しい子居て幸福と思う日々
家族皆健康だけを祈る鈴

箕面市　広島巴子

雨戸開け新たな日へと背伸びする
織田作の像と夫婦で写真とる
人肌も夫婦で違う酒の燗
ワンコイン当りほくほく喫茶店
大笑いして体まで軽やかに

守口市　井上桂作

女大使父親ゆずり聡明さ
ぶどう柿おいしい味を今年また
災害は地球どこかでおそろしい
寒気団早くも北から列島に
御堂筋銀杏並木は日本一

八尾市　内海幸生

信じきり花屋ではなの種を買う
兎も角も迷っておれぬ夜が明ける
精一杯生きよう今が関ヶ原
自然薯の厳しい生き様真似ますか
躍り食い流れる川に放ちたし

八尾市　髙杉千歩

健康年齢卒寿まではと三千歩
ディサービスヘルパーカレンダーに空きがない
歩行器で運び夕食独り鍋
老人会二月の歌は早春賦
鑑定団に見せたい我が家のおもちゃ箱

八尾市　寺川はじむ

でっかい国がちっちゃな国をまたいびる
並んでからこの列何と聞くおばん
身内切る怖さ見せしめ北のボス
人並みに買ったスマホに遊ばれる
食偽装潮時読んで謝罪する

八尾市　宮﨑シマ子

倍返しの科白が妻の口から出
ひたひた来る老いはね返す竹箒
横に居る妻がちっとも邪魔でない
好き勝手禁じられている傘寿
サンタさん恋の点火もして廻り

八尾市　村上ミツ子

口に鍵かけてわが家の秘密保護
いつまでも夢追いかけている蕾
抱きしめるすぐ傍にいる青い鳥
いたずらがきへしっかりと自己主張
ありがとうで今日一日を終りたい

八尾市　山根妙子

産声を待ったあの孫も嫁御寮
秋鯖に見つめられてのお買上げ
海老さわぎみんな名前を覚えられ
そう言えばジングルベルはひと昔
月影にそっと電飾消してみる

大阪府　桑田ゆきの

反日をあの手この手で攻めてくる
霧深く過疎一村を包み込む
白い息交わして登校する元気
猫抱いて日向ぼこしている小半日
出歩いて脳を磨きにお洒落服

大阪府　野田栄呼

一度だけあの世の旅をしてみたい
せめぎ合う幸も不幸も胸の内
日めくりと似かよい命けずってる
また一年記録を伸ばす同期会
祭だけ若者が居る過疎の村

大阪府　籾山隆盛

巳の年も潜り抜け出た除夜の鐘
約束の埋まる暦は消化する
風揺れてひょいと四国へ山頭火
父さんは火の輪くぐったランナーだ
風雪が命を刻む深い皺

大阪府　米澤俶子

年毎に歳末らしさ減ってきた
目を閉じれば回想にいろついてくる
空腹の時のことばに棘がある
絵手紙のポインセチアのクリスマス
結び目をゆっくり緩め妥協する

神戸市　伊勢田毅

喜怒哀楽徐々に薄れる老い二人
夢持てばまだまだ喜寿も恋をする
本堂で舟漕ぎ落語聞いている
スーパーで切なくよぎる亡妻の影
タライ回しの歳暮疲れてたどり着く

神戸市　白川淑子

学園祭少女から買うチューリップ
大の字に寝るぽっかりと秋の天
ころころと仔犬と少女ゆく花野
空振りに終る一年ああしんど
ウォーキング大会今年も出るうどん

神戸市　山口美穂

取りたてて欲しいものない老い師走
少しだけ愚痴をきいてと亡き犬に
風邪癒えて今朝は口紅つけて出る
あやかってと届いた白寿のお赤飯
第九聴くああ一年のはやいこと

神戸市　山崎武彦

踊りの輪抜けて自分を取り戻す
黙々と棚田を守る男意気
箒目の一本ずつにある修業
花野からやっと帰ってきた安堵
おもてなしの心に少しある打算

神戸市　山田婦美子

午の一字入れて初句を書いてみる
その昔の祖先も拝んでいた初日
薄れゆく縁をつないでいる賀状
それぞれに終の形の落葉塚
難聴のせいでしょう夫の生返事

相生市　中塚礎石

就職の靴に磨きをかけている
共白髪浴衣を着れば踊りだす
褒められて綺麗に見える庭の花
我慢から生まれた力米寿ゆく
八十路坂趣味が多才で腰も伸び

明石市　糀谷和郎

母の樹に抱かれ夢みるハンモック
老若を無慈悲に分けているスマホ
婚活の2文字は宇宙より遠い
粒ぞろいせめて色でも変えておく
タラればの肥やし撒きすぎ実らない

芦屋市　黒田能子

iPSいずれ命の灯がともる
別格です皇后さまの佇まい
ファッションの黒服喪服とは違う
記憶力頭のノート溢れそう
お日さまと仲良く遊ぶ三輪車

尼崎市　市坪武臣

徳積んで仏の顔を引き寄せる
赤バット偲んで昭和遥かなり
麦ごはん昔嫌われ今好かれ
やっかいなこと妻に丸投げして安堵
ギブアップしない粘りが実を結ぶ

尼崎市　加川靖鬼

賀状から嘶く声が谺する
健忘症ですと惚けた振りをする
涸れたペン泪をためて書き継ごう
右脳でも左脳でもない勘がある
朽ち果てた夕陽が熟柿になる

尼崎市　軸丸勝巳

自然には勝てぬ日本の四季乱れ
見て飽きぬ紅葉名所の深い味
多種並ぶ手帳やっぱり去年のに
松竹梅小鉢に植えて新春を待つ
大掃除時代遅れが溜る棚

尼崎市　長浜美籠

篠山の秋焼栗を食べながら
あと少し鳴門大橋から故郷
冬籠り念頭におく保存食
言い古した話みかんを剥きながら
余裕出てきた少しおとなになりはった

尼崎市　藤井宏造

冬至にも外国産のカボチャ買う
大黒柱まだしばらくは耐えられる
選択肢だんだん減ってきた齢
はぐれてもケイタイあればへいっちゃら
その化粧僕のためではなさそうだ

尼崎市　藤岡りこ

えびの名は違うがどれも海の幸
東京駅人の海から娘の笑顔
老眼進み妻がきれいになっていく
一日中子らを待ってるすべり台
鋏持ち夫の料理葱きざむ

尼崎市　山田耕治

ふる里を物産展へ買いに行く
気を張って生きるときどきへこたれる
自分との約束違反して無口
怒ってる母の絵はない図工室
久し振りにピアノ聞こえる里帰り

加西市　金川宣子

ゆったりと青春キップ老いの旅
一発屋今年なんとか生き延びた
認知症検査のために記憶する
医者嫌い自然治癒力頼みです
正念場鼻っ柱をへし折られ

川西市　西内朋月

酔うほどに本音が漏れるから困る
贈られた一升瓶が未だ残り
ＴＰＰ稲穂が実る千枚田
あちこちの医者で抜かれる血の検査
寒い日のウォッシュレットが有りがたい

川西市　山口不動

裸木を見上げて過ぎる老夫婦
気高くはなくて良かった妻がいる
相棒は隠れていますネズミとり
喜寿までにいろいろあった枝分かれ
まとめ役ズケズケ言ってまとまらず

川西市　米原雪子

居眠りで極楽浄土へ行ったよう
年忘れご馳走食べて皆元気
七年後平均寿命きっと伸び
オリンピック興味示さぬ友九十
ぽかぽかの日差し散歩の杖忘れ

三田市　石原歳子

いにしえを夫と旅した日の温み
歳をとりやりくり旨くなってきた
話し相手いない暮しにやっと慣れ
新品の俎板匂う檜の香
辛党の亡夫の好きな苺ジャム

三田市　上垣キヨミ

今日回忌太く短かく生きた君
人情の話に弱い涙壺
補聴器がまるまる拾う内緒ごと
熟れるまで預るだけの仏さま
菊花展叙勲の友は驕らない

三田市　尾崎一子

十三回忌心の根雪ゆるり解く
菊日和写経の墨もたっぷりと
転ぶなよ家族がくれた散歩靴
祝い酒よばればあちゃんピンク色
年納め歌って踊るボタン鍋

三田市　北野哲男

記念樹は三本柚子と柿と栗
三世代和え物にする嫁の腕
言いなりになってますのと舵握る
床の間で散る梅受ける鏡餅
ライバルで仲間笑わす師でもある

三田市　久保田　千代

無駄もまた生きるこの世に味を付け
やわらかくなったと思う爪を切る
いい方へ流れ沈黙生きている
発想の転換それが別れです
スマートに出来ぬ私のつるし柿

三田市　福田　好文

貧忘れ夢を語ったいろり端
柿たわわ鳥も飽きたか寄り付かぬ
山の宿紅葉と入る露天風呂
裃を脱ぐと治った肩の凝り
恋をして娘俄然強くなる

三田市　堀　正和

青空も雲がなければ締らない
オレオレもチームワークで攻めてくる
左遷地の訛り未だに抜けぬまま
ゆっくりでいいよと催促されている
自然体だんだん似合うようになり

宝塚市　田中　章子

恐竜の好きな孫です肉食系
戸を開けたまま出て何もなかったわ
お雑煮は具がたっぷりの姑の味
わたくしはユルキャラの友持ってます
話し込むとなりあわせたのはご縁

西宮市　秋元　てる

お食事がこれ程大変だったとは
好きな時ひとりでトイレ行ける幸
人間はなどとひ孫も中学生
用意万端整ったのに未だウロウロ
備前焼置かれる場所を選ばない

西宮市　足立　茂

現役のクセが抜けない趣味の会
買わないで一杯飲んだジャンボくじ
生返事で放っておいて出来た借り
年賀状を喪中ハガキに買い替える
ボーナスが無くなったころ消費税

西宮市　緒方　美津子

お節は遺産心して寿ぐ
帯高に今日は淑女で文楽へ
盆栽をいじるばあさま見かけない
孫ら肉わて等豆腐でほっかほか
白髪に帽子目印にはならぬ

西宮市　片山　忠

本来に立ち返らせた負け戦
物の怪も一緒に乗っている電車
ゴメンネと言うには待たせ過ぎた春
警官が飲んで捕まるのも世相
記念日を一度も祝わない夫婦

西宮市　亀岡哲子

職場ではいっぱしやっているか子よ
ワルツならまだ踊れます支え合い
天空の城で育てているこころ
あやふやなところで揺れているロマン
人間の特技みんなで笑い合う

西宮市　牧渕富喜子

行く当もない国だけど聞く天気
身嗜み細身の人にあこがれる
忘れたい事ほど今も思い出す
望郷や心に汽車を走らせる
蟹届く兄も一人で生きている

西宮市　山本義子

朝食がおいしいときは気も温い
朝の宿ご馳走ずらりある喜劇
昨日は昨日しがらみ捨ててあるがまま
ちぐはぐな服を着ていたなあ　昨日
昨日のことはアハハと笑いとばしとく

西脇市　七反田順子

もやもやを大根おろし吸うてくれ
デパ地下の馳走選んで孫と会う
喪中葉書自画像書いてお先にと
シルクロード遺作画展に夫と行く
奥様はまだまだ旅をしたかった

姫路市　古川奮水

錆びてきた右脳時流に乗り遅れ
耐えてきた過去は語らず夫婦愛
正直な人で手抜きの癖が無い
年金の海で師走の波がくる
居酒屋で歌でもうたい忘年会

奈良市　阿部紀子

如月の霜はる土にクロッカス
喜寿迎え同級生と祝う幸
生命保険満期の以降は掛けられぬ
近頃は娘の歳を間違える
ジャズ一筋素敵な八十路ナベサダ氏

奈良市　岩本浩二

渋面をしてると逃げる福の神
気持悪いよ急に優しくなった妻
橋立に昇竜を見る股のぞき
吊り橋のたもとで息を整える
歩道橋横目に睨む老いの杖

奈良市　大久保眞澄

虚偽表示畏れいりますおもてなし
掃除用具添えて父さんお風呂です
活断層の位置確かめて机置く
ダイエットやたらお菓子を買い溜める
ストレッチして足腰が故障する

奈良市　加門萌子

同じ絵を見ているらしい娘のメール
澄み切った冬の空気が心地良い
剪定して咲かせた甲斐の冬薔薇
一年に一度安否を問う絆
ありがたやまだ生きること許されて

奈良市　辻内げんえい

カルテ見ずパソコンばかり見てる医者
危ない橋渡ったからこそ今の地位
ふる里へ帰ればいつも訛ってる
電飾も師走を待てず忙しない
来年の予定ボチボチ要る手帳

奈良市　天正千梢

下手で良い考えている間 救われる
目瞑れば九十年の走馬灯
二人旅何回話せば気が済むの
平凡な贅沢ですが酔っている
知ってても横着者で通してる

奈良市　米田恭昌

薬品の添付文書にある重味
訥弁の真理芯まで突きささる
幸せは鍋と熱燗妻も居る
あの方もあの人も逝き減る味方
何かいいことありそうな台所

生駒市　飛永ふりこ

銀河から父の手綱が喝とばす
苦を越えてはちきれそうな笑みが湧く
新婚の満ちる輝き眩しすぎ
しんしんと雪が真摯に信濃路よ
アルプスの雪から届く応援歌

橿原市　居谷真理子

切り抜ける一番弱いとこ見せて
愛だって涸れるのあげるだけならば
笑おうかこの身を暖めるために
本当の姿は冬に見せてやる
そんな気は鞘に納めておきなさい

大和郡山市　坊農柳弘

貸し借りがちょっぴりあって屠蘇を酌む
聞き耳を立てれば走りだす噂
思惑を見透かされてる雑煮餅
飾らない会話が弾む掘炬燵
やさしさに触れて甘味を増すみかん

奈良県　渡辺富子

はんなりとわびさび詰めているおせち
酒とろり昔の恋がしゃしゃり出る
バリバリの仕事の鬼も丸くなる
生半可な覚悟を笑う膝頭
あたたかい記事を捜しているめがね

和歌山市　岩本美智子

小鳥舞うような琴の音春を待つ
朝のコーヒー一人住いも悪くない
何が好きみかんS寸頼んでる
怖かった風のトンネルやっと抜け
生きることわたしが生きる正念場

和歌山市　上田紀子

国の常識非常識だと言う他国
どっきりが想定外でやって来る
検診の関所難なく通過する
ストレスの解消になる大掃除
飛びきりのサプリメントは良い笑顔

和歌山市　柏原夕胡

百均に囲まれている暮らしぶり
わたくしが泣くと泣きだすぬいぐるみ
ごめんねが言えずしんしんするハート
近頃は男も泣いて勝つんだね
胸キュンの恋してみたい熟女です

和歌山市　喜田准一

身の丈に合うた暮らしで悲ない
無人駅降りて歩けば拾う夢
月替り匂い新たな風が吹く
クラス会過去の噂で盛り上がる
ゆとりある自信が示す受け答え

和歌山市　坂部紀久子

天国へ出したい賀状多くなり
自信満々握り拳が喋り出す
カタカナから取り残されている八十路
子供らは呼べば五分で来る距離に
ご近所の工事迷惑とも言えず

和歌山市　武本碧

君とぼくテンポ合わせて笑い皺
入門書ばかりが目立つお天気屋
丸洗いすれば右脳が弾むかも
九官鳥に箝口令を敷いておく
大輪も蕾も仲間睦み合う

和歌山市　玉置当代

それぞれの個性で映える山紅葉
もみじ葉に秋を満喫したふたり
横にいるだけで落ち着く夫婦愛
七色の薬でつないでる命
食品偽装しても外食止められぬ

和歌山市　土屋起世子

停年が無くて賄いまだ続く
この街が好きで同居を拒んでる
倖せで花とおしゃべりする日暮れ
輪の中で黙って聞くもまた楽し
ごはんですよ誰かに呼んで貰いたい

和歌山市　福井菜摘

幾度の初心にネジを巻き直す
物忘れ笑いころげるうちはよし
気持よく負けて明日の糧にする
相槌を打って会話を丸くする
ハードルを一段下げてトライする

和歌山市　堀冨美子

振り向けば夢中に生きた日が眩し
満ち足りてこれでいいのか自問する
兄姉が家系の寿命書き換える
紅葉の映えに呑まれている私
年金が歯止めをかけた年の暮

和歌山市　松原寿子

巻き戻し亡母のしぐさを追い求め
空回りする淋しさを織り混ぜる
納得をして生き甲斐へ火を点す
ふるさとは空き家で孤独との対話
ちゃんづけに温もりがあり座が和む

岩出市　藤原ほのか

エンディングノートに標す五七五
終止符をうつと方向性が見えてくる
十二月今年も無事に蕎麦を煮る
冬眠をすれば空気が読めてくる
終章の余白を埋めるありがとう

海南市　小谷小雪

だんだんとその場足踏み多くなる
明日から地球汚さずおもてなし
暖色を纏って揺れるねこじゃらし
冬将軍スタミナつけて来たようだ
ほっこりをちょっと下さいルノワール

紀の川市　宇野幹子

元気だと嘘のメールを打ち返す
茜雲風と流れてゆく命
無防備な時間五体が生きかえる
樹海から抜けると愛もたくましい
未知数を追っかけている猫の髭

紀の川市　北山絹子

卵酒飲んで風邪から立ち上がる
救われた命大事にして生きる
困ってる貴方の傘になる勇気
ポケットに夢を詰めてる少年期
金婚へ夫婦茶碗を光らせる

紀の川市　辻内次根

この今を生きる暗示をかけている
黙々と一人暮らしの冬仕度
朝起きて南無と唱える今日がある
動いてないと倒れるから動く
馬齢でも重ねて見えてくる形

田辺市　岡本　昇

針一途祖母の温もりちゃんちゃんこ
鏡見て顔と心を磨きます
明治女越えて来ました針の山
横道にそれる息子に敷くレール
年金を追い越しました薬代

橋本市　石田隆彦

少々の酒で動きのいい頭脳
満月は月に一度の笑い顔
月にうさぎ海に乙姫居る予感
物忘れ一度は記憶した証拠
蜘蛛の巣の建築現場見てみたい

鳥取市　有沢せつ子

ウインドーの姿にはっと背を伸ばす
家じゅうを灯しお隣り今日入居
目を閉じてうれしい言葉かみしめる
体調へ大豆製品欠かさない
すっきりと目覚め始動が出来る幸

鳥取市　池澤大鯰

寒立馬野性に生きる決意する
野性馬の群れは独自のペース維持
蹄打ち出発前に熱り立つ
伯楽を寄せつけず野放途のまま
駿馬産む飼葉研究予念なし

鳥取市　奥谷彩子

親子の要父はしっかり楔打つ
老いの自覚三猿通し日が暮れる
動く足合わす掌もあるありがたさ
日日好日退屈を溶く絵具皿
今朝もまた御飯ほっこり弾む毬

鳥取市　加藤茶人

掛け違いボタンそれから吐き違え
酒が僕裏切る二日酔いの朝
これ今度なんぼになるの消費税
定年後今度は妻の宮仕え
ついそこに居てて不思議な物忘れ

鳥取市　岸本宏章

目の高さ変えると景色まで変わる
本堂の椅子老人のためにある
登下校のときだけ子らの声を聞く
おみくじに凶があるからおもしろい
遷宮が地元潤す伊勢・出雲

鳥取市　倉益一瑤

ジャンケンで大事な事を決めた悔い
進歩した文化に頼りすぎないか
6Bでわたしのまつり書いている
春色を足して軌道を修正す
どうしようジキルとハイド住みついた

鳥取市　鈴木一弘

奥の手は最後の一手ふところに
勲章も戦火くぐってセピア色
腹の虫飼って苦楽をともにする
温度差があるから肌身はなせない
宝物磯で拾った流れ星

鳥取市　竹口清信

苦の種は蒔いた覚えが無いけれど
男ならくよくよするな受けて立て
生涯を仕事しごとで生き通す
甘い汁味を知ったら止まらない
口下手な人に悪人見当らぬ

鳥取市　土橋はるお

焼酎の湯割り加減を教えてよ
寺参りド偉い美人と目が合った
親のスネ齧りぬくぬく暮らしてる
オレオレに持って行かれるよう貯める
身から出た錆がようやくわかりだす

鳥取市　永原昌鼓

生き甲斐をなくし緩んだ老いの箍
涙腺が故障か涙よく洩れる
向かい風程々あって湧くファイト
老いの身も夢への努力惜しむまい
6Bに託して自分主張する

鳥取市　中村金祥

身勝手は出来ぬ婚家の佇まい
ぬか床にぎっしり我慢詰めてある
俳優の素顔に触れてホッとする
旅先で探してるのは喫煙所
可愛さもあっと言う間に通り過ぎ

鳥取市　夏目一粋

地下鉄は景色も夢もないところ
石仏の頭を蹴ってトンボ発つ
叶わない夢など捨てろとは酷い
凸凹と言う字とってもよく分かる
ときどきは男で居たく酒をのむ

鳥取市　西川和子

挑戦の笑ってしまう出来具合
誉められて明日もいい花咲かせよう
スケジュール無事に熟していい眠り
傘寿喜寿二人の景色夕暮れる
お詫び会見グレーが深くなるばかり

鳥取市　春木圭一郎

物や金生かして使う人目指す
持ち味を発揮自他とも幸せに
わいわいと飲めば喜び倍加する
喜んで進んで寄付しいい気持ち
されるより人の幸せ思いやる

鳥取市　平尾菜美

めざすのは紙飛行機の広い空
ゴミの山見ればスラムの子を思い
肩書きをひきずる名刺泥まみれ
折り返す還暦ゆらり父の舟
死なないでみんな手柄と生き抜くの

鳥取市　福西茶子

恵方巻食べる奇妙な顔顔顔
爆発をしたコロッケを今日も食べ
猪口一杯で意識不明になるわたし
臆病か果敢か護憲改憲派
胃ぐすりを飲んで勿体無い通す

鳥取市　前田楓花

午前五時新聞屋さんありがとう
お洒落してときめく人に逢う至福
あったかいあなたに変わる人は無い
日本海照る日曇る日うねりの日
苦労して二人で建てた家に棲む

鳥取市　森山盛桜

青春を飾ったことば今や死語
消毒が効かないボクという依怙地
隠喩では解らぬズバリ物申す
乱読のせいか細切れの知識
答弁の主語をぼかしてばかりいる

鳥取市　吉田孔美子

握手で解る富裕を物にする男
髪切って男も捨ててハイボール
猫笑うわたしも笑う　家族だね
秘密裏に一糸乱れぬサプライズ
くらし潤す海と畑の自給

鳥取市　吉田弘子

昔気質そして頑固な床柱
ひと言が雪崩になっていく怖さ
喜寿過ぎて今日一日の重たさよ
借金は嫌い大物にはなれぬ
ひと手間を惜しまぬ愛の大根煮

倉吉市　猪川由美子

あなた色に染まるの無理よ別れましょ
決められた電池が切れていのち終え
オンとオフ切り替え下手でウツとなり
スタバは無いが県知事踊る鳥取だ
救急車待つ間に下着替えるヒト

倉吉市　山中康子

嫌なことみんな吐き出し青い空
身内以上に通じあう趣味仲間
はにかみの目線彼のつぼに嵌まる
芽が出たらそっと優しさ差しのべる
のんびりとおしどり夫婦妬きもせず

倉吉市　山本玲子

都合よく忘れてしまう過去のミス
冬越しの鉢は廊下を当てにする
素っ気なく切った受話器に悔いている
声援はないが転げていく八十路
予定表忘れるために書いておく

米子市　後藤宏之

窓あけて悩みすっかり放り投げ
葬送に紙銭しっかり入れておく
下手ながら貝がら節を所望され
だいだいをハートマークの色とする
菊人形少し力んでいる模様

米子市　後藤美恵子

ポケットが雑用つめてパンクする
小春日和寸暇を惜しむ蟻の列
野菜刻むリズム乱れる二日酔い
眉間の皺縦より横が目立ちだす
幸せの秤の吟味怠らぬ

米子市　中原章子

新聞でゆっくり結果読んでいる
職務への誇り忘れてしまってる
日日老化現状維持が難しい
詐欺電話いまだ一度も掛からない
古い文整理をします菊日和

米子市　成田雨奇

くり返すうちに方法論できる
忘年会控え晩酌少なめに
忘年会続きドックを延期する
ラジカセの操作忘れて妻を呼ぶ
気が多いだけで多才とひとが言う

米子市　吉田陽子

振り向くといつも未熟なわたし居る
一晩の魔法この世は銀世界
ポケットのないエプロンじゃつまらない
ちっぽけな悩み大きくする孤独
女です呑むより泣いて気を晴らす

鳥取県　石谷美恵子

久し振り来てむつまじく蟹せせり
朗らかな嫁に老後を癒やされる
ぬるま湯に馴れて決定打が打てぬ
朗らかに振る舞うけれど影がある
明日の絵をしっかり描いて早寝する

鳥取県　岩崎和子

若かったワルツルンバと酔った頃
雰囲気に心も揺れたこともある
あの方が居られる場所に光射す
朗らかに鼻歌出る日やる気増す
荒波を偏屈さんと幾山河

鳥取県　斉尾くにこ

極楽へいざなう夜のやさしさ
決断と実行の距離遠くする
メール音ふあっと空がふくらんだ
ふところへ飛び込みそうになる寒さ
投げられたボール拾って置いておく

鳥取県　竹信照彦

上空の寒気に防空識別圏
孫守るインフル予防身を守る
カメムシだ爺ちゃん取って孫が呼ぶ
種蒔いて豪雨で流れ溝に生え
終列車まだまだ明日も走ります

鳥取県　鳥越鬼一

敗戦の反省忘れ秘密保護
ヤマセミよどこへ行ったか「町の鳥」
今年また集落一つ消えました
秋深く猪熊とお出ましだ
すっきりと花一輪のトイレかな

鳥取県　西谷悦子

手に残す生きざま語る皺の数
風の向きじっと読んでは身を守る
楽しみの時間空間仲間なり
親友といれば自然にベール脱ぎ
キャッチボール単調になって静かなり

鳥取県　細田裕花

若い子は元気生意気ちょうど良い
真正面心の友がいてくれる
お元気ですか遠い青春振り返る
主婦の顔脱いで月光浴をする
レールから外れて楽に生きている

鳥取県　松川行男

完結を伏せて鍋蓋水加減
よろよろとバッタ一匹秋の暮
腕白も待って居ります鮨列車
キッとくるヘリコプターのセールスが
神馬でも手綱取られて秋祭り

鳥取県　山下節子

ロボットになれぬ勤務にぐちばかり
てっきりの思い違いで笑い合う
身勝手な振る舞いだけど黙秘する
母さんの料理いつでも五つ星
酔ってます今日の返事は信じない

鳥取県　山本正光

仕合わせで元気であれば愚痴もでぬ
いい友が昔の匂い連れて来る
五十音別に句がありいつもビリ
てきぱきが何だ足腰痛いのだ
余生の身言いたいことも堪えてます

青白い首が記憶を遡る
満天の星にもなにかしら不満
住む世界違って地べた這いまわる
微風から暴風肌の合わぬ人
薄暗い青が昭和の色でしょう

松江市　石橋芳山

安心も味引き立てる地元産
ドラエもん孫は大学見る八十路
寒風に釜揚げそばの癒やし味
趣味は別玄関を出る老い夫婦
国会が劇場みたい幕下ろす

松江市　小川注湖

秋の耳波打ち際に置いている
柚子と柿今日は激しく争いぬ
寄りかかる樹もよりかかる淋しい日
せっかちな猫が半端に爪を研ぐ
一日揺れる　父さんの泣いたこと

松江市　川本畔

お千代さん偲び名曲真似てみる
ピストン輸送のどかな祭り山紅葉
オットット吹き替えに出る出雲弁
弾む日は宙返りする手弁当
日替りのステーキきめて誕生日

松江市　錦織禮子

イルミネーション脱原発は忘れられ
倍返し真心ならばいいのにな
皇帝ダリアはるか祖国が見えるかい
気も新た馬年の幕開けを待つ
木枯らしをすり抜けて行く年の暮

松江市　松本知恵子

嘘ついた夜は微熱が骨を這う
レンジでチンこれが食事の音だとは
去る者は去ったし森も冬支度
バンザイをしてた青葉も物思い
計算はぴったしゲンナマが合わぬ

松江市　松本文子

男とや生きる勇気と死ぬ勇気
寒風に晒すわたしも大根も
屋根裏に住もうか地下に潜ろうか
群れに居て群れの寂しさ身に染みる
徳利の数だけ絆深くなる

松江市　三島淞丘

斐の川の水は昔と変らない
雪だるま熱い涙を流すとも
寒椿今日は無言で赤く咲く
お正月やっと帰って来た娘
春になったら獅子舞が来る小道

出雲市　石倉芙佐子

出雲市　伊藤玲子

忘年句会サンタ帽子でハイチーズ
苦も楽もたっぷり食べたいい笑顔
沢山の出会いと友を持つ誇り
佳い縁をつないで年の初めとす
ここに居るぞと師の寒牡丹咲ってる

出雲市　岸桂子

限界に触れず明日へネジを巻く
裏切らぬ朝の鏡を拭いている
コーヒーを飲んで薬を飲み忘れ
ここはリハーサル次の世に持って行く
カタツムリ自由と家を持っている

出雲市　小白金房子

出稼ぎが戻ると温い土間の風
パンプスの底にもほしい陽の光り
説法へ心を満たす丸い背な
おやしろを巡り太古の森に佇つ
針供養知らぬ女の白い指

出雲市　竹治ちかし

予定表しっかり埋まりまだ死ねぬ
飛び立つ機ねらいながらの羽繕い
生き残るものが正義で死ねば悪
生きるのも死ぬのも法にお伺い
春光の感動あって耐える冬

広島市　岸本清

腹が減りちょっと人間らしくなる
OB会過去の肩書そのままに
殆どは自分でつくる悩みごと
決着は無口な人のひと言で
忘却の彼方の人に夢で会う

竹原市　石原淑子

春よ来い新しい夢ランドセル
生まれてよかった弾ける娘の笑顔
借金は恐い五輪の虹濁る
秘密保護五歳の口に戸を立てる
倖せよ来て来て来てよ恵方巻

竹原市　岩本笑子

ボケて無い証拠にメール打って見せ
ミカンむくテレビに雪は降っている
温暖化地球が風邪をひいている
船が出て行く巡り合いの涙と
薬飲む儀式のように水を汲む

府中市　藤岡ヒデコ

コツコツと歩みを止める事もなく
長いとも短くもあり八十路来る
ひっそりと背丈に似合う場所探す
ケセラセラ弱い女のひとりごと
昨日今日あしたの間に起ること

宇部市　平田実男

金で方つけてしっくりせぬその後
含み針ある花束が手に重い
妻と嫁話がつきぬのが嬉し
心まで素っぴんにする里の風
救急車待つ秒針と睨めっこ

東かがわ市　川崎ひかり

恋を知り秘密の匂いする手帖
ライバルがいつも応援してくれる
使途不明上様とある領収書
修羅越えた女に恐いものはない
年輪と思えばシワもいとおしい

松山市　古手川光

食材偽装三波春夫が嗤ってる
ふる里想う雪しんしんと降る深夜
四季というけじめがやがて消えそうだ
民の声どこ吹く風の永田町
五輪招致で男上げ金で下げ

松山市　宮尾みのり

プライドと誇り間に溝がある
ほんのりの好意異性の友たのし
顔寄せに欲嘲笑う空金庫
神仏鰯も生きるためならば
生と死の狭間で冴える午前二時

西予市　黒田茂代

秋がゆく　くよくよなんかしておれぬ
夕暮れの庭木雀の社交場
自分で自分の宛名書いてる旅の宿
住む人が変わり社宅の庭に花
水仙の蕾二月の風が解く

高知市　小川てるみ

急かせないで私に塩がなじむまで
夕焼けと握手あしたは晴れだろう
ひらめきの一句を食べた夜の枕
波消しブロックはきっと父だろう
秘密保護法軍靴の音がしてならぬ

高知県　小澤幸泉

不器用に生きて上手に死ねますか
天と地と二つに分けた国に住み
主の恵み私の胸を通り過ぎ
年金を減した分だけ生きてやる
白地図を埋める時間が少な過ぎ

熊本市　永田俊子

風が読んでた小春の縁側座ぶとんひとつ
天網恢々逃げたつもりの尻尾見え
流行に負けてる方がふり返り
何を買うにも一思案する余生
鏡の奥に別の私が居てたのし

植木鉢花芽数えて縁に入れ
薄縁を盛り上げに来る食事会
トップ席空いて雑魚だけ泳いでる
地産品贈りあってる兄弟
弟と母を偲んで知る暮し

熊本県　岩切康子

ちょっとだけ背伸びしてみた喜寿の会
口論のあとおお寒い老い二人
記帳所の筆が震える汗をかく
躊躇する父を尻目に娘の離陸
八百万の神それぞれのお考え

唐津市　坂本蜂朗

我が侭も言えぬ梨園の子と生まれ
鋤くわの要らぬ農家のＩＴ化
敵方に廻すと怖いのはおんな
お仕事の出来る先輩臺が立ち
我が家にも秘密保護法あるんやて

唐津市　山口高明

（前月号）

縁日の指輪に秘めた淡い恋
甘言に乗って悔いてる観覧車
前へならえの怖さ知ってる戦中派
終電に乗り遅れても明日は来る
内視鏡で覗かれている罪と罰

堺市　柿花和夫

五濁抄

（つづき）

アレルギー涙・鼻水・くしゃみまで
咳払いするのがくせになった人
オートメーション手造りの良さ遠ざかり
今日は今日雑事忘れて友と飲み

熊本市　杉野羅天

また正月同時に顔の皺も増え
世は平和議会の中は戦争か
年金を待ちわびる日風寒し
ひとり膳旦那の盃前に据え

山鹿市　前田幸子

真正直変った人と見る変人
信号が赤の瞬間甘いキス
ノラ猫が抱かせてくれたとエサ買いに
この辺は人よりネコが頭良し

山鹿市　三谷たん吉

老眼鏡拭いて親しむ秋夜長
振り上げた拳の悔が宙に舞う
どこまでが達筆なのか読み辛い
焼き芋にアドレナリンを出す娘

（前月分）

和歌山市　磯部義雄

新天地へ希望の星を抱いていく
日帰りの旅行今年は但馬路船に乗る
老人に十一月はもう冬だ
東北が燃えた楽天日本一

（前月分）

鳥取市　近藤秋星

川柳塔の川柳讃歌 ⑩

木津川　計

昭和の世語り九条守り抜く

松尾和香

無名歌人の歌が切実になった。「戦争に加担せんとす此国の此日のために九条はありき」が危うい。去る12月、朝日なにわ柳壇今年の最優秀句に選者・西出楓楽さんは「戦せぬ国のモデルである誇り」（鳥居宏）を挙げ、「この句が未来永劫生き続けることを」と。その高い見識に敬意を表したい。

さりながら、朝日歌壇は「知らぬ間に戦争うしろに立っていた秘密保護法そんな気がする」（鈴木節子）を。和香さんの決意に頷く。

五億ほど申告漏れをしてみたい

加島由一

茂木健一郎という脳科学者が3年間のテレビ出演料3億数千万円を申告漏れ、に驚いた。出演料は1割を源泉徴収される。真偽は知れぬが、それで納税義務を果たしていたと思ったとは、どこが脳科学者なのか。

呆れるバカがいて、カジノに注ぎ込んだ総額は106億円！　懲役4年をくらって服役中の三代目は東大出。まことに「売家と唐様で書く三代目」は現代に一杯。由一さんや僕には与り知らない金だらけの別世界がある。

ぜんざいを食べる程度の男です

牧野芳光

ある日、柳吉は蝶子を法善寺境内の「めおとぜんざい」へ連れていき、二杯ずつ出されるのは「沢山はいっているように見えるやろ」と言うのだが、蝶子は「一人より女夫の方が良えいうことでっしゃろ」と。織田作はアカン男に愛すべき女を対比させた。

「ぜんざいを食べる程度の男」を芳光的と言うなら、「余はいまだにぜんざいを食ったことがない」と夏目漱石は40歳のエッセー「京に着ける夕」に書いた。非凡な人は違うなあ。

人生の九回裏の守備につく

木本朱夏

勝利するか、一打逆転サヨナラ負けを喫するか、それが人生と朱夏さんは言うのだ。人は皆、九回裏を背負って生きている。

敗北があり、勝利の人生がある。この正月明け、僕は「ラジオ深夜便」で三夜にわたり「純愛と母性―長谷川伸と水上勉」について語った。共に幼少の頃。母と別れ、少年時代から職業を転々として心優しい大作家になった。九回の攻防の果てに栄光と大功はある。

こっそりと来た人で混む泌尿器科

奥時雄

永六輔は『一般人名語録』で「平成っていうの決めた人たちは、文字面だけの人たちだね。語感というものを考えてないよ」と。

診療区別にある文字面への無神経が腹立たしい。泌尿器の泌は流れる、にじむ意だから問題はないが、泌は秘に通じるから、やはり語感に抵抗がある。いけないのは肛門科だ。便所を化粧室と言うのは文化のセンスであって偽りの装いではない。時雄さんならずとも、恥ずかしがらずに行ける名称にせねば。

窓へ来る雀の顔をおぼえてる

山田耕治

「我と来て遊べや親のない雀」「雀の子そこのけそこのけ御馬が通る」と雀を愛した一茶はいざ知らず、耕治さんは雀の顔を覚えているというのである。警戒心の強い雀が覚えられるほど窓へ来るのは耕治さんが「舌切り雀」の優しいおじいさんに思えるからだ。

ちいさきものを愛する人は誰も抒情派である。だから三好達治は風に吹かれる薊（あざみ）の実を「ああこともなげに、健気な、小さなものの旅立ちよ」と。

（『上方芸能』誌発行人）

自選集

下積みの長さはバネになっていた
鞄の中のケータイはいつもオフ
わたくしの本気を誰もまだ知らぬ
ロックから演歌にしみじみと齢
古い街だなここにも椅子が置いてある

小島蘭幸

炬燵にも上座があって父の席
良心に恥じない嘘で介護する
深夜便聞くお隣も不眠症
認知症心配させる雪が舞う
かたつむり気合を入れた日は有るか

小西雄々

スローライフ見えないものが見えてくる
梅酒が美味しくなって友の忌よ
冬眠の土球根を抱きながら
少し息抜くと気軽になる振り子
躓いた道が教えた生きる道

斉藤劦

木枯らしの野辺の半分ほどあの世
ちんまりと萎まれた師の影を踏む
どの枝も陽が当たるようずれている
オスとオス基本的には睨み合い
正解を出した人から失せるべし

新家完司

短冊に老いの筆先まだ達者
よたよたと指先だけは老いてない
ペンよりも筆に心はこもってる
雑談にいつしか時間忘れてる
卒寿坂まだ盃は離さない

恒松町紅

節電を唱えて派手なクリスマス
雑踏の波若者のルミナリエ
シクラメンポインセチアと冬支度
ふん切りへ背中押すのは風ばかり
門松がとれて頭痛の申告期

津守柳伸

老いひとり猫が覗きに来てくれる
今日はこのネクタイで行く娘の指図
戦争を知らぬ若さで折り合わぬ
一粒のごはんを拾ろておばあちゃん
ひと時の太閤となる天守閣

遠山可住

十二月ポインセチアは騒がない
十二月もみじはちゃんとケリつける
堂々と青首大根冬讃歌
おせちなど我流で好きなものだけで
ローマには行くはずがない道でよい

都倉求芽

地獄にも人が入れる門がある
夢の色まだ紫にとどかない
蛇の昇天豪華なり二月来る
貧しさの穴を大きくして仕舞う
戦争と平和昭和は遠くなり

土橋螢

七十五少しボケねば嫌われる
乱雑な机わたしの全宇宙
テンションが上がると京都弁になる
向い風吹いたら回れ右をする
身も蓋もない話に揺れる冬の耳

西出楓楽

如月や歳時記知らず春を知り
如月ややはり気になるあの神話
如月や媼もチョコをバーゲンで
如月や人事の素案の下準備
如月や薄い暦はだれの知恵

仁部四郎

ほおずきの赤き涙の哀しみや
不死鳥になりたい紙の鶴を折る
終章の母の影絵がいたましい
臨死体験　風が呼びとめる
時刻表　冬物語追いつづけ

波多野五楽庵

「庄内小学校を昭和23年卒の同期生会に恩師として招かれ」

つらかった戦後を生きた影も消え
小学生にかえって歌う笑い顔
男性は今や会社の取締役
歳月は速い生徒が喜寿祝う
花束を頂き感謝のいい涙

林瑞枝

四百句柳壇積んで凄い人
敬老パス行ける句会の三つ四つ
短めがよい裾丈もお話も
天っぺんが見えて余生を楽しまん
ペンを持ち聖書を開き歩く日々

前たもつ

黄昏の足　愛おしむように拭く
常識の範囲で今日の幸せ度
フェルメールいつも私を見てくれる
オリンピック身ぎれいにして待つとする
認知症じわじわ周囲せめてくる

政岡未延子

三宅保州

聞き流すことを覚えてからゆとり
気がすまず医者の梯子をする患者
一引く一は一の残像だと思う
昭和史のボディーブローがまだ疼く
祈るほかなしロシアンルーレット

宮西弥生

友達の訃報がふえていく手帖
札束はどきどき静めない魔物
焼跡の孤独にドアが開かれず
春を待つ枝は形を意識せず
一本松の枝は美学として耐える

八木千代

研修生

花いちもんめ とり残されて初春の部屋
部品損傷なれど春着をととのえる
誰ですか 前列に出たがる人は
言うなれば出来た気分の研修生
正座して待つ影があるそれも数列

両川洋々

活断層の上で原発駄々をこね
憲法九条捨てて日本よどこへ行く
企みのデータは消してから逝こう
倦怠期今日半煮えの飯が炊け
教育の現場なぜだか人が死ぬ

板尾岳人

乳房百句創作すこしずつ孤独
乳房百句犬が吠えても気にならず
乳房百句目をあけると火を噴いてるミイラ
乳房百句死に向って腐っていくリンゴ
乳房百句野獣が落ちていた野井戸

奥田みつ子

元気自慢あっと言う間に病衣の身
四人部屋深い愁いを溜めて静
看護実習私も役に立ったらし
真剣な実習生の赤い頬
夜の病棟ただしんしんとしんしんと

河井庸佑

悔いないかじっくり自省する湯船
旅の思い出自家特製という湯飲み
ほろ酔いで置いて明日も旨い酒
肩叩かれびっくりさせた人違い
シーソーゲーム女神決着まだ付けぬ

川上大輪

ただいまと郵便物が舞い戻る
言うことは無いがと話まだ続く
私のいない所できっと笑ってる
税という首輪じわじわきつくなる
日溜りで時どき心解きほぐす

西宮北口川柳会40周年
記念川柳大会

とき　5月31日（土）11時30分開場
ところ　西宮市プレラホール
（プレラにしのみや・５階）
事前投句（２句、欠席投句拝辞）
締切　4月25日（金）必着

「　福　」　奥田みつ子　選

課　題（各題２句、欠席投句拝辞）

「出会い」　黒田　能子　選
「ときめき」　西出　楓楽　選
「夢　中」　平山　繁夫　選
「　道　」　村上　氷筆　選
「　虹　」　森中惠美子　選
「未　来」　小島　蘭幸　選

会　費　2,000円（軽食・記念品・発表誌呈）
連絡先　〒663-8123 西宮市小松東町3-6-3
緒方美津子（TEL 0798-48-3110）

青谷小学校　川柳クラブ

「気合い」

連休後　気合いでだるさを吹きとばせ　（六年　相見　秀仁）
正月は気合いを入れろウエストが　（六年　黄金　咲希）
今日じゃなく気合いを入れるの明日から　（五年　田中　そら）
気合い入れ走って行く先　福袋　（五年　長谷川奈緒）
宿題で気合い入れるがすぐぬける　（五年　村上　舞）
対決は気合いを入れてやるべきだ　（五年　谷尻つかさ）
気合い入れ宿題したが夢の中　（四年　吉村　茉佑）

温故知新

『谷垣史好句集』より

軽いめまいは美少女の片想い
小公園　乾いた土と老人と
ざるそばを食べて革命など出来ぬ
古い日記の蚊が死んでいる一頁
屑篭の位置まで腹が立ってくる
かぼちゃの絵仲良くするはむつかしき
善人も悪人も死に青い空
生年月日だけは素直に信じよう
わが道は愚直コトコト豆を煮る
母のいない闇の深さを考える
巻頭の一首きびしき冬木立
しんしんと雪は重さがない如く
町内の角を曲がると武装する
核弾頭のような乳房が迫るなり
ハンモック地球はなれて昼寝する
恋は実らず積立は満期
白昼に聞く尺八のニヒリズム
中流と思うわが家は雨が洩り

川上大輪選

松山市　栗田忠士

日めくりをはがすその手をふと止める
引き出しの隅に私の過去がある
ひらめかぬ時は歩幅を変えてみる
わたくしの影を西日が長くする
目も口も達者で知恵が回らない
戦力外と言われてからの這い上がり

瀬戸内市　東槇ますみ

自販機で今日一日の自由買う
新鮮な噂が好きなガムテープ
下り坂少し懺悔をしてみるか
樹海から誘いのメールきて困る
まるい背に時間を刻む音がする
母はいつ起きて寝るのか謎である

大阪府　神野千恵子

右向いて左を向くと冬がいる
ミシュランの星を頼りの味音痴
携帯の海に溢れている仮面
引潮がむき出しにする傷の痕
疑問符をいっぱい持って子が伸びる
三猿になれとお上が言っている

大阪市　髙杉力

円満の秘訣は趣味が違うこと
即答は避けて一応見る手帳
送別の上司置き去り二次会へ
上役が変わりクラブを握り出し
欠席を決めたが理由見つからず
診察で並び薬でまた並び

岡山市　藤成操江

生き下手で風に乗れないシャボン玉
趣味三つ欲張りすぎて実がつかぬ
大切な絆しっかり手で囲う
鉛筆が無理な言葉に行き詰る
避けたいと思う話が寄ってくる
糸切歯プチンと切れたのはむかし

横浜市　川島良子

高齢化今に女の街になる
まだ跳べる余力はちゃんと残してる
信号は赤で気持を整理する
シクラメン独りぼっちじゃありません
一歩二歩今日は重たい靴の音
アクセルとブレーキ羽目は外せない

富山市　有澤嘉晃

住みにくい世でも頼りは両隣
鉛筆を削り言葉を模索する
アンテナを伸ばせばいらぬことも聞く
冗談を妙薬にする生き上手
アルバムに旅のにおいを秘めておく
気配りが迷惑になる親心

和歌山県　森下よりこ

今は昔今度あの世で待ち合わせ
反省は負けと思っている輩
倍返ししない出来ない真似出来ぬ
倍返ししたいが神に任せよう
柿落葉燃やす私の冬仕度
趣味と実益それも結構呆け防止

豊橋市　藤田千休

自分史を嘘と真の綾で織る
プチ家出帰宅時間のメモ置いて
自衛権寄らば斬るぞとスズメバチ
今でしょと買物急かす消費税
食べすぎと内部告発する胃腸
井戸端がうわさ話を垂れ流す

今治市　渡邊伊津志

花道は知らずピエロにあった道
むず痒い傷に悩みの残る日日
お隣に来た庭石の値に疲れ
回れ右して見付かった小さい義理
生きる道だけは急がず歩くなり
蝸牛ともかく家のある強味

篠山市　藤井美智子

あと少し無事に聴きたい除夜の鐘
おもてなしサービス精神見直され
リフォームが元気をくれる主婦の城
判断の甘さが辛さ倍返し
有頂天踊らされてる事知らず
人情が絡み解決鈍らせる

札幌市　斉藤宏子

電話から湯気が伝わる鍋料理
役終えた盲導犬の生あくび
主婦終るさてはて明日の陽はいずこ
少年の脱皮コロンの二、三滴
慟哭の声が聞える喪の葉書
お茶囲む温い空気のデイ仲間

夕焼ける母の葬儀の日と同じ
悲しめば余計塩っぱくなる涙
萎えていく五体を癒す温湿布
相槌を打ったばかりに共犯者
知力体力孫に白旗振るはめに

札幌市　佐藤　登美子

乾杯の発声ばかり頼まれる
多読多捨詩嚢の錆も深くなり
自己主張してるつもりの一字あけ
年ごとに確かめている現在地
羞恥心まだ健在で安堵する

塩竈市　木田　比呂朗

もういいのがまんしないで食べている
うらまないこれも私の運命と
六十五まだ大吉を探してる
口げんかするけど夫好きですよ
まだ内緒孫が生まれるらしいです

横浜市　巌田　かず枝

何かありそうだ甘言並べてる
うるさ型と思ってるのか頭が低い
クリスマスカラーが部屋を温くする
偲ぶ会遺影笑って聞いている
団子屋がなくなっている散歩道

横浜市　長島　亜希子

おどり食い喉を滑って胃にジャンプ
意見箱直接口で言えば良い
もっともと感心しても手は抜けぬ
犬もくわぬ夫婦喧嘩に吠える犬
雪積んで走る車に車庫がない

江南市　脇田　雅美

無垢な目が硬い心を溶きほぐす
髪少し刈ったらパパと気付かれず
今の知恵二十の頃に欲しかった
四季の風優しく香れ樹木葬
その口調しつけの域を越えますよ

長岡京市　日置　みどり

妻の罠わかっていても落ちてみる
せやねではピントがずれた時もある
ビリケンの不潔と言えぬ足のうら
句作りの途中で脳がストライキ
強引な押しの一手が仇となり

大阪市　浅井　公平

私の鬼には鬼は内をする
六花舞う渡り廊下で合う視線
もらってももらえなくても困るチョコ
冬の底梅一輪に救われる
春を待つ辛夷よここが正念場

大阪市　栃尾　奏子

大阪市　橋本典子

重箱にゆり根赤かぶ肩寄せて
笹舟に涙を詰めて流した日
日溜まりの中で気づかぬ幸福よ
古里のお日様食べた富有柿
駄馬でいい己の生を全うす

大阪市　藤田武人

高そうな土産はそっとつまみ食い
疑問符が答えをひとつ突き詰める
瘡蓋がやさしくふさぐ僕の過去
世話ばかりかけ偉そうにしてしまう
大脳を振ってアイデアを搾る

池田市　上山堅坊

この一年残せたものは何だろう
保険証薬相棒一人旅
妻逝ってやっと素直になりました
弱点もみんな晒して元気です
道楽の域まで来たな趣味の道

河内長野市　大島友子

こてんぱんやられはっきり目が覚める
サプライズこんなに涙残ってた
前宣伝釣られ上手に釣り上手
ああ飲んだ明日の事は運任せ
身の程を考えろよと釘さされ

河内長野市　辻村ヒロ

買物は親の財布について行く
朝帰りポチにしっかりチェックされ
微笑んで探りを入れる今朝の膳
老眼鏡ここだと返事してほしい
今が春楽しく過ごす呪文です

河内長野市　穂口正子

大丈夫神の御告げも外れます
いやな気分抛りに行きます映画館
蕩けさすつもりか孫が抱きついた
みやげ屋を巡り続けてバスツアー
プロ野球終わり無言の箸の音

岸和田市　中岡香代

僕の名と同じ名が載る訃報欄
リストラの影がちらつく床柱
日溜りが隣に座る一人旅
コンビニでいち早く知る季節感
夕焼けが沈む心を湧きたたす

高槻市　原洋志

意にそわぬもの切り捨てて冬の風
煮崩れの話題テレビが繰り返す
いろり端兄弟みんな雄弁家
引き算も足し算もして探す明日
口コミを宝にしてる縄のれん

富田林市　中村　恵

いろはから始まる下戸の酔い心地
途惑いの水で薄めた言葉尻
忘れねば今日へ昨日がのしかかる
奥底に抱えた雪は溶けぬまま
見守ってあなたの生きる杖になる

寝屋川市　岡本　勲

次の世は無口な妻をめとりたい
夜遊びも火あそびもせず終りそう
老夫婦ぼやき合っての年の暮れ
歌きこえ父の長湯へやや安堵
ワンチャンス生かし切れずに無位無冠

羽曳野市　藤原大子

川柳で気付かなかった私知る
嘘言えぬ人なんだろう口ごもる
太鼓判押され弱気になっている
どちらかどうぞ言われ煩悩頭出す
した覚えないが済んでるこの不安

八尾市　赤木妙子

転ばぬ先にと杖が私を指図する
故郷から野菜に添えて雪だより
身の程の幸だと思う家族の和
独り居のラーメン三分待つ至福
汗流しすこし人間らしくする

八尾市　田邊浩三

子は宝孫はダイヤで曾孫待つ
人並みに呑んでるつもりなんだけど
禁酒より僅酒の方が難しい
世界遺産の前で良かった偽装食
眠るのが楽しい歳になったのか

神戸市　木村忠義

競争は去年の僕とすると決め
大器晩成彼の根性には負けた
やってみる一日一句日記帳
あわてないとしよりらしくゆっくりと
枯れ葉踏むと痛い痛いと言う声が

神戸市　輿水　弘

共白髪明日は毛染めで旅支度
わたくしの実りの秋がリバウンド
揺れに揺れ夫婦になって重石に
砂時計少しゆっくりしませんか
地震かな貧乏ゆすり刺す視線

神戸市　冨永恭子

除夜の鐘覚悟促すように鳴る
まあいいか何とかなるさで明日が来る
全力でお支えします両の足
スポーツジムおしゃべり付きで頑張れる
そんな事枝葉の事と捨て置けず

百歳で五輪見るぞと母元気
迷ったら無難な方を選ぶ癖
12時になる前に寝るシンデレラ
汚染水真綿のように首絞める
震災の復興を問うルミナリエ

神戸市　能勢利子

母さんの誕生日なら忘れない
編み込みのセーターいつか着てくれる
ええ格好してはるあなた かわいいな
写真には本当のことだけ映り
そんな時言って下さいはっきりと

三田市　上田ひとみ

入院の電話に一つ深呼吸
古里の鍋に笑顔がふきこぼれ
美容院老猫(ねこ)の具合も聞いてくれ
浄土だな風も色づく床紅葉
テロ現場何もなかった事にされ

西宮市　福島弘子

持て成しは一輪飾る藪椿
おでん屋の湯気がさらった今日の労
針に糸通せないけどまだ女
巾着の針目で分かる鼻眼鏡
年おいて化粧だんだん魔女になる

和歌山市　さかたきく

思い出し笑いで福を呼んでいる
退屈を知らずに過ごす有難さ
目で学ぶ料理番組メモるだけ
ふかし芋昭和の味が今も好き
老い二人余生思えば角がとれ

和歌山市　福呂秀子

高齢者ふえて福祉が喘ぎ出す
妥協せぬ木は真っ直ぐに伸びている
背を向けた机に悔いがつきまとい
好調を維持するための茨道
連立を組んだ夫婦の共白髪

紀の川市　楠原富香

枯木立同じ方位におじぎして
歳月を生きて曲った骨ばかり
点滴にすくわれて来た手よ足よ
愉快だな右も左も梅の花
風の日は風に押されて七変化

田辺市　大峠可動

病院のタイムに慣らす身の置き場
お見舞いは背筋を伸ばしノックする
バタバタと空気が動く院のドア
甘え癖少女時代がひょいと出る
蜘蛛の巣の一途知っても払いよけ

鳥取市　大前安子

長生きもほどほどですと欲をいい
訳ありと言われ好奇の灯が点る
欲の皮へコんでしまう隙はない
わが妻の〇〇偽装十八番(おはこ)です
人柄の偽装で続く五十年

鳥取市　谷口回春子

仲人の香たる言葉に身がちぢむ
浅学に辞書からもらう一行詩
やさしさが誤解招いて板ばさみ
罪一つかくしています手の中に
立つ位置を一寸はずして言ってみる

倉吉市　岡﨑美知江

よくもまあ無利子無担保五千万
レストラン疑心暗鬼で食べる肉
来年はできぬ計画など立てぬ
少しだけ持って生きたい隠し味
寒い夜は柚子湯に漬かりひとっ節

倉吉市　中村毅

わたくしの取り得はひとつ笑顔です
年の瀬に心が寒い財布まで
さんま焼くねこが一ぴきねらってる
あきらめた心の弱さ身にしみる
この酒が寒い心を泣かせます

倉吉市　堀かずこ

日めくりが老いの一日指図する
老い暮しねたがだんだん尽きてくる
血圧が上り下りして生きている
すたこらと昭和通って八十路きた
閑な老夢楽しみに早寝する

米子市　加藤正二

夫婦でも心の中は踏み込まぬ
私のそれから思い寝付けない
若駒の手綱緩めて独り立ち
サラブレッドに負けない太い足で立つ
足音で今朝のご機嫌聞き分ける

米子市　野川宣子

貧しさを御方につけてエコ暮らし
生きるとは時時マジで考える
不景気の後姿に憧れる
あと一歩心残りが明日の糧
中国のニュースはパンダだけでいい

米子市　湯浅俊久

寝坊して時計の針が笑ってる
布と針持てば楽しい時もらう
大袈裟な事ではないが悩み出す
堪えて来た道程だけど宝物
自分から離れた言葉消せはせぬ

松江市　山根邦代

雲南市　菅田かつ子

気持だけ焦り結局片付かず
一病を持って話の馬が合い
陽のあたる所へ心干しに出る
道端の花に見とれて躓躓き
老妻と呼ぶなよファイト持って居り

岡山市　前田恵美子

もう少し謎があったら魅力的
お正月早く来いとは唄わない
時々は心の窓を開けに出る
六十路過ぎ写真撮るのはお断り
生き方は上手じゃないが本気です

竹原市　若年幸子

理由ありのいつも大好き市場籠
金髪の住職秋を掃き清め
太陽に恋をしたのかアイソンよ
国民の耳塞ぐ気らし秘密保護
ビルばかり人がどんどん小さくなり

竹原市　土井輝恵

ごみ戦争あれこれ猫と知恵くらべ
嗚呼介護世話にならぬと言えぬ壁
倍返し怖いひびきの流行語
もう一品レンジの中で忘れられ
老人会力仕事はみな女

山口市　中前幸子

冬の呪文さらさら積る細雪
負の美学落とした運は拾わない
遮断機が降りてわたしの影消える
ふるさとへ向かう在来線が好き
棚田に落ちた月ひとつずつひろう

松山市　神野きっこ

竜宮へ赤間神宮誘い込む
てっさから春帆楼が透けて見え
海峡の冷えふく汁で温まる
驟雨浴び厳流島が吠えている
門司港のおもてなしです焼きカレー

大洲市　花岡順子

リセットの時期へ未練のない銀杏
困ったら猫に相談してみるか
年金の値下げ通知へ寒くなる
倍返し土下座背中がうそ寒い
年の瀬へ家電一つが故障する

唐津市　北村松風

校庭にあって使えぬ焼却炉
喝采を舞台裏できく黒子達
若き日のマドンナ今は九十九髪
米寿きた望み小さく卒寿越す
付添いの妻が疲れて舟を漕ぎ

四季の彩きりとり歩くボランティア　札幌市　富永恵子

冬景色菊のきれいな年となり
十勝晴れ肌さす風が一級品
コンサート聴いて今年の締めくくり　弘前市　須郷井蛙

立ち読みが出来て本屋で待ち合せ
日本中活断層の上にある
値段より採りたて美味し自家菜園
標準語無理に話して舌を噛む　弘前市　髙森一呑

無防備に手抜きしている冬の森
海に降る雪は自由な好奇心
囲炉裏にはでんと構えた鬼が居る
着膨れた妻はコタツで冬眠中　弘前市　吉川ひとし

瞬きに視界が狂う二十五時
出世魚なぜか税が上がらない
仏壇の父に呼ばれて正座する
りんご摺る母の笑顔を見たくって　つくば市　嶋本喬

お正月塔誌枕に初夢を
婆株価爺チャンバラのテレビ権
定年後婦唱夫随の日が続く
垣根越しリンゴと柿が往き来する

二人きりは新婚よりもぎこちない
繰返し読む親友の見舞状
少し厚めの海苔でパリッと手巻き寿司
達者だけが取り柄の自信くずれ去り　東京都　井上つよし

すぐ怒る笑ってすます度量欲し
理念です真実一路まっすぐに
卑怯です昔の話今さらに
補欠でも運根意地で甦り　東京都　大竹一良

しんどいねライトアップの葉っぱ達
お薬を見つけて遠く逃げる犬
お湯割の美味しい時期がすぐそこに
いい夫婦言いたい事を伝えてる　東京都　髙岡弥生

我が家でも特定秘密保護したい
お財布の中身確かめ「梅」にする
母さんの味を雑煮で真似てみる
生き甲斐に長寿メニューも添えておく　川崎市　成田せいじ

買って来て積まれる本の運不運
クロスワード一人遊べる小半日
五年日記去年と同じとも書けず
変な言葉が今年も賞賞う　佐渡市　髙野不二

道標読めぬ他国で車駆る
右側通行時に間違う曲り角
秘密保護妻に言えないこともある
歯車になり町内の役こなす

岐阜市　平野　あずま

悲しいな年相応で生きている
生きられる親友がいる八十路坂
眠るふり席をどうぞと言わぬギャル
ポックリさん確約したい願い事

静岡市　渡辺　芳子

指痺れ検査重ねて加齢だよ
復活を願うゲートの愛好者
御免ねと時期の外れた墓参り
戦中派病弱組が今も生き

熱海市　三谷　圭角

師走入りピンポンの鳴る頻度増え
片付けは捨てることなり分かってる
今年こそ整理誓った部屋不変
看護師の顔見て上がる血圧値

愛知県　樺　嶺志

信じられぬ元気印の妻入院
にわか主夫ただただ右往左往して
冷凍食チンして食らう味気なさ
大丈夫目で合図してオペ室へ

京都市　清水　英旺

川柳にしばしば我を見つめてる
無理押して皆に迷惑かける羽目
ほろ酔いで暫し悩みに蓋をする
日当りの窓辺は花に譲ってる

大阪市　宇都　満知子

産声が幸せくれたありがとう
山の幸箱いっぱいの草いきれ
取り柄なし努力と根気だけがある
つまずきが揺り動かした馬鹿力

大阪市　内田　志津子

果てもなく鏡の国の女たち
いつまでも身体の中を雨が降る
今日ひとつちがう道行く意味はなし
秘密法次に来るのは砂嵐

大阪市　梅里　南天

見つめられ見つめ返して恋芽生え
方向は間違いないと横車
父が抱き母が手に持つ千歳飴
顔合わせ昔にもどる老仲間

大阪市　大治　重信

気忙しいふりをしている年の暮れ
ボケるのも神さまからの贈り物
幸も不幸もみんな私の糧になる
美人に弱いお金に弱い僕である

大阪市　太田　としお

大阪市　柴本ばっは

睨まれてますます好きに仁王さま
頑固おやじやんわりとかすお母ちゃん
浪花節上手い教師で好かれてる
サラダッ子鯛の旨さは知らんだろ

大阪市　寺本実

追伸にちょっぴり毒を書き添える
きっちりとつけた家計簿赤になる
目障りな金だポケットに入れとこう
そこどいて世界遺産が見えへんわ

大阪市　前川善之

信楽は器で見せて味をたべ
原発は村の絆をずたずたに
隠す秘密隠し切れない人の口
マイホーム妻の力が物を言う

大阪市　松田聰

拙速がぴったりとくる秘密保護
法案を人気の影でゴリ押しす
宛名書きカウントダウンお正月
ロボットに掃除を任せ昼寝する

大阪市　吉田知之

列見るとつい並びたくなってくる
本紙より重い広告腹が立つ
公用車公私の区別してますか
食文化大阪だって負けてない

堺市　近藤治子

倹約し貯めた大金使えない
三食を妻の手料理味自慢
年始め笑顔で開く一ページ
始まりは何だったかとこの喧嘩

堺市　羽田野洋介

この歳まで法には触れることもなく
大丈夫いつも通りの散歩です
上背に加え奥行ほしいもの
記念写真目立ちたがりは真ん中へ

堺市　山﨑早苗

暑いから寒いと言う日間なし
出席簿きらきらした名並んでる
「食欲ない」最後に言ったのいつだろう
試着して買わずに返すようになり

堺市　大和峯二

川柳で学んだ世間奥深い
人生は苦労の坂をこえる旅
好きだけど好きという程勇気なく
人生は苦楽の坂と覚る古希

泉大津市　助川和美

満ちたりて旅の終りに土産買う
ふくしまに白いきれいな雪が降る
惚けてない自負する我にネジを巻く
弱点を見せない夫にくたびれる

発車ベル二人に別の音で鳴る　泉佐野市　稲葉　洋
お幾つと聞かれこだわりない歳に
二ン月の寒さ割増す税その他
間の抜けた欠伸よ春を待てず出る

不器用でまだ三猿になり切れず　貝塚市　石田　ひろ子
やあお元気まあどうにかと笑い合う
天性の明るさ家を飾る嫁
ど忘れを叱って笑うひとり言

性格を枝打ちされてすぐイエス　河内長野市　藤塚　克三
ぎっしりの予定の夢に寝汗かく
低気圧張り出す妻に及び腰
機嫌悪そう急いで食器洗う俺

池ポチャで大金逃げたあの一打　河内長野市　渡邊　修
一日が逃げて行くよに通り過ぎ
宿題の答え出せるかＴＰＰ
独裁で恐怖が匂う北の国

パソコンに口三味線は効かぬ囲碁　高槻市　三谷　白黒
おはようは金のかからぬ潤滑油
秘密保護何が秘密か　秘密です
弱くても高価な基盤悦に入り

お喋りで癒し癒されボランティア　豊中市　荒木　郁子
息子から義理チョコらしいお裾分け
友からの絵手紙春を連れてきた
お祝をしなくちゃ今日も生きている

鏡餅その頑張りが好きだった　豊中市　源田　啓生
明暗の続きは向う岸で読む
般若心経中の宇宙は謎ばかり
人間は未完のままで終るのか

柚子たわわ棘にさされぬように摘み　富田林市　関　よしみ
哀しみと肩組み合って切り抜ける
私年女スタートに入った
真向きな介護に響くわらべ唄

先輩の薄い情けをまだうらむ　富田林市　肥山　一文
裕次郎歌えば昭和よみがえる
素うどんを食べてあの頃思い出す
裏切りの哲学ゆれるかずら橋

目・耳・口ふさいで何処へつれてゆく　寝屋川市　荒川　鈍甲
お静かに画に語らせよ無言館
内部保留したたり落ちたことはない
わさび田に私と遊ぶ黄セキレイ

雲を見て雪を恐がる老夫婦
昼下り朝刊幾度開くやら
テレビ番サプリメントの知恵が付く
こんなこと出来ないのかと妻がやり

羽曳野市　磯本洋一

新年の手帳にワールドカップ日よ
午年やおばあちゃんもうがんばらぬ
恨みなし夫に貰った風邪だから
雑巾がけして筋トレをしています

羽曳野市　安本美喜

怖いもの台風竜巻放射能
汚染処理せまい日本に場所が無い
知らなかったそれはおかしいトップの座
講演会終る拍手で目が覚める

枚方市　河田洋子

長命もくたびれる日々趣味多彩
度忘れを濁して逃げる決まり場所
ガラス越し湯豆腐のゆげ老夫婦
早朝の走る若者白い息

枚方市　坂本ミヨノ

偽物を食べたお客が味自慢
セレブたち自慢の肉は加工肉
社長さんそれは無いぜと料理人
名案が無いのにイバル評論家

枚方市　松原保

コンサート余韻鎮めるこぬか雨
駄作だがケースに納め家宝なり
止まれない光のトンネル トコロテン
太閤さん光の饗宴いかがです

藤井寺市　田付絹枝

夢多き未来に気持ち切り替える
二〇一四年も素敵な年を望んでる
九条を守る思いを忘れない
したたかな心で自分苦しめる

松原市　市川雄太

迷い事はひらり三次元に飛ばす
石蕗の黄色師走のアクセント
シクラメンの柔らかな白掌に
ひとひらの枯れ葉が落ちて微弱音

松原市　大嶋信次

ボージョレで乾杯酔いが心地よい
景気よくなったと言うがピンと来ず
門限を破り締め出し星と居る
球音がまだ青き春連れてくる

箕面市　寺井柳童

悔しいと思えるうちはまだできる
年賀状積み上げ自慢だった父
掃けど散るグラッと幹を揺すりたい
羽子板は正月飾るだけになり

箕面市　村田恵子

一年がだんだん早くなる馬齢
取り出しは命がけです核燃料
円安も私の財布底を突く
政界の離合集散茶番劇

八尾市　前田紀雄

同じ種蒔いて大根出来不出来
出来そうで出来ない予定日の短か
それらしき気温に目覚め今朝の冷え
リハビリにかける夢あり今日も行く

大阪府　小栢こずえ

あの人の若気裏切る顎の線
何億も当たれば私箍切らす
同窓会偲ぶ若さもフォルティッシモ
ひらけゴマ年金日なのＡＴＭさん

大阪府　高木道子

散歩道拾う小さな詩の種
農日誌後で読めない走り書き
八十路入り刺激なき日を望む日々
鈴虫の声にカーテンそっと引き

大阪府　畑中節子

気温差に秋の洋服出番なし
青春の思い出深い京の秋
終活に揺れる心が定まらず
レストラン高いメニューにご用心

神戸市　井上忠貞

おはようと朝の鏡は弾んでる
化粧取る夜の鏡はセピア色
風向きを読んで去り際考える
新春へ未来占うカード繰る

神戸市　玄番美恵子

去る者がきれいに見えてくる誤算
ノンアルも混じっています飲み仲間
訳ありの影にひかれる母性愛
活舌で脳も刺激のラリルレロ

神戸市　松井文香

百までと問うが迷惑首の振り
旅テレビ観ては膨らむ足擦り
誰も来ぬ干支の午なと友とする
野望燃えたアトリエ静か胡坐かく

加東市　岩本美緒子

ライトアップ皆をなごませ別世界
一病と仲よく過ごすわが余生
忘年会優先席へ誘われる
もしもとも書き残す紙引き出しへ

加東市　黒崎美紗子

国中の監視カメラに見張られる
三猿で嫌な世の中遣り過ごす
健保にも無事故割引無いのかな
元々は赤の他人と思い知り

川西市　大坪一徳

心技体気分一新お正月
地に還る落葉にもある残り福
隙間風なき世は苦し秘密部屋
ご冥福祈るやさしき紅葉の掌

川西市　日野岡　和之

スペアキー城持つまでの共稼ぎ
老い独り人の情けの仲に住み
踊ってる孫のひらがな威勢よく
コンチキチ鉾の流れにロマン追う

篠山市　石田　久子

年賀状出そうか止めか迷う人
小春日にずっしり重い訃報くる
ごめんねと互いに言って霧はれる
この冬はいのちの坂の何合目

篠山市　北澤　稠民

首いくつ有っても足りぬ本音有り
旅あいま一期一会に吐く本音
燃え上がるカップルすぐに燃え尽きる
空っぽの腹で命と対話する

篠山市　酒井　健二

踊り子の心に宿る和の絆
あっさりと私欲を捨てた身の軽さ
霧の海未来を託すランドセル
築城を支えた民の底力

篠山市　佐々木　勇

膝交え任せておけと言えぬ歳
ゆっくりと霧があがれば里の秋
天高く行事に追われふらふらに
何曜日確かめあって老い二人

三田市　足立　つな子

お化粧も芸のうちどす舞子はん
おもいきり背筋伸ばして転けました
オレオレとおとなぶる孫心配や
婆でないマミーとお呼び孫躾

三田市　今西　廣子

いつのまにわたしあなたのくすり箱
白内障季節はいつも春がすみ
ひろい読みあつめてみれば知識人
一〇五歳見送る顔は稚児のよう

三田市　木村　マユミ

脱ぐまでは思いもよらぬ曲線美
プールしたはずのヘソクリ見失う
そのうちに運がむくから寝て待とう
良い妻をつないでくれた俄雨

三田市　雑賀　一泉

師走には用も無いのに急ぎ足
若者の政治離れにある不安
ご近所の兼ね合い聞いてお布施決め
ＣＭにやたら子役の出番増え

三田市　多田　雅尚

便利よさ知って若いが紙パンツ
歳なのかはいの返事もテンポずれ
素面では弱音が吐けぬ飲み仲間
税の声アレルギー出す年金者

三田市　辻　開子

どうなった芽生えた恋の行きどころ
ほしかった切手と共に来た通知
目標は達成したが夢は追う
消費税声なき人の夢を喰う

三田市　野口晶子

いつまでが俺の寿命か小石蹴る
この値札物の値打ちか場所代か
金婚式我慢は俺だ私だと
栖鳳の獅子のたてがみ羨まし

宝塚市　丸山孔一

熟年の集いて語るうらおもて
熟年が語らう五年後の自分
まだ散りたくないとしがみつくもみじ
紅葉を愛でて食べて人生を惜しむ

西宮市　株元玲子

幸せはこんなもんかと五十年
間違った文字にも意味がありそうな
涙目に弱い男であり続け
報連相する人になし冬の夜

西宮市　藤本直

衣替え春夏秋冬早過ぎる
あべこべにひ孫に絵かき教えられ
師走声急にふところかるくなる
脳トレに階段かぞえて登り下り

三木市　山口久子

これ以上言えば喧嘩になる議論
卒業期住民票が島を出る
四十路まだ白馬の王子待っている
裏門の鍵は諭吉が持っている

南あわじ市　萩原狸月

時々は三猿になり波立てず
電話口大きな声でつい返事
シンプルな暮らしに慣れて足るを知る
訳有って年に二回の生まれた日

奈良市　尾畑なを江

クラス会待たずに友は先に逝き
楽しさの残る昨夜の食べ残し
楽しみは小兵頑張る大相撲
タンゴ曲蹴り出す脚のなまめかし

奈良市　高橋仁志

大絵馬に馬よ駆けろと願い込め
駿足に景気回復期待する
正義感あまり強いと弾かれる
寝ていても脳は休まず句を作る

奈良市　前田弘恵

羊の数間違えだしてやっと寝る
計報増え細るばかりの住所録
とも角もいろいろ埋まる予定表
人恋し熱燗が呼ぶ路地の風

奈良県　谷川　憲

薬などあろうはずない恋病
尻尾振る犬になりたくない序列
一生を終える哀しい籠の鳥
それなりに計算をしている娘

和歌山市　磯部義雄

紅筆をゆっくりと引く初鏡
春夏秋冬いつも喜劇がそばにある
吹っ切れてしっかり帯をしめ直す
生きていることが芸術かも知れぬ

和歌山市　北原昭枝

診察前元気ですかが癖の医者
褒め上手叱り上手で子が育つ
謝罪用手引あるのかみな同じ
バンザイを毎朝させる通勤車

和歌山市　平田元三

複雑な人の心に遊ばれる
見回して幸福感を持てる幸
裏街道なつかし過去に逢いたくて
ゆく先は神と息子に頼みます

岩出市　村中悦男

嬉しい日のお出かけ母の赤い服
二二んが四友と競った下校道
喜寿を越え傘寿も越えて未だ未完
八十年無駄足たんと踏んだ跡

田辺市　小川イセ

新年は私の年だ駆けてやる
餅つきの音聞きながらおはぎ食う
遊覧船波高ければ船に酔い
祝儀相場にしても二十五万円の蟹

鳥取市　近藤秋星

自己評価するには汗の量足りぬ
ロボットが人類襲うかもしれぬ
独り居の私を影が覗き込む
五千万私も欲しい無利子なら

鳥取市　坂本とも湖

ありがとう一言加え丸くなる
七十路合った温度で生きてゆく
腹で飼うぜいたく虫が金を食べ
青虫の試食は許す無農薬

鳥取市　高原かおる

真ん中に座るあなたは影もたぬ
霜月は繰上げ法事増す出費
家事苦労当然と見る男衆
賞味期限切れたバナナに倒される

鳥取市　津村律子

調べれば出るは出るはの偽装品　鳥取市　山下凱柳
古希過ぎて生きるテンポがずれだした
全没にへこんでいてはおられない
身勝手な理屈いつまで続くかな

倉吉市　田中紀美恵

洟垂れ小僧すっかり今は美男子だ
ゴキブリは飼ってはおらぬがわんさいる
心臓に臆病風が住みついた
臆病をわくわくに変え生きてます

境港市　中井虎尾

識別圏関係ないと鳥は飛ぶ
一流は偽装し高い二流食
出世して変身しても友は友
日本はスパイ天国秘密保護

米子市　生田和之

山陰の地名豊かな古事記読む
司馬遼を何度読んでも飽きが来ぬ
病院と句会に行く日髭を剃る
訃報一つ郵便受けに投げ込まれ

米子市　池岡たけし

老楽の時間余って寝てばかり
寝てばかり居ては身体の毒になる
奇妙です今の満腹もう忘れ
見上げれば行き先問えぬ雲の群れ

自動ドアーどんなお方も通りゃんせ　米子市　小野鶴子
モルモットかあれが駄目ならこの薬
知事の舌のらりくらりと金が舞う
増税で槌の音響くここ彼処

米子市　田村周子

見えないが心の壺は深かった
山茶花が庭の片隅飾ってた
馬走り飛躍の年にして欲しい
年とって音が聞こえぬもどかしさ

米子市　見山温子

紅葉は今日でしょうがと娘が誘う
物干し台老いた証に低くする
値上りは三月もすれば馴れてくる
ほのぼのと親も着飾る七五三

米子市　森脇麗

揺さぶられ燃えるものありまだ女
死ぬるまで女おんなの炎を抱いて
冬に向かう心構えを一つずつ
夫の字を眺めて酒にたどり着く

鳥取県　飯野菖子

大空の嘘はどこにもないと言う
旅の夢ちらちら浮かぶ老いの道
指令する脳を信じてまだ生きる
予備のない今日一日を無駄にせぬ

遠い耳悪口だけは良く聞こえ
外野からやんわり攻める詰め将棋
来年も歩くつもりの靴を買う
日めくりを数え児が待つクリスマス

鳥取県　大塚　美代子

死に花の良さに人間見えている
生身とは時には罪も抱いている
夫婦でも考えていること違う
結婚は出来たが別離待っていた

鳥取県　下田　茂登子

節電をかかげて寒い冬が来た
寒い朝寝床抜けるも一苦労
愚痴減って今は無口になってきた
去年まで出来た仕事が出来ぬ今

鳥取県　橋谷　静江

信念が無いので何時も振り返る
建前で本音が言えぬ過去がある
手前味噌我流で練るが受けも良い
酒と金蹟き転び馬齢積む

鳥取県　吉野　いさお

奇跡感じてててのひらを重ね合う
恋心わざと隙間を見せてくる
恋の海泳いでいのち永らえる
不思議です松田聖子は歳取らぬ

松江市　相見　柳歩

皆脱いでくしゃみ出そうな冬木立
北風に干し柿甘く育てられ
方言に孫とは話通じかね
皺しわの手で共同の干支作り

松江市　武島　千代枝

辻褄を合わせて妻の顔になる
極上の悪玉菌を飼っている
蹴飛ばした丸い石にも笑われる
無添加の私偽証罪にされる

松江市　藤井　寿代

この坂を越えれば楽になるだろう
攻めてこそ新しい道できてくる
バロメーター笑顔の僕が道しるべ
脳回路やっと戻って快調だ

出雲市　黒目　英男

元気良い返事この子は何になる
日本はしあわせやせる食事あり
健康食深夜に見せてどうする気
嘘つかぬ写真悲しいしわの数

雲南市　松本　昌

爺独りどうにか今日も無事暮れて
極楽で再び夫婦になろうぞよ
儂にとってこれ以上ない女房よ
なあお前小さな幸せだったけど

安来市　原　煩悩児

健忘症ならまだいいと笑い合う
弱点をさらけずぶとく生きている
朝刊が入るとエンジンがかかる
削り節あればなんとかなるお味

岡山市　丹下　凱夫

一枚になった暦がよくしゃべる
ゴミ収集車過食気味です年の暮
腐葉土になる土になる現職のカラ捨てて
南天の実が熟れましたお正月

岡山市　永見　心咲

あれやこれ手を出しすぎて行きずまり
はまってた育成ゲームなくなった
社交ダンス年輩ばかり皆元気
後ろ美人インストラクター何歳か

倉敷市　安東　モモ

逆剥けて親不孝かと自問する
羨んでばかりの心悪とする
ゴミ出しの無い日布団を出られない
肩凝りもほぐれぬ内に年も暮れ

玉野市　片岡　富子

不出来の子じっと抱いてる自選集
ローソクは私ＬＥＤにはなれぬ
ゴミの中から拾う罪のないゴミ
人生は耐えるだけでは意味がない

備前市　森　ふみか

ここそこの紅葉名所に負けてない
病院で久びさに会うお隣さん
カルチャーと暦に書いて食べ歩き
忘れたと素直に言えぬ老いの意地

岡山県　池田　たか子

木枯らしが背中丸めてついて来る
飴玉を取り換えただけの初恋
剪定をすればカラスが来て笑う
鉄の鍋母の十八番は団子汁

岡山県　田中　恵

粗大ゴミにされたくなくて散歩する
春よ春蛇口の水も弾んでる
限りなき未来を抱いて風を選る
話の輪みんな噂を植えつける

広島県　馬場　利子

控え目が却って目立つ舞台裏
先端で折れてしまった自尊心
前向きに生きると決めて後ろ見る
惚けず寝こまず健康祈る老い卒寿

宇部市　高山　清子

老妻の動けば動く火よ水よ
ざあっと巡って動物園の鳩といる
新聞の死亡欄読むあわてずに
一日一善子供のころを懐かしく

香川県　田口　彦六

四国中央市　藤原　久

シャンソンを味方に銀杏葉を降らす
書き残す一筆箋にあるドラマ
吊し柿亡母と重ねて皮を剥ぐ
伍健師の句碑を訪ねる冬日和

高知市　三谷　待太郎

惚けごっこいずれ本番スリル満喫
日和雨それがまた効く痴話喧嘩
鏡見りゃ此岸彼岸の百面相
柚子湯用よければどうぞ穫り残し

香南市　桑名　孝雄

ガンバロー正月ふたつして米寿
半年で友が三人訃報欄
十人を割ってもやるぞとクラス会
安定剤も酒も飲んでる老いの坂

福岡県　本田　さくら

赤紙で兄は戦地に行ったきり
満洲のくらしを亡父に聞き忘れ
捨てようと思う未練が邪魔をする
孫が好きときどきタマがもっと好き

北九州市　小松　紀子

七十三今も旬ですボランティア
好きな事自由に出来て老い楽し
湯タンポのお陰気持も暖かい
終活で遺影院号用意ズミ

（杉野羅天さん・前田幸子さん・三谷たん吉さん・磯部義雄さん・近藤秋星さんの句は44頁にあります）

佐賀市　清水園　實

初詣でお守り買って孫にやる
挨拶も社交辞令ですますわれ
正月もテレビの後は薬漬け
減反も昔と同じ農の道

唐津市　岩崎　實

なるようになるさ結論急がずに
天晴れの無形遺産に我が和食
釘づけに達人奔放絵と遊ぶ
このはだか夕べの風にしてやられ

唐津市　吉冨　節子

愛の鞭より無謀な鞭が多くなり
浮き沈みあって人生深味でる
友が詐欺に馬鹿ネと言って詐欺にあう
説教も馬耳東風の子が多し

佐賀県　門井　孝

温泉は三度入らねば効果なし
七〇路悔いのない日はありません
年寄りは嫌われますよ要らぬ世話
忘年会何度やっても悔い残る

佐賀県　真島　久美子

明後日の方向ならばこちらです
つなぎ目が見えないように笑います
そのままとこのままでいい距離にいる
寒そうに見えているなら謝るわ

西尾　栞句抄

（定本『西尾栞句集』平成八年発刊）

応接間の金魚逆立ちしてくれる
暗がりに梅の香と知る始発駅
平家村つめたい水の湧くところ
急行の停まらぬ駅の良い桜
老梅の孤独を愛す崖っぷち
路郎忌や美濃の大八備後の亜鈍
花屑をあつめてボート屋暮れ残り
督促状と一緒に入った花だより
夏休みの学校蝉の鳴くところ
夕立は土の匂いをかがすなり
夕涼み一人となって星を見る

横町の雑音

靴磨き磨きたい靴前を行く
牛肉屋のおっさん理事の名刺くれ
成金の趣味は日の出の軸に見せ
万引きの哀れ子供のもの許り
持って死ねなんだらしい銀行から樒
税務署と言えばシャックリとまったり
大臣に紐がついてる阿呆らしさ
まあまあ栄転の方だっしゃろとは淋し
机へ脚のせてボーナスの話なり
有難い弔辞額にも入れられず
見送りの時間をきいて遂に来ず
嘘ついて寝た夜の天井低いこと
死んでまで薨去卒去と段があり

新川柳鑑賞 (24)

麻生　路郎

息子卒業菊の翁にまだ成れず

（静観堂）

息子は大学を卒業したが、家業はまだまだ譲れない。従って菊を作って余生を楽しむと云う訳にはいかない。いつまでも現役で働き続けなければならないという近ごろの老人の心境を詠んだ句である。

還暦はちょっと恪気もしてほしい

（一　哲）

還暦を迎えたが、老人になった気がしないのが今の還暦人である。しかし、うちのおじいさんがと老妻はスッカリおじいさん扱いをするものだ。すこしは妬いてほしいと言うのが幾ら年とっても男性の通有性かも知れない。適度のよろめき、適度の恪気が男女のつながりをいついつまでも保持するのであろう。

還暦迎う

老人のつもりで居たり居なんだり

（遠　二）

昔と今では還暦に対する観念が違って来たようである。

一般に寿命がのびた関係もあろうが、六十一になっても、老人扱いをされたり、されなかったりするし、自分でも、老い込んだという気もするし、まだまだという気もするのである。そこをこの作者は巧くつかんだのである。近ごろは孫が出来てもおじいさんと言われるのをひどく嫌う人たちが殖えたようである。この作者にも、そう言った気持が多分にあるのだろう。

こいさんも早や還暦に近くなり

（一　伸）

船場の古いのれんの末っ子に生れ、みんなからこいさんこいさんと親しまれたが、こいさんが結婚適齢期の頃には家運が衰えていたので俗に云う帯に短かし、襷に長しで、良縁が得られなかった。

これというきずもないのに、月日は瞬くまに流れて五十も過ぎ、六十近くにもなってというのである。一篇の哀史には違いない。

邪魔にされ大事にされて八十九

（芳　仙）

年老いて、何んの役にもたたなくなると、つい邪魔がられる。そんな時に養老院の話などを聞かされると余りいい気持ちはしない。ひがまいでもいいことでもひがむものである。

しかし、一方では老人の日だの、敬老会だのといって大事にされると訳もなく感激する。幾ら高齢になっても、これが人世だと悟り切ることは容易ではないらしい。

敬老会笑う力もなかりけり

（香　林）

八十幾つ、九十幾つ、ながく生きたと言うだけで、敬老会に招かれる。もう眼がうすい、耳が遠い、水ばなをすすりあげる。全くザマはない。

笑う力もないとは哀れな話である。この句、老人にとっては実に痛い句である。

鼻かんで貰って敬老会に出る

（鉄　洲）

「おじいさん、あんた、きょう敬老会のおよばれやな」

「何言うてんね、ちっとも聞こえんがな。」

「ケ、イ、ロ、ウ、カ、イや言うてまんね。」

「ああ、そうか、きょうやったな」

「もう、そろそろ行く時間ですよ」

「オー、そうかい、もう行く時間かい。」

「あんた、鼻が出てまんがな。」

と鼻をかんでやる情景が巧みに描写されている。

英語 de Senryu ㉖

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim HORNE
(岐阜保健短期大学)

クイックスロークイックスロー古稀を華やかに

quick and slow, quick and slow,
a seventy year old
dances gaily

女が下車(おり)たので岩波文庫読む

as she gets off
the train
I take out and read Iwanami

～リバーウィローのため息～(短詩形文学の国際化2)

先月号で『国際化した日本の短詩 *TANKA ,HAIKU, SENRYU*』を紹介した。川柳人の中には英語による川柳に興味を持ったとか、自分の川柳を英訳してみたいと思われる方があるかもしれない。「川柳のよさは外国人には理解できない。翻訳してもニュウアンスを伝える事が出来るわけがない」と初めから決めてかからず、やってみることもまた楽しい。上記の書物の著者の一人である速川和男が、川柳の英訳に付いて示唆に富んだヒントを「英語センリュウの作り方」に記しているので引いてみよう。

(1) どういう句を選ぶか

①俳句にまかせた方がいいと思う句より、人間臭い句で、海外の人にも注釈なしで理解できる普遍的な内容のもの。

②古い川柳観を捨てて、主観的な内容の句も含めたい。

③日本人はユーモアに乏しいとの定評を覆したいが、狂句とは一線を画するように注意しよう。

(2) 翻訳の際にも出来るだけ難しい語彙を使わず、誰でも楽しめる句にしよう。

(3) 翻訳すると原句より長くなる傾向があるので、省略を重視しよう。

(4) 原作者の意図とずれる恐れがあるので、翻訳者は補足を避けるようにしよう。

(5) 三行訳が一般的であるが、句によっては三行でない方が自然の場合もあると思う。

(6) 可能ならば日本語が理解できるネイティブ(対象言語を母国語とする人)に翻訳を見せて、参考意見を聞いた方がよい。但し、文脈を無視して語学的見地からだけでチェックしてもらわないように注意しよう。

翻訳することで川柳の新しい発見と可能性が生れてくるかも知れない。自作川柳の翻訳で川柳への思いがさらに深くなるのではないでしょうか。

参考文献：速川和男、川村ハツエ、吉村侑久代著『国際化した日本の短詩 TANKA ,HAIKU, SENRYU』(中外日報社 2002)

誹風柳多留一二篇研究 8

山田昭夫・石川道子
小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男
清　博美

55　**御子孫の甲斐もないのハ原田なり**

山田　『日本史伝川柳狂句』23には、本句に傍注して「顕秘録に曰ふ、系図正しき九州原田の末孫・幼名弁之助」とある。九州原田家とはどのような家系なのか分からないが（ご存知の方はご教示賜りたい）、その原田家の御子孫の甲斐の無いのは原田甲斐だというのだろう。

甲斐はいわゆる伊達騒動で悪役とされるが、山本周五郎の『樅ノ木は残った』では、忠臣として描かれているから、真実は如何なのだろうか。

弁之助時分ハ安芸もほんに誉　八五19
時平のしそんらしいハ原田なり　安九智3

細井　賛。拙稿「源氏車」（季刊古川柳129）では、榊原政岑は先祖の大恩恵を受けています。原田甲斐がやったことは悪事そのものだから……。

伊吹　賛。歴史上の人物は二面性があると思います。

清　賛。

56　**御めかけの一門あまたうかみ出**

山田　殿様の御妾となり、そのお陰で親には扶持が与えられ、兄や弟は士分に取り立てられたりして、一族郎党その余慶にあずかることになる。

をら殿さまと一家だと二本きめ　筥四7

しかし、

親るいにろくなのハ無ひ玉のこし　拾三8

なんて揶揄っている御仁も居るよ。

なお、主題句は、謡曲『舟弁慶』の「西国にて亡びし平家の一門、おの〳〵浮み出でたるぞや」の文句取。

清　賛。

57　**納豆もたゝきあきると春が出る**

山田　納豆は塩辛納豆と糸引納豆と大別されるが、「塩辛納豆は蒸した大豆にこうじ菌を接種してこうじ豆を作り、塩水にひたして発酵させてから乾燥したもの。古くから寺院の食物として作られ、浜名納豆・一休納豆・大徳寺納豆・唐納豆・寺納豆などの称がある」（「日国」）。塩辛納豆は六月ごろから作りはじめ、それを寝かしておいて、歳暮あるいは年玉として檀家に配った。

年玉を寺ハ夏からこねまはし　拾一15
合羽かこあけて納豆壱つ出し　安四松3

寺納豆は、納豆汁にして食べる。納豆を叩いて、磨りつぶして、味噌を加えて、だし汁でのばして、豆腐や葱などの具を入れるのである。

主題句は、この納豆汁も食い飽きた頃、ようやく年が明け、春の出番となるというのである。

清　賛。

58　**月までに文の来る事十五たび**

山田　八月十五日の月見は、吉原の大紋日。それを仕舞ってもらうのに、遊女からの「文の来る事十五度び」。十五度びは十五夜の利かせ。

雲をつかんで十五本文を出し　二八3
月の文長サがおよそ十五ひろ　四六17

清　賛。

59　**ゑひす講ふじのぶらつく程酔ハせ**

山田　恵比須講。「①陰暦一〇月二〇日に、主として商家で商売繁昌を祝っておこなうえびす神の祭。親類知人を招いて祝宴を開く」（「日国」）。その祝いの酒で、客に「富士のぶらつくほど酔わせ」た商家は、駿河町の呉服屋・越後屋であろう。

越後の切通し富士のミへる所　傍二9

越後屋は、通りの両側に店舗があり、通りから富士山が見えた。

ゑひすかう酒ハ三石一斗入り　安七義2

清　賛。

60　**かん病に女つ切れも見せぬなり**

山田　腎虚。女が原因の病気なのだから、当然、看病に女の切れっ端も見せられぬ。なんともけったいな病気ではあるが、古人曰く、「過ぎたるは猶及ばざるが如し」。

ばからしい病気女を見るもどく　一四9

清　賛。

61　**江戸ものが九条通りの道をあけ**

山田　謡曲『羅生門』。ある雨の夜、源頼光たちが酒宴の時、「九条の羅生門に鬼神の住んで、暮るれば人の通らぬ由」という話が出る。

一しきり東寺をむごくさびれさせ　傍三30

それを聞いた四天王の一人渡辺綱は、

羅生門綱おれが行べいといひ　一二41

そして羅生門に出向いて、その鬼神の片腕を切り落として退治した。九条通りは再び人通りが復活する。

羅生門腕に覚へのある手柄　九七35

渡辺綱は武州箕田（三田）の生まれだから、「江戸もの」。

氏神ハ八幡と綱申上ケ　二六14

清　賛。

62　**はつかつほつらをしかめてよんで来る**

山田　亭主に言われて、女房が初鰹売りを「面をしかめて呼んで来る」。初鰹だなんて、まさに狂気の沙汰だと思っているのだ。

はつかつほ女房の声で呼びたらず　二二40

女房と半いさかいてはつかつほ　明四梅4

はつかつほ女房のよぶこわいうち　天五義2

清　賛。

63　**まくぐしの先キへのびるをくゝしつけ**

山田　幕串は「幕を張るために立てる細い柱。幕柱。幕杭」（「日国」）。

花見か野掛けか、幕張りに使った幕串に、供の者が野蒜をくくし付けて帰るで、叱られた。幕を張り巡らせる程なのだから、かなり身分の人たちの一行なのだろう。

琴箱へのびるを入れてしかられる　安四松1

石川　賛。しかし、叱られたというのは不要でしょう。例句の琴箱へ入れると、さすがに叱られるでしょうが。

清　同。

愛染帖

新家　完司　選

亡夫より素敵な人が見つからぬ

神戸市　能勢　利子

（評）このように言って貰えれば亭主冥利に尽きる。しかし、「見つからぬ」ということは、素敵な人を探しているということか？

大阪市　太田としお

抱きしめていいか二十歳の孫娘

（評）幼い頃には抱きしめて頬ずりしていた孫娘。いつの間にやら眩しい成人になった。これからは「軽いハグ」程度にしておこう。

羽曳野市　宇都宮ちづる

目標を小百合に決めて磨く古希

（評）いつまでも若々しい吉永小百合だが、3月の誕生日には69歳になる。ハードルは高いほうが良いが…。かなり磨き甲斐はある。

河内長野市　坂上　淳司

グルメ派の味覚試していたホテル

（評）ホテルから料亭までやっていた食品偽装。グルメを気取っていた輩はホゾを噛んでいるだろうが、B級グルメ派は笑っている。

河内長野市　穂口　正子

試着室自分の顔が気にいらん

（評）ニューモードには何の文句もないが、その上に乗っかっているレトロな顔がそぐわない。交換できるものなら願いたいが…。

堺　市　加島　由一

覗くだけ顔でのれんを押してみる

（評）飲兵衛の習性もいろいろ。「覗くだけ」と言っているが、暖簾の隙間から空いている椅子が見つかれば座り込むのだろう。

大阪市　栃尾　奏子

陣取りも無論夫の負けである

（評）国家間の領土争いは難儀なものだが、家庭内の陣取り合戦は簡単。温厚で謙虚な亭主が「おまかせ」と引き下がれば済むこと。

鳥取県　竹信　照彦

テレビ見てあそこは行ったなあ妻よ

（評）「あっ、ここ行ったなあ」「行った行った、いい景色だった！」そのように語り合える思い出をたくさん作っておきたいものだ。

大阪市　谷口　義

ご主人のおられる家は行きにくい

（評）家庭内では存在感の薄い亭主でも、外から見れば嵩張って鬱陶しい。奥さまの客が来る日には外出させられる亭主も多い。

大阪市　奥村　五月

薄味も妻の心の味がする

（評）塩分控え目も野菜多目も、体を気遣ってくれてのこと。どのような料理も作った人の「こころ」「ビタミン愛」が入っている。

河内長野市　山岡冨美子

有り合わせの膳は日中韓になる

唐津市　仁部　四郎

市営アパートボタ山跡で空いている

米子市　後藤美恵子

らくらくと釣れた魚の小さいこと

和歌山市　平田　元三

街灯が教えてくれる水溜まり

長岡京市　山田　葉子

ロングスカート穿いてハラハラさせている

居場所には君の温みが今もある

堺　市　内藤　憲彦

フクシマを真ん中に書く日本地図

メロン提げ見舞いに行って風邪貰う

堺　市　矢倉　五月

久々に会えばスマホを持ってはる

その話乗ったと酔うて言うたらし

岡山市　丹下　凱夫

ラーメンをすすり水洟啜っている

酒飲んで早寝早起きならできる

青森市　守田　啓子

難聴の母の余白を何色に

母性とは白より白い葱の白

大阪市　江島谷勝弘

なれなんだ心が広いニンゲンに

モノクロの冬は私もカラス族

岩出市　村中　悦男
息抜きのつもりが抜けず五七五

東かがわ市　川崎ひかり
目標は一日五句の五七五

堺　市　澤井　敏治
指揮権を発動しない脳となる

大阪市　板東　倫子
ひょっこりと赤ちゃん島が誕生し

豊橋市　藤田　千休
地産地消嫁は地元の娘をもらう

奈良市　大久保眞澄
永代供養ほっとかれても怒れない

倉吉市　牧野　芳光
空気よりかなり濃いめの夫婦です

大阪市　大川　桃花
美しいクモの巣誰も褒めぬけど
手と足が揃ってしまう時がある

橋本市　石田　隆彦
ベンツの横なるべく避ける駐車場
鬼太郎と目玉おやじに出会う旅

和歌山市　古久保和子
純情な親の心を突く詐欺師
たっぷりの時間が悩みふくらます

大阪市　古今堂蕉子
がんばってます逆立ちのマヨネーズ
居酒屋の扉は天国へ続く

三加え三引き今はまた二人
次々と殺すテレビは消すとする

京都市　高島　啓子
百歳がほんとにゴマン居る日本

西宮市　緒方美津子
幻の酒注いだところで目が覚めた

米子市　竹村紀の治
簡単にみえる年期を積んだ技

佐賀県　真島久美子
惚けないで長生きという大事業

高槻市　初代　正彦
一番はスマホ二番はこの命

松山市　神野きっこ
面白い話はちゃんと覚えてる

鳥取市　春木圭一郎
へそくりが高利回りに騙される

寝屋川市　平松かすみ
甲午きっといいことやってくる

弘前市　高瀬　霜石
スッピンの方が私らしくなり
ミサイルの始めはきっと豆鉄砲

吹田市　木下　敏子
焼き鳥はいただく唐揚げはやめる
貴重なり喧嘩仲間に飲み仲間

松江市　石橋　芳山
幸せが詰まっています予定表
気をつけて歩きなさいと石地蔵

ドクドクと怒り竜巻注意報
一日をつついて卓袱台の会話

堺　市　奥　時雄
大物に見えたルーズなだけの人
飲み足らぬままに万歳唱和する

松江市　錦織　禮子
究極はめしに味噌汁ほっとする
またピンチ私の神は忙しい

姫路市　古川　奮水
閉店の間際おでんの種を買う

大阪府　小栢こずえ
晩学の抽斗ついに空になり

池田市　上山　堅坊
災害時略奪しない日本人

和歌山県　森下よりこ
一人ぐらしになって喧嘩と縁切れる

三田市　足立つな子
喧嘩できるおふたりさんが羨まし

藤井寺市　鈴木いさお
行け行けどんどん引き算は苦手

藤井寺市　太田扶美代
くどくなる会話わたしが老いてゆく

河内長野市　村上　直樹
古びても愛車と妻はこのまんま

倉吉市　岡崎美知江
むつかしい字は書けぬとも勘で読む

大阪市　坂　裕之
忙しい方が体の調子いい

三田市　上田ひとみ
寒くても犬と夫は散歩行く

海南市　小谷　小雪
ニッキ飴一つで元気出る三時

大阪市　髙杉　力
パチンコで勝ったとビール奢られる

西宮市　牧渕富喜子
むかしはと一寸言いたい時がある

広島市　岸本　清
行儀よく足湯に並ぶ膝小僧

鳥取県　斉尾くにこ
ばあちゃんの役する今日は地味な服

枚方市　伊達　郁夫
坊さんが空き缶蹴ったのは内緒

京都市　桝本　宏子
青春よ遠くなったね裕次郎

弘前市　稲見　則彦
酒替えるお口直しの檸檬水

藤井寺市　鴨谷瑠美子
水で顔洗う首すじまで伸びる

鳥取市　岸本　宏章
宇宙から見る山陰の灯が暗い

箕面市　広島　巴子
耳鳴りが止まぬ煩悩多すぎる

つくば市　嶋本　喬
ホームへの入居決まって老母活気

京都市　三宅　満子
掃き寄せた落ち葉焚けない世の流れ

枚方市　松原　保
運まかせこんなゴルフで進歩なし

鳥取県　大塚美代子
宴会に一つ加える安来節

大洲市　中居　善信
リレー競技に戦車のような男たち

米子市　見山　温子
年金前嫁がおでんを持ってくる

東大阪市　北村　賢子
スッピンも私と解るいい人や

富田林市　山野　寿之
家の愚痴ワッと包んでゴミ袋

神戸市　冨永　恭子
落ち葉踏む音聞きたくて遠回り

唐津市　北村　松風
干し柿を揉むたび一つ味見する

鳥取市　永原　昌鼓
まだ八十へこんでばかりいられない

松江市　三島　淞丘
紙コップほどの夫婦の祝い酒

岡山市　永見　心咲
優待と聞けばスラスラ歳を言う

堺　市　羽田野洋介
ぼんやりと過ごせる時間大切に

芦屋市　黒田　能子
その内にあなたどなたと言いそうだ

大阪市　田浦　實
手の平で遊んでいけと蘆舎那仏

鳥取市　夏目　一粋
お互いに歳をとったな影二つ

シドニー　坂上のり子
屁理屈で返されたから知ったキャラ

大阪市　藤田　武人
ワンピースりぼん靴まで履く小犬

富田林市　片岡智恵子
風邪引かぬのも芸のうちだと幸四郎

泉佐野市　稲葉　洋
百戦の騎士も孫にはギブアップ

米子市　森脇　麗
食べ方の順番変えるダイエット

川西市　山口　不動
悪ガキの老いに驚くクラス会

寝屋川市　籠島　恵子
いろいろとあった事など無しとして

吹田市　野下　之男
王将を歌えば元気やったるで

大阪市　藤原千恵子
今日からは電気毛布で夢の中

倉吉市　中村　毅
歳下に老人クラブ誘われる

奈良県　渡辺　富子
あれこれを捨てて余ってきた夫

三田市　北野　哲男
裃と仮面外して好々爺

八尾市　髙杉　千歩
おたやんの面で二月の鬼を待つ

大阪市　岩崎　公誠
弱点を丸出しにして人間味

弘前市　高森　一呑
フクシマは危篤の侭で海を向く

豊中市　松尾美智代
束の間の命うかうか生きている

三田市　久保田千代
不器用を見てる器用が腹を立て

高槻市　富田　美義
過去形で語る落ち目の物語

長岡京市　日置みどり
育ジイと半分こしてオムライス

塩竈市　木田比呂朗
新米と卵で真の和食です

大阪府　桑田ゆきの
みかん一つ転ばし赤子笑わせる

河内長野市　渡邊　修
山ほどの宿題解けぬＴＰＰ

大阪市　笠嶋　恵美
くたびれて自律神経急降下

岡山市　藤成　操江
他人から見れば立派に高齢者

豊中市　藤井　則彦
合格点妻は呉れない皿洗い

唐津市　吉冨　節子
想い出と腕組み歩くひとり旅

奈良市　尾畑なを江
持ち上げも落とすも早い日本人

米子市　生田　和之
鴉さえも寄らずたわわな柿朽ちる

富田林市　関　よしみ
イライラを止めてふんわり料理する

枚方市　丹後屋　肇
我が財布アベノミクスが掻き乱す

鳥取市　鈴木　一弘
マイペット奇妙なけものなまけもの

藤井寺市　田付　絹枝
もう師走医者も治せぬバタバタ病

日高市　根岸　方子
両親の旅路を辿るフルムーン

大阪市　佐藤　忠昭
応援か愚痴っているのかトラファン

河内長野市　大島　友子
満たされた暮らしですねと人は言う

篠山市　遠山　可住
男ひとり味噌汁くらいなら出来る

鳥取市　吉田　弘子
お隣の父さん元気土日留守

大阪市　伏見　雅明
家中が返上迫る免許証

大阪府　畑中　節子
カラオケが薬になるか気が晴れる

高知市　小川てるみ
カラオケの点取り虫がいて疲れ

大阪市　神夏磯典子
カラオケの声で嫁から叱られる

河内長野市　辻村　ヒロ
声が好き目を閉じ歌に聞きほれる

高槻市　原　洋志
解らぬは解らぬままに美術展

堺　市　大隅　克博
解らない時も知ってる顔しとく

鳥取市　西川　和子
集まれば痛い話で盛り上がる

河内長野市　梶原　弘光
新法が荷崩れのまま突っ走る

八尾市　宮﨑シマ子
男手なし修理代なしそのまんま

四條畷市　吉岡　修
お答えがなくても時計進みます

貝塚市　石田ひろ子
豪邸の落ち葉わが家の庭で寝る

鳥取市　竹口　清信
痛い目に遭って人間知恵がつく

藤井寺市　増井ヨシ枝
初詣でポチの分まで手を合わす

河内長野市　藤塚　克三
通夜の席内緒話が丸聞こえ

大阪市　榎本　舞夢
念入りに礼状書いて出し忘れ

富山市　有澤　嘉晃
年金の歩幅で決める旅の距離

三田市　今西　廣子
宝くじ罰を受けても当たりたい

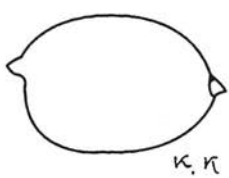
大阪市　津守　柳伸
長男の嫁しきたりを語り継ぐ

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　738句）



「明　暗」　竹治ちかし選

明暗を繰返しては生き延びる　熊本県　岩切　康子
病む母へ明るい会話だけにする　高槻市　原　洋志
富士見峠に富士山がない富士旅行　篠山市　遠山　可住
七億円当たらない人当たる人　大阪市　江島谷勝弘
アルバムに楽しい過去と嫌な過去　富田林市　片岡智恵子
人生ゲームみんな勝者でみな敗者　河内長野市　村上　直樹
男なら勝たねばならぬ武士の道　鳥取市　土橋　螢
同じ飯食べてピエロとヒーローと　鳥取市　倉益　一瑤
しがらみの明暗みせる熨斗袋　高槻市　富田　美義
白線に落ちたサヨナラ逆転打　鳥取市　岸本　宏章
お化粧の仕方ひとつで生きかえる　三田市　辻　開子
発表日跳ぶ子しゃがむ子泣き出す子　茨木市　藤井　正雄
六十年前に戻せぬ取り違え　三田市　福田　好文
暗闇を這い出て青い鳥に会う　和歌山市　堀　冨美子
原発で潤った後消えた街　三田市　北野　哲男

「明　暗」　大内朝子選

取り違え六十年の明と暗　大阪市　井丸　昌紀
明暗の境界線は活断層　京都市　清水　英旺
ガラガラポン明暗分けた玉の色　出雲市　伊藤　玲子
明暗が瞬時に変わる株世界　奈良県　谷川　憲
七億円当たらない人当たる人　大阪市　江島谷勝弘
無党派の動きで決まるだるまの目　札幌市　小沢　淳
明暗のひと騒動を見た遺産　富田林市　中井　アキ
明暗を分けた近道まわり道　長岡京市　山田　葉子
明暗の昭和語らず逝った父　橿本市　石田　隆彦
原発で潤った後消えた街　三田市　北野　哲男
避難指示無視した人と聞いた人　奈良県　渡辺　富子
急ブレーキ命拾いの一秒差　堺　市　澤井　敏治
板一枚浮かべぷかぷか生きている　松江市　松本　文子
運命は時に厳しく明と暗　高槻市　杉本　義昭
暗転し主役が代わる児童劇　弘前市　稲見　則彦

ドラフトで一位どうしが投げて打つ　河内長野市　渡邊　修
危機迫る鞍馬天狗はまだこない　三田市　野口　晶子
トンネルの先にはきっとある出口　三田市　上垣キヨミ
のほほんと森と遊んだ日から鬱　青森県　松山　芳生
人様の明暗　ご気楽に噂　大阪市　原田すみ子
明暗を分けた近道まわり道　長岡京市　山田　葉子
地球儀のウラとオモテの明と暗　三田市　多田　雅尚
明暗の狭間で揺れる弥次郎兵衛　箕面市　広島　巴子
明暗を分ける切り札切るチャンス　松江市　三島　淞丘
人の世の明暗くぐり抜けて喜寿　豊中市　水野　黒兎
明暗もあって男の顔になる　茨木市　島田　誠一
明暗を分けたその日の朝の道　高知県　小澤　幸泉
今まさに切取線の真上です　佐賀県　真島久美子
ガラガラポン明暗分けた玉の色　出雲市　伊藤　玲子
明暗の中間程を泳いでる　鳥取県　西谷　悦子
なつメロで綴る昭和の明と暗　堺　市　柿花　和夫
人生を分けた伴侶の明と暗　大阪府　籾山　隆盛
終戦記念日の裏側は祭り　和歌山市　柏原　夕胡
人生の明暗分かつひとと逢う　米子市　後藤美恵子
運命の岐路で明暗分ける神　奈良県　渡辺　富子
泣いて笑って生きてこの世の明と暗　橿原市　安土　理恵
明暗を神や仏に決められる　米子市　後藤　宏之
運命は時に厳しく明と暗　高槻市　杉本　義昭

明暗は背中合わせにあるこの世　尼崎市　長浜　美籠
目覚しに覚めず一年棒に振る　篠山市　酒井　健二
一瞬の躊躇が明暗を分ける　東大阪市　佐々木満作
胸底の闇を隠している笑顔　富田林市　中村　惠
明暗が失せて単調日が長い　河内長野市　藤塚　克三
勝敗の明暗分けるど根性　鳥取市　春木圭一郎
満月の裏はまっ暗闇である　京都市　高島　啓子
明暗を分けた迷路のみぎひだり　大阪市　古今堂蕉子
有頂天の先に待ってた落とし穴　大洲市　花岡　順子
ハネムーン見送り通夜に急ぐ足　大阪市　津守　柳伸
明暗を分ける結果を知るカルテ　高槻市　富田　美義
人生の明暗かけた契り酒　田辺市　岡本　昇
明暗を分けたガラスの靴である　三田市　久保田千代
人生の明暗判るナビ欲しい　玉野市　片岡　富子
親のエゴ明暗分ける子の未来　大阪府　米澤　俶子
のほほんと森と遊んだ日から鬱　青森県　松山　芳生
明暗を分けた見合いの席の酒　八尾市　田邊　浩三
特攻の出陣順が生死分け　堺　市　村上　玄也
金婚の夫婦明暗ヒストリー　松江市　錦織　禮子
キャンセルをして災禍から免れる　弘前市　福士　慕情
モノクロの映画自分の色で見る　大阪府　神野千恵子
明暗もあって男の顔になる　茨木市　島田　誠一
母さんを立てると妻は出ていった　和歌山市　柏原　夕胡

今も昔も別れ男女の明と暗　寝屋川市　荒川　鈍甲
明暗を分けたあの日のあの言葉　岩出市　藤原ほのか
明暗が失せて単調日が長い　河内長野市　藤塚　克三
考える葦もゆれてる夜昼と　大阪市　柴本ばっは
モノクロの映画自分の色で見る　大阪府　神野千恵子
明暗の明の部分で生きている　和泉市　横山　捷也
よろこびの影で小さく疼くもの　西宮市　亀岡　哲子
賽の目はいつも味方と限らない　和歌山市　古久保和子
輝いて生きると影も美しい　大阪市　小谷　集一
明暗は予告もなしにやって来る　西宮市　福島　弘子
明暗の明の心地で米を研ぐ　寝屋川市　籠島　恵子
人生を明と暗とでチャラにする　大阪市　内田志津子
板一枚浮かべぷかぷか生きている　松江市　松本　文子
明暗をわけた所によって雨　尼崎市　藤井　宏造
口紅をおとせば冬の顔になる　橿原市　居谷真理子
明暗分けるその後の蟻と螽斯　八尾市　村上ミツ子
明暗の定めを背負う絵馬が揺れ　貝塚市　石田ひろ子
明暗が続く人生こんなもの　出雲市　岸　桂子
神さまも明か暗かとまだ迷う　京都市　都倉　求芽

秀　句

明と暗神の少しの匙加減　東かがわ市　川崎ひかり
日の目見る命葬られるいのち　東大阪市　北村　賢子
明暗へ神は無慈悲な賽を振る　鳥取県　石谷美恵子

お化粧の仕方ひとつで生きかえる　三田市　辻　開子
華だから引き立て役をつれている　鳥取市　池澤　大鯰
天秤にかけて明暗解けぬまま　寝屋川市　平松かすみ
明暗を分けた僅かな気の緩み　紀の川市　楠原　富香
幸か不幸か定年のない仕事　弘前市　高瀬　霜石
花束になる花棺に入る花　堺　市　矢倉　五月
明暗を分ける心の置きどころ　篠山市　酒井　真由
明暗を仏と鬼が握り締め　和歌山市　松尾　和香
明けぬ夜はないといいつつ耐えている　唐津市　坂本　蜂朗
口紅をおとせば冬の顔になる　橿原市　居谷真理子
発表日跳ぶ子しゃがむ子泣き出す子　茨木市　藤井　正雄
災害の明暗かるく運と言う　岡山県　池田たか子
長女次女明暗分けて風のなか　西宮市　山本　義子
風は百態行きずりに会う明と暗　大阪市　升成　好
暗いのは明るくなれる途中です　大阪狭山市　矢野　梓
曇天を切って太陽放射する　寝屋川市　森　茜
陽が昇り昨夜の傷が疼き出す　泉佐野市　稲葉　洋
暗闇にぽつんと妻の灯がともる　交野市　森本　弘風
明暗の明の心地で米を研ぐ　寝屋川市　籠島　恵子

秀　句

過ぎた日の明暗を知る紅の筆　藤井寺市　鴨谷瑠美子
泣いて笑って生きてこの世の明と暗　橿原市　安土　理恵
輝いて生きると影も美しい　大阪市　小谷　集一

「磨く」

三浦強一選

磨いても変り映えせぬ老朽車　高槻市　初代　正彦
てにをはを磨き文章光らせる　豊中市　松尾美智代
オリンピックへおもてなし磨かねば　鳥取県　西谷　悦子
雑学で磨いた力たのもしい　羽曳野市　徳山みつこ
心まで磨けぬ電車内化粧　豊中市　水野　黒兎
生きたくて切磋琢磨の域に居る　大和郡山市　坊農　柳弘
法網を潜る特技を磨く人　唐津市　北村　松風
メトロノームに遅れぬ様に磨く勘　シドニー　坂上のり子
プロ根性修羅場で男磨きあげ　茨木市　藤井　正雄
清濁をみたくて磨く心の眼　明石市　糀谷　和郎
一心にいのち磨いている写経　奈良県　渡辺　富子
見えますか心磨いているつもり　西脇市　七反田順子
磨き粉が足りぬか落ちぬ胸の錆　西予市　黒田　茂代
エンピツをなめて磨いたうたごころ　唐津市　仁部　四郎
言葉美人になる修行ならまだできる　奈良市　大久保眞澄
どんぐりの家族だけれど錆みがく　鳥取市　夏目　一粋
社交性磨きに夜を練り歩く　松江市　石橋　芳山
学歴はないが現場で腕磨く　横浜市　菊地　政勝
磨かねばリンゴは棚で売れ残る　大洲市　中居　善信
磨いたら少し剥がれた虚栄心　和歌山市　武本　碧

学校の廊下磨いた戦中派　大阪府　野田　栄呼
磨いても目立たぬように燻し銀　鳥取県　竹信　照彦
笑うたびお見せする歯をよく磨く　鳥取市　岸本　宏章
息子の家磨きたいけど我慢する　大阪市　原田すみ子
妻何も言わず昨日の靴磨く　高槻市　原　洋志
苦労したのか荒磯の丸い石　唐津市　坂本　蜂朗
磨いてもわかってくれぬ人と居る　可児市　板山まみ子
私を陰で磨いてくれた妻　河内長野市　松岡　篤
真実を映せと鏡よく磨く　高槻市　片山かずお
手垢が取れぬ磨いても磨いても　和歌山市　柏原　夕胡
もう少し磨いて花になるつもり　海南市　小谷　小雪
開拓の後裔として鍬磨く　札幌市　小沢　淳

佳

美味しいね言って欲しくて腕磨く　和歌山市　上田　紀子
老人力磨きふふふとすり抜ける　犬山市　金子美千代
徘徊の妻へ五感を研ぎ澄ます　弘前市　福士　慕情
年金を百まで貰う歯を磨く　高槻市　富田　美義
わたくしの明日をていねいに磨く　藤井寺市　太田扶美代

人

頂いた命磨いてから返す　出雲市　竹治ちかし

地

人間を磨きにんげんらしくなる　香芝市　大内　朝子

天

食いしん坊だから3回歯を磨く　弘前市　髙瀬　霜石

軸

悪政に噛み付くための歯を磨く

「ケース」

山中康子選

子育てのケースを孫に役立てる　米子市　吉田　陽子
レターケース開けると青春とんで出る　神戸市　山田婦美子
世界に一つわたし手製のペンケース　西予市　黒田　茂代
情念をレターケースに眠らせる　松江市　石橋　芳山
その昔宿題もしたりんご箱　八尾市　村上ミツ子
あのケース入る身体にダイエット　高槻市　富田　美義
国会で舟漕ぐ人が法作り　大阪市　榎本日の出
玉手箱恋文一通入れておく　倉吉市　田中紀美恵
眼鏡入れ出れば放浪癖がある　唐津市　坂本　蜂朗
虫眼鏡スーツケースに忍ばせる　松江市　錦織　禮子
大物でケースに合わぬ子に育つ　大阪市　奥村　五月
レアケース標準外と念を押す　大阪市　岩崎　公誠
ひと月に一ケース飲む発泡酒　三田市　北野　哲男
フクシマのケース無視して再稼働　奈良県　渡辺　富子
ショーケース眺めるだけの誕生日　鳥取市　福西　茶子
あれ以来電車は後ろ寄りに乗る　大阪市　江島谷勝弘
スーツケースに女をたたみ旅に出る　青森県　松山　芳生
ケースばいケースで受験突破する　鳥取市　土橋　螢
人形ケースみたいに親の愛過保護　枚方市　寺川　弘一
プライドをケースに入れて持ち歩く　紀の川市　楠原　富香

ケースバイケースで抜けてきた傘寿　堺市　遠山　唯敎
古臭いケース飛び出す新世界　香芝市　大内　朝子
愛の証永久保存するケース　海南市　堂上　泰女
柩しずしず父さんの花道だ　橿原市　居谷真理子
ケース内のことばに絞るＮＨＫ　橋本市　石田　隆彦
ケースバイケースで変わる人の運　鳥取県　竹信　照彦
Ａのケースも Ｂのケースも幸せに　高槻市　片山かずお
どの形にもなる風呂敷の自慢　和歌山市　武本　碧
ケースワーカー病んでる人の礎に　三田市　多田　雅尚
今でしょうこのケースなら僕が出る　大阪市　坂　裕之
ショーケースの中で高嶺の花を見せ　出雲市　竹治ちかし
この道と決めた匠の道具箱　紀の川市　宇野　幹子

佳

百年に一度のケースよく起こる　弘前市　福士　慕情
国民をケースに入れる背番号　倉吉市　牧野　芳光
空気という見えぬケースで守られる　海南市　小谷　小雪
拘りを捨てればケース無限大　大和郡山市　坊農　柳弘
波瀾万丈蟻もキリギリスもぼくも　弘前市　髙瀬　霜石

人

開けるなという玉手箱なぜ貰う　大阪市　古今堂蕉子

地

保育器に確と命の鼓動聞く　和歌山市　福井　菜摘

天

奥も根も深い犯罪追うケース　八尾市　宮西　弥生

軸

無二の友眼鏡ケースの雲がくれ

「念入り」

森本弘風選

念入りに通帳隠し探す羽目　鳥取県　竹信　照彦
念入りに老いた自分の場所探す　長野県　丸山　健三
香典を入れたか再度確かめる　鳥取市　岸本　宏章
心して余生送れと言うカルテ　塩竈市　木田比呂朗
念入りに化粧した妻名で呼んだ　倉吉市　岡崎美知江
丹念な細工組木は崩れない　岡山市　永見　心咲
冷蔵庫念入りに見て無駄防ぐ　河内長野市　木見谷孝代
念には念何度言っても忘れ物　河内長野市　谷　久美子
念入りに偽装したのに見破られ　鳥取市　山下　凱柳
念入りの祝辞余りに長すぎる　唐津市　岩崎　實
自販機に残ってないか釣り探る　明石市　糀谷　和郎
念入りに指紋を消して恋終る　四條畷市　吉岡　修
念入りに付けて赤字と知る家計　八尾市　新海　信二
念入りに消した過去だがいとおしい　和歌山市　武本　碧
元旦は出汁も化粧も念入りに　富田林市　中﨑　深雪
念入りに梳いた自慢のバーコード　藤井寺市　鈴木いさお
印鑑を押す三カ所と捨印と　佐賀県　真島久美子
念入りと違う優柔不断やねん　高槻市　富田　美義
念入りの二人揃って家を出る　和歌山市　松尾　和香
音痴だと言われて音痴不思議がり　今治市　渡邊伊津志

念入りに確かめたのにカギ不安　大阪市　坂　裕之
念入りな化粧重荷になってくる　堺市　遠山　唯敎
何回も聞かれ不安になる記憶　犬山市　関本かつ子
念入りに二重包装する妬心　藤井寺市　太田扶美代
念入りな説明だけど断った　熊本県　岩切　康子
床下までも覗くマルサの女　和歌山市　柏原　夕胡
念入りに封じた本音疼きだす　和歌山市　土屋起世子
子に譲る道念入りに舗装する　茨木市　藤井　正雄
推敲をかさね自分史歪みだす　豊橋市　藤田　千休
二度三度直して情が消えた文　橿原市　居谷真理子
風評で若トラ採るなスカウト陣　大阪市　佐藤　忠昭
念入りに口上教えて出す使い　大阪市　板東　倫子

佳

騙されなや騙されなやと子の電話　篠山市　遠野　可住
念入りに化粧をおとす終電車　宝塚市　田中　章子
包装が念入りだった土産物　大阪市　太田としお
念入りに素材を生かす京料理　三田市　北野　哲男
職人の技で仕上がるミリ単位　松山市　神野きっこ

人

母編んだ一目一目にありがとう　海南市　小谷　小雪

地

メールして手紙も書いて電話する　奈良市　大久保眞澄

天

青森のりんごと特に申し添え　高槻市　原　洋志

軸

そんな事念入れるからすぐばれる

江戸を楽しむ 14

おちゃっぴいが行く

小栗清吾

「おちゃっぴい」という言葉をご存じでしょうか。もう死語かも知れません。

辞書には「女の子がおしゃべりで出しゃばりなさま。年齢に似合わないでませているさま。また、そういう少女。」（『日本国語大辞典』）とあります。

しかし、辞書を引かなくても、ドンピシャリと表現した江戸川柳があります。

葭切と雲雀鳥でのおちゃっぴい 一三九5

ヨシキリとヒバリは、どちらもやかましく鳴いて飛び回る鳥です。「おちゃっぴい」はそんなイメージです。

おしゃべりで、出しゃばりで、ちょっぴりおませな女の子と言えば、下町の長屋あたりにいそうです。

浅窓に養い育つおちゃっぴい 一〇〇146

職人の親父は「こちとらの娘は、深窓のお嬢様とはちがう浅窓育ちだからな。」などと、少々持てあまし気味ですが、ご近所では人気者で、

おちゃっぴい節句の礼に早く来る 拾初13

桃の節句に、近所からお雛様のお供え物を戴くと、親より先に礼に行って、おませな口調でいっぱしの挨拶をしたりします。子供の間ではリーダー格です。

まま事のかかさんになるおちゃっぴい 五〇14

まま事では、お母さん役をやります。口やかましく指図をしたりするのでしょう。

まま事もしますが、あまり女の子らしくない遊びもします。

おちゃっぴい挟み将棋が達者なり 拾十17

挟み将棋で、男の子を次々にやっつけたりするのです。鼻の穴をふくらませて、得意満面でしょう。

おしゃべりなおちゃっぴいは、大人も言い負かします。

おちゃっぴい湯番の親父言い負かし 三6

銭湯の番台に座っている親父が、裸になっているおちゃっぴいをからかったのでしょう。色気の出てきた娘なら恥じらうところですが、おちゃっぴいは猛然と反撃に出て、親父を言い負かしてしまうのです。

おちゃっぴい少し捲ってあかんべい 末三40

こちらは、近所の若者にみだらな言葉をかけられたような場面でしょうか。「じゃあ見せてやろうか」などと着物の裾をちょっと捲って見せながら、あかんべいをしている様子です。もう少し年嵩になれば捲ったりしないのですが。

現代では、未成年者の喫煙は禁止ですが、江戸時代のおちゃっぴいは、おませに煙草を吸ったりします。

おちゃっぴい鼻の穴から煙を出し 拾十23

おちゃっぴいくわえ煙管で鞠をつき 明元智5

小生意気に鼻から煙を出したりするのですが、まだ鞠つきで遊ぶ年齢なのです。

また、大人びたことがしたくて、お芝居に熱を上げます。

出し合って番付を買うおちゃっぴい 明元宮1

「番付」は、芝居の番組や役者を紹介するパンフレットです。一人前の顔をして番付を買うのはいいのですが、お小遣いが乏しいので、仲間と「出し合って」買うところがまだ子供です。ほほえましいですね。

民族の詩歌 (20)

―狂歌と川柳

三好専平

「江戸文芸攷」(浜田義一郎・1988・岩波)によれば、天明3年(1783)狂歌集が刊行され永井荷風により絶賛されている。「漢学和学渾然一体となった、古文明円熟の極致」。

当時、狂歌は政治・風俗にあまり関心を持たず、武士を中心とする「ことば遊び」「戯作」であった。作者として、唐衣橘州、東秩東作、椿軒、樋口関口、元木網月、四方赤良、朱楽管公、蛙面坊懸水などがいた。(「万載狂歌集」「狂歌若菜修」「故混馬鹿集」)当時の評論家も「同党異伐の感あり」と冷ややかである。確かにどの集を読んでみても取り立ててすぐれているとは到底思えない、古典の愚なるパロディである。新古今和歌集の本歌取りには、歌への情熱が感じられるが、これらにはない。

よしや又うちは野となれ山桜ちらしはねにもかへらざらなん(朱楽管公)

糞船のはなもちならぬ狂歌にも葛西みやげの名ばかりぞよき(同)

「狂歌詩」という漢詩も存在した。

属者狂歌如花見風狂詩女犬歯蚤(赤良)

どう読むのかわからない。天明二年作というから、天明の大飢饉(天明二年・1782~)の大変な時代であったはずであるが、その時期に作られている。

田沼意次が、天明七年罷免され、世情混沌としていた。「~文武というて夜も寝られず」という狂歌がお上のお咎めをうけるような時代である。

山手馬鹿人という狂歌師がいた。川柳も堪能で

目はないが耳はそろへて持って居る

すまふとりかこひへいれてあはれなり

柄井川柳(1718~1790)が江戸中期の点者となり、選句の公平さと巧みさで人気を博し、以後三三年間にわたって二三〇万句を集めた。自身の句はほとんど残っていない。が、呉陵軒可有(ごりょうけんあるべし)が『柳多留』として」出版し川柳と言われるジャンルを確立した。

柄井はもとは俳人であったと言われる。狂歌隆盛の時代と軌を一にするが、狂歌が幕末以後衰退するのに対して(武士階級の没落のため)、庶民のたのしみであった川柳は明治以降も受け継がれたが、形式に堕して言葉遊びになった。その川柳を改革する運動がおこり、(阪井久良伎・井上剣花坊)についで六大家と呼ばれる中興の祖も生まれ(水府・三太郎・路郎など)現在に至っている。

田辺聖子の「道頓堀の雨に別れて以来なり」は、水府を中心とする現代川柳史の集大成ともいうべき労作である。

追悼

亜弥さんと きゃらぼくと

八木千代

あの日はわりと穏やかな晩秋の空でした。弓ヶ浜半島の海も凪いでいて、防風林の松も映えていました。

十一月二十一日、私は南波さんに電話をしました。田中亜弥さんは娘婿の南波守夫さんのご理解のもとに、同居なさっていました。

「千代さん、私、車椅子になっちゃった」十月の終りごろ、長い長い電話を下さっていて、再度の入院を知らされていましたから、ご家族にその後の様子を…と思ってのことでしたが、「小母ちゃん、母さんは今朝、亡くなりました。たった今、病院から連れて戻って、ほんの今、靴を脱いだばかりを、ベルの音で電話口まで来ました」と、泣きだしそうな、喘ぐような桂子さんの声でした。

そのあと私は何を言ったのか覚えてもいず、「すぐ伺うから、すぐ行くからね」とだけ。

亜弥さんと私は、こどもの幼稚園の頃から六十年も途切れることなく、家族ぐるみで親しくしている間柄でした。古い古い大切なともだちでした。ずっと続いていたのは、二人とも川柳の道のおかげです。

私は三十九歳のときに、石垣花子さん、林瑞枝さんと共に、女性ばかりの川柳グループ「きゃらぼく」の苗を植えました。しばらくしてお誘いするとよろこんで仲間にとびこんでくれた亜弥さんです。私たちの友情には常に川柳さんが、川柳の傍には、つねに私たちが寄り添い、おかげで、あたたかく強い輪につながっていきました。「きゃらぼく」こそ、心のふるさと友情のふるさと。そう思い続けています。

政岡未延子さんの車で、弓ケ浜の中ほどの夜見町のお宅に着いたのは午後四時すぎ。明るく広い客間に、今にも話しかけるような表情で、亜弥さんは待っていて下さいました。この数年は入退院の連続で、ねんごろな看護を受けられながらもの、闘病の月日。それなのに清々しいほど美しい死に顔でした。

「三代(みよ)ちゃん（亜弥さんの本名）、良い場所を予約しといてね」そう言いながら、この不思議な安らかさは何だろう?そんな疑問が湧いて来るのでした。もしかして—川柳さん…長い間、川柳を大事に「川柳があるからこそ入院生活にも耐えられた」といつも電話のたびに、いつもの会話が耳から離れない、あれからです。その夜もあくる夜も私は泣き明かしました。親と別れたときのように。

死の列の順に並んでいる私。三十九歳のときの「きゃらぼく」の私は、当然のことで八十九歳になりました。ここ一、二年のうちに最前列に押し出される筈です。

亜弥さんはみごとに最期の平安を勝ちとられました。その証しに、遺された句

朝の陽とついバンザイをしてしまう

このおおらかな宇宙観。太陽さえも友として笑い合える大きな力を、川柳から貰って、亜弥さんは安らかに旅立たれたのです。

合掌

万經にまさる一句を捧げたや　千代

追悼

峯村勲弘さんを偲んで

高槻川柳会　片山　かずお

昨年九月三十日、峯村勲弘さんが逝去されました。享年七十七。

「膵臓の調子が悪いので」と、高槻川柳会の句会を休み始められてから、約六カ月間の闘病の末でした。

勲弘さんは長野県の出身。モットーが「明るく元気に朗らかに」で、川柳が大好き、長野県が大好き、専門だつた原糸の染色のことが大好き、阪神タイガースが大好きの好漢でした。

そして、そのモットーどおり、いつもニコニコと笑顔で、何事にも熱心に取り組んでおられました。

高槻川柳会の句会では、世話役として長年句会の司会を担当していただきました。

司会では、最初にごく短時間ですが時事ネタの話、阪神タイガースの話、ご自身の得意分野の染色の話などをされていましたが、何のお話をされても最後には必ず「明るく元気に朗らかに！今日も一日川柳を楽しみましょう」と言われていたことが思いだされます。

なにごとにも熱心な上に真面目な人でしたから、時として、人の上に立っていた方特有の目線の発言が飛び出したりしましたが「おっ、ハッスルボーイのハッスル発言だ！」と皆が笑顔で受け入れていたのは、やはり勲弘さんの人徳のなせる業だったのでしょう。

世話好きは句会後も続きました。

句会後の二次会では会場の予約から会計まで、真面目な性格そのままに、きっちり切り回しをされていた姿が目に浮かびます。

また、郷土愛に富んでおられて、近畿地区の長野県人会の副会長としても活躍されていました。長野県の高校が甲子園に出場したときは、応援のため球場まで足を運ぶことはもちろん、宿舎への陣中見舞いにも行かれて、そのお話を楽しそうにされていましたが、もうそれも聞けなくなってしまいました。

きっと、天国でもいろんな役を引き受けられて、また忙しくなさっていることでしょう。

ご冥福をお祈りいたします。　合掌

遺句抄

黙祷に平和を誓う甲子園
笑いましょう不思議と心浮きますよ
喜寿祝い言葉選んで語る夢
ホールインワン記念タオルも雑巾に
豊漁を待って釘煮に取り掛かる
花水木引き立て役は空の青
一隅を照らし自分史織り進む
病得て今日一日の重み知る
ビオロンの音色に浸る雨の午後
トラだけに良く飛ぶボール投げてくれ
看護師の慣れた摺り足夜勤明け
サボテンの花に自分史重ね見る

初しぐれ教室

題 ― 逃げる

山口光久

前月分に誤字が散見されましたが、今月もありました。誤字は字の間違った使い方で、全く違った意味を表します。（同音異義語に要注意）句意が理解できなかったり誤って解釈されたりします。

注意しなければならないのは「誤字、脱字の句は選の対象にならない」ということです。投句前に必ず辞書を引き、字の本当の意味を理解して下さい。辞書を引く習慣をつけましょう。

そのほか句箋に書く時は略字、続け字、作り字、嘘字、当て字などに注意して、楷書で丁寧に書くよう心掛けて下さい。

【添　削】

原 逃げるなよ紅葉散り舞う秋に言う　喬

紅葉は秋の季語、紅葉散るは冬の季語、「秋に言う」と違和感を覚えます。

添 美しい紅葉（もみじ）急いで逃げないで

原 かめ虫の匂いに魂消逃げる猫　紀美恵

魂消は魂銷（魂が消える、びっくりする）の間違い。誤字に気をつけて。

添 亀虫の匂いに猫も逃げ去って

原 釣り自慢逃がす得物を未練げに　登美子

得物は獲物の間違い。誤字に気をつけて。

添 釣天狗逃がす獲物を未練げに

原 逃げかくれした時代遠くなる　正二

五五五の破調句。リズムも悪いです。

添 逃げかくれしていた時代遠くなる

原 残り福だといいのになぁジャンボクジ　晶子

中八になっています。「ぁ」を省けば。

添 残り福だったらいいなジャンボくじ

原 年金が温泉めぐりと逃げて行く（畑）節子

中八です。他の言葉に言い替えてみたら。

添 年金が出て湯めぐりに消えてゆく

原 鈍だから立止まらないで逃げてみる（富）恵子

中八です。中句が冗句。

添 鈍だから判断ミスで逃げおくれ

原 貧乏は逃げれば逃げるだけついて来る　回春子

中九になっています。中句は冗長。

添 貧乏神逃げてもピタリついて来る

原 ぬるま湯の中で宣う逃げ口上　（高）道子

「宣う」堅い言葉です。現在はあまり使われません。少し平易な言葉で。

添 ぬるま湯の中で聞いてる逃げ口上

原 逃げようか睨み返そかアライグマ　絹枝

添 逃げようか睨みつけるかアライグマ

原 逃げないであなた私を捨てないで　秋星

添 逃げないでか弱いわたし庇ってよ

原 かごのとり逃げ方知らず古希近い　開子

添 かごのとり逃げ道知らぬ古希の坂

原 笑い声いっぱいの居間逃げる鬼　律子

添 笑い声に鬼も逃げ出すいろり端

原 秘密法居眠りできず席を立ち（中）修

添 秘密法審議未了に席を立つ

原 家中の笑い貧乏神逃げる　ひろ子

添 呵呵大笑貧乏神が逃げてゆく

原 泣き笑い逃げることなく人生苦　ミヨノ

添 泣き笑いの人生だけど逃げ出さぬ

原 逃げて良し向かって良しの夫婦仲　恭子

添 逃げないで付かず離れず夫婦仲

原 運逃げるからと剃らない無精髭　元三

添 運が逃げると決して剃らない無精髭

原 忙しい逃げて行きたい気分です　モモ

添 繁忙期逃亡したい気分です

原 強引に逃げて秘密を秘密にす　紀雄

添 強引に秘密保護法逃げ切った

原 のら猫は逃げ道確保ひなたぼこ　満知子

添 野良猫は逃げ道しらべ日向ぼこ

原 釣天狗自慢げに言う逃げたこと　信二
添 釣天狗逃げた獲物を自慢する
原 トラの子もスルリと逃げる消費税　志津子
添 虎の子を盗み取るのか消費税
原 老介護逃げるに去れぬ佇まい　勝治
添 どうしても逃げ出せないの老介護

【少しの工夫で良くなる句】

原 しあわせはシャイなんだろかすぐ逃げる　洋子
添 しあわせはシャイなんだからすぐ逃げる
原 過ちを言訳しては逃げて行く　(山)久子
添 過ちを言訳しては逃げている
原 開いたら逃げるカナブン握ったまま　(石)久子
添 開いたら逃げるカナブン握りしめ
原 あの人が記憶にないと逃げている　国和
添 都知事さん記憶にないと逃げている
原 腹割って逃げも隠れもせず話す　きっこ
添 腹割って逃げも隠れもせず会話
原 逃げ腰で歩いた道はまわり道　英男
添 逃げ腰で歩いた道はいばら道
原 災害はとにかく逃げるのが一番　(村)恵子
添 災害はとにかく逃げるのが先だ
原 逃げ切れず頭を下げる皆の前　一文
添 逃げ切れず頭を下げる民の前
原 逃げ足の速い人とのお付き合い　一泉
添 逃げ足の速い人には不即不離
原 介護人疲れ果てるか逃げて行くとも湖
添 介護人疲れ果てたか逃げて行く
原 逃げ口上上手に使う知恵のうち　こずえ
添 逃げ口上上手に使い波立てず
原 逃げるより前へ踏み出せ若い人　忠貞
添 逃げるより前へ踏み出せ若人よ
原 夫の癖逃げの一手か黙秘する　安子
添 夫の癖逃げの一手の黙秘する
原 健康が逃げないように鍵かける　(渡)修
添 健康が逃げないように包囲網
原 諭吉さん孫を慕いて逃げていく　(株)玲子
添 諭吉さん孫を慕って逃げてゆく

【入選句】

逃げ出した旅へケータイ追ってくる　洋志
逃げられぬせめて介護が終るまで　義雄
約款に逃げ口上の小さな字　狸月
逃げ道を与えて叱る親心　孔一
傷ついた心が向う故郷(さと)の屋根　(斉)宏子
相性の悪い人なら逃げましょう　文香
対岸の火の粉被って逃げる雑魚　ひとし
冬眠の蛙起した鍬の先　美紗子
居心地が悪いか諭吉また家出　心咲
逃げ惑う戦火の国の子供達　のり子
まだ若い逃げず挑戦するつもり　亜希子
手を取って逃げる勇気があったなら　昭枝
アンカーへ逃げろと叫びバトンパス　武人
小心者逃げ足だけはひけとらぬ　友子
汚染処理今更逃げは許されぬ　克三
逃げ道を作って叱るおかあさん　利子
逃げ道を見付けられずにイエスマン　洋一
殿に逃げ道は無い冬の陣　惠
逃げ腰で始めた趣味にどっぷりと　正子

【佳　句】

意気地なし向き合う前に逃げている　治子
命だけ持って逃げたと後日談　和之
逃げないで向かい合ってね人生と　(高)弥生
逃げ道を閉ざされやっと泥を吐く　凱柳
逃げないですぐ謝れば済むことよ　つな子

【今月の推せん句】

雲行きに逃げるが勝と席を立つ　見山　温子

常に事の成り行きに目を光らせ、形勢が悪いと判断したら逃げるが勝だ。さっさと席を立つのも処世術。

脱皮するチャンス逃がしたイエスマン　楠原　富香

イエスマンは上役の言いなりになる人で、偶にめぐってきたチャンスも自分から掴み取る事も出来ず、折角のチャンスを逃してしまうことが多い。

【私の句】

逃げてばかりいてはチャンスにありつけぬ

川柳塔鑑賞

同人吟　藤村亜成

―1月号から

企業の中で利益追求に明け暮れ、心身の消耗に耐えられぬ老いを感じ始めた折、巡ってきた作品群の観賞。錆ついてきた脳に活性を促すに充分な句との出合い。久々に、刺激を頂いた作品達に感謝。

紙幅の都合で、残念ながら割愛し未練を残す句も多々あった。

恋をしていたのかキャベツひび割れる

牧野　芳光

キャベツは、恋してる自身のことだろう。どうやら危うい恋をしてるらしい。ひび割れるが、その事を物語る。

仮免でよろよろ生きておりますわ

木本　朱夏

いやいや、ご謙遜をと応じたくなる。飾らない作者の性格がよく出ていて微笑ましい。

ミミズのたうち回っているは快楽か

桒原　道夫

くねくねとのたうち回るミミズに自身を投影し、苦悶の中にこそ快楽があると、作者は思い至る。或いは自虐からの解放か。

面白いお人のようで凄い方

初代　正彦

飄々とさりげなく、自分を表に出さず周りの人を愉快にさせてくれる人。達人とはそんな人かもしれない。何が凄いのかは想像に任すとして・・・。

ふる里の風に襟首つかまれる

両川　無限

懐かしい古里に来てそろそろ帰らねばと思うが、離れがたい。襟首つかまれるとは実に言い得て妙。

口を切る人をみんなが待っている

斉尾くにこ

このような場面を経験した事のある人は多いだろう。例えば絶対的な権力を持った人の暴言に、その場で全員が反発を持ちながら、反対意見を唱える声がない。しかし誰もが勇気ある発言を待っている。そんな切迫したシーンを端的に表現している。

今日媚びた口を何度もうがいする
身につけた愛想笑いに空笑い

森山　盛桜

同じ作者の句を連句にすることで、真意が伝わる。後句だけなら、大人になれば誰でも自然に身につくもので済んでしまう。しかし前句によって、本心とは裏腹な自分の姿を蔑む潔癖な性格がより強く浮かび上がる。

雑念を海に浮かせているのです

中居　善信

ぼんやり海を眺めよぎってくる様々な思い。それを浮かび上がらせることで、気持に整理をつけようとする意図が伝わる。巧みな表現だ。

私も地球も貧乏揺すりする

菊地　政勝

地震が起きるのは、私が貧乏揺すりするようなものかなあ。でも地球にはやめてもらいたい。地球と対比したところが面白い。

男にも嫉妬あるのに女偏

関本かつ子

男偏はと、辞書を開くと女偏に比べて数えるほどしかない。この疑問はどうやら漢字を作ったのが男性だったからしい。この句の答えもそこにある。

菊活けて神の御声を聴く如し

岸野あやめ

菊は日本の国花で、凛とした威厳があり昔から「菊を飾ると福が来る」とか「菊は仙人の住むところに咲く」と言い伝えられる。菊を活ける作者には神の御心がきっと響いたに違いない。

頑張るよ見送る人がひとり居る

平松かすみ

老夫婦の見送る人は、大切な人、恐らく病んだ夫だろうか、介護に疲れながらも、健気で優しいかすみさんの思いやりが伺える。

私を越えて私が出てしまう

吉岡　修

騙されているし騙しているのだし

石橋　芳山

どちらも同じ言葉をリフレインさせる事で、作者の述べたいことを強調することに成功している。前者の場合「私」が出る場面とはどういう場合か想像させ楽しい。後者の場合言葉の繰り返しにより、自身を説得している余裕が感じ取れる。

ストレスを溜め込まぬよう生やす羽根

北村　賢子

ストレスが溜まりすぎると、ホルモンのバランスが崩れ自律神経に障害を来たすらしい。最近職場でも精神を病む若者が急増し、メンタルケアが問題になっているようだ。適度な鈍感力と、解放できる羽根（知恵）を持つことが必要だ。

大切に使う言葉だありがとう

寺川　弘一

大切に使う言葉なので「ありがとう」に実感がある。いつもながら、平易な言葉で作者の気持ちが率直に伝わってくる。

くどくどと言わぬ親父の叱り方

山口　光久

親子であっても男同士余り口をきく事もない。たまに叱られる事はあってもくどくど言わぬ。それだけにズシリと重い。そんな父親への畏怖と尊敬の念。

水の輪が拡がるどこまでも未完

古久保　和子

未完で作者の意思を明確にし、そのことで水になぞらえた何かの活動と想像させる。それは事業か、サークルか、輪を拡げる一石を投じたのは本人か、それとも輪の中の一員か判らない。だがそれは飽くことなき挑戦のようにも受け取れる。

回り切るまでタッチ許さぬ独楽の芯

松原　寿子

いかにも自立心の強い毅然とした人物像が描かれている。真っ直ぐに垂直に立つ独楽の芯は、ぶれがなく静かに回りなかなか崩れない。そんな独楽の自尊心と強い意思（芯）に自身を託し見事に表現している。

畑に恋をすれば野菜が良く笑う

西川　和子

畑も野菜も生き物だ。大切に扱えば必ず応えてくれる。畑仕事が楽しくてたまらない。そんな作者の心情が滲み出ている。当然そんな畑で育った野菜は健康そのものだ。　この句に出合えたのでハッピーエンドで締め括ることにしたい。

水煙抄鑑賞

―1月号から

井丸昌紀

尖った頃はキラキラ光ってた

吉道　あかね

尖ってた頃より、今の方がきっとキラキラと光っておられるように思います。

だからいまおいしい酒も飲んでおく

上田　ひとみ

おいしい酒、いま飲んでおき、できたら、明日もあさってもまたその次の日も…

刑法に触れる事ない酒の量

吉川　ひとし

酒の量だけでは刑法にも秘密保護法にも触れることはありません。しかし体には気を付けましょう。お互いに。

番組の終わった頃に目が醒める

田中　恵

見たくもない番組の時には目が冴えていたのに見たい番組が始まった途端に…

句会のあとの飲み会だけは皆勤だ

浅井　公平

そういえば、句会には参加できず、飲み会にだけ参加した事もありました。

さて一人でも多くの佳句をとりあげたいので、余計な鑑賞は省きます。

盆と正月顔見せにくる嫁は客

助川　和美

病名が付くまで検査また検査

藤本　直

その件を除けば君はパーフェクト

川島　良子

錠剤を忘れて今日もいい日和

藤成　操江

今日生きるための尻尾は振っておく

東槇　ますみ

謝罪会見部下ならもっと上手くやる

長島　亜希子

ほろ酔いで別の自分にめぐり会い

尾畑　なを江

一切を知らぬふりして聞き上手

丹下　凱夫

一万歩ノルマこなしに午前五時

土井　輝恵

スカートにどこか行くのと子に聞かれ

梅木　澄空

もひとりの自分が過去にしがみつく

神野　千恵子

靴の中小石が一つ罪一つ

大坪　一徳

オレオレと言っても我家娘だけ

中井　楓花

薔薇の棘枯れても人の指を刺す

小野　鶴子

頑張れよ無理をするなよ休むなよ

田口　清帆

減り具合妻が目盛をつける酒

北村　松風

うかつにも心痛める距離にいる

真島　久美子

亡き父の喝に真夜中目を覚ます

平野　あずま

気が付けば敵も味方もいたわが家

柴本　ばっは

コーヒーに皿がつかない仲となる

寺本　実

よそ行きの顔で夫にバッタリと

栃尾　奏子

妻と僕無駄の基準にあるギャップ

上山　堅坊

38 貴重な記録「合同句集」

私の本棚に「川柳塔」という表題の合同句集が三冊並んでいます。この原稿を書くにあたって、それぞれの発行日を確認しますと、次のようになっていました。

・昭和59年7月1日　（川柳塔誌寿還暦記念）
・平成6年7月27日　（川柳塔誌寿古希記念）
・平成16年7月17日　（川柳塔創刊80周年記念）

右三冊より以前の昭和49年にも合同句集が刊行されていますがそれは持っていません。以来10年ごとにきっちり刊行されているのは関係者の並々ならぬ努力の賜でしょう。

私は「第二集」発行の昭和59年に同人となっていますが合同句集には参加していません。30年も前のことなのでよく覚えていませんが、原稿の締め切りに間に合わなかったのではないかと思います。私が参加しているのは、平成6年に刊行されたものからです。ちなみに参加者数は次の通りです。

・昭和49年発行　三四〇余名
・昭和59年発行　四七〇名
・平成6年発行　六六八名
・平成16年発行　一〇一四名

発刊ごとに参加者数が増えているのは喜ばしい限りですが、平成6年発行に参加されていながら、平成16年発行にはお名前が見えない方々も多数おられます。

野良犬が倉庫の裏をはなれない　西尾　栞
生きるとは水を汚してばかりいる　小出　智子
梅雨しとどお地蔵さんに笠がない　高杉　鬼遊
うどん屋へ駆け込む雨の十二月　吉岡　美房
石鹸とタオルを持って酒のみに　江原とみお
水脈を探して崖に突き当たる　林　荒介
女でも吊橋くらいゆすれます　石垣　花子
大根を洗うに丁度いい流れ　久家代仕男

もっとたくさんおられますが、右はいずれも生前に親しくお話しさせていただいた方々ばかり。ページを開きますと、在りし日の笑顔や穏やかな声が甦ってきます。それは、お名前だけではなく掲載されている15句の力に他なりません。改めて「川柳の力は凄い！」と思い知らされました。

さて、今年は川柳雑誌・川柳塔創刊90周年にあたります。それを記念して第五集の合同句集を発刊することになっています。すでに案内書（申込書）をお持ちの方もおられると思いますが、この場をお借りしまして改めてご案内いたします。

参加費五千円は少し高いように思われるかもしれませんが、これは送料も消費税も含めた金額です。個人句集を上梓して千人ほどの人に配布するには何十万円もの経費がかかります。それを考えますと極めて割安にて力作を永遠に残すことができます。いま生きている証しとして一人でも多くの方が仲間になって下さいますようお願い申し上げます。

・締　切　平成26年4月10日（木）
・体　裁　B6判・上製本・八〇〇頁（予定）
・参加費　五千円・掲載一人15句（自選）

案内書（申込書）をお持ちでない方は、本誌奥付けの「川柳塔社」にご連絡ください。振替用紙と共にお送り致します。

『麻生路郎読本』余滴 (19)

「矢車」と路郎作品 ①

桒原道夫

「麻生路郎物語(6)―「番傘」発刊のころ」に、明治末の川柳界が次のようにまとめられている。

〈路郎が十代から二十代へと成人期へ移行する明治四十年（*(1)路郎二十歳）の時点で、柳界は「葉柳」（明39・6発刊・小島六厘坊主宰・大阪）*(2)「滑稽文学」（明40・1発刊・窪田而笑子主宰・東京）「新川柳」（明41・1発刊・*(3)久良岐社中）の*(4)三柳誌鼎立時代となっていた。だが、柳誌の盛衰変貌ぶりは猫の眼さながらで、*(5)二年後には「滑稽文学」に拠る東京柳界は「獅子頭」「矢車」に分裂する。そして*(6)六厘坊の死とともに「葉柳」も休刊してしまう。〉

*(1)路郎は明治21年生まれなので満19歳。

*(2)創刊時の編集発行人は、田能村朴念仁。第五号から窪田而笑子が編集発行人となる。明治40年8月、第八号から「川柳とへなぶり」と改題。明治42年7月、「滑稽文学」に戻る。

当時の川柳界は、井上剣花坊の柳樽寺、阪井久良岐の久良岐社、窪田而笑子の読売川柳研究会の三派が主流であった。小島六厘坊の「葉柳」は、柳樽寺派で、西柳樽寺と称した。

*(3)発行所は横浜川柳社。編集人は塩川喜代志。「矢車」一二号（明治44年1月）の「明治川柳の傾向及將來」（六極庵―中島紫痴郎の別号）に、〈久良岐社の殘黨は横濱から「新川柳」を發行し〉とある。

*(4)井上剣花坊の「川柳」は、明治40年10月号で廃刊。阪井久良岐の「五月鯉」も同年廃刊。

*(5)「獅子頭」は、明治42年5月創刊。主宰は阪井久良岐だが、発行人の安田依々子は、読売派であった。

*(6)六厘坊は、明治42年5月16日（水）、21歳で死去。死後、「葉柳」は「休刊」ではなく、廃刊になった。

「矢車」について、『川柳総合事典』で東野大八は次のように記している。

〈**矢　車**　やぐるま　誌名。明治四二年四月創刊。矢車発行所。窪田而笑子らの写生趣味にあきたらぬ読売川柳会の森井荷十が同四一年に出した「綾志野」の後身。巻頭に*(1)阪井久良岐が〈矢車序開き〉を書いているが、*(2)中島紫痴郎が〈詩としての川柳〉と題し「川柳を詩にしたい。詩は時代の要求である」と強調しているのが眼をひく。第十八号まで松濤園（筆者註―壽の誤り）、桃仙坊、白馬らの古句研究があったが、翌号から消滅。*(3)第二七号からは「川柳詩・矢車」の表紙となる。*(4)「貧に処す娘に似たり冬の灯よ　水府」にみる如き詩川柳一辺倒となり、矢車派と呼ばれた。半文銭、五葉、三太郎、青明、路郎らも新作品を寄せている。明治四四年一一月終刊。〉

*(1)阪井久良岐の「矢車序開き」を一部

載せておく。

〈目下の柳壇に二つの著しい潮流があるソレは古句を研究し古句の快樂美を味ひ爰に現代に超越した別天地の美に醉はふと企つる者一つは古句以外に自家の青春的主觀を謳はんとする者此二個の潮流がある／此等が從來は混沌として川柳界に一致してゐたが絶えず衝突の度を高めて來た／尤此他に普通の滑稽川柳が一般の水平線を成してゐるのは云ふ迄もない／此等の現象が大阪の「葉柳」派と成り横濱の「新川柳」派と成つてゐる、近來になつて古句研究熱が盛んになつて「江戸文學」が出る「綾志野」が出ると云ふ有様になつた／所で讀賣派にも此現代を主とする作句派と現代に飽足らぬ古句研究派とを生じた（中略）爰に讀賣派から分離した舊綾志野同人が更に「矢車」を發行することに成つた〉

久良岐は、古句研究派を「酒党」、現代を主とする作句派を「牡丹餅党」に譬え、「矢車」の創刊について、「是れは何所迄も酒党でズット八百善式に行きたい所だがマダそこ迄は六ヶ敷から植半式でお花見をしやうと云ふ相談が一決した」と言っている。つまり、「矢車」は古句研究に重きを置いて発刊されたのである。なお、「八百善」「植半」はともに料理屋の名前。「八百善」の方が高級。

「矢車」一〇号（明治43年1月号）の「巳酉柳界管見」は、竹林堂（筆名。誰かは未詳。中島紫痴郎だと思う）が明治42年の柳界を振り返ったものである。「矢車」発刊の経緯について記した部分を載せておく。

〈「矢車」は四十二年に於て古句研究を目的として起つた雜誌の急先鋒であつた、矢車同人は四十一年の初春より時々會合を催し或は研究誌を廻送して古句研究に努めて居つた、然しこれは少數有志の自己修養が目的であつたが讀賣川柳研究會の改革問題が起ると同時に同派の幹事の多くが古句研究を好まなかつたので、意見の一致せざるを知り分離するの止むなきに至つて遂に「矢車」を發行する事になつたのである、故に其發行も唐突の計畫であつた、左りながら同人皆研究に作句に熱心なる者であるから日ならずして柳界に何等か貢獻する所であらふ。〉

＊(2)中島紫痴郎の「詩としての川柳」は、創刊号には見えない。このことについては、後で述べる。

＊(3)「川柳詩・矢車」の表紙は、二七号のみで、二八号からは「川柳詩」の文字は消える。

「矢車」第二十七號の表紙

＊(4)水府のこの句は、二三号（明治44年2月20日発行）に掲載された。

尾藤三柳は、『川柳入門―歴史と鑑賞―』（平成元年・雄山閣）の「新傾向の台頭」の章で、俳句の影響を受けて川柳界でも明

治42年頃から新傾向と呼ぶ運動が興ったとし、「葉柳」「新川柳」「矢車」「滑稽文学」の柳誌を挙げて説明している。そして、新傾向の川柳は、「古川柳以来の客観性と没個性を脱して、作者の個を表出しようという近代意識に立つ」ものであり、「それまで客観的対象に向けられることしかなかった歴史的呪縛から解き放されて、自己の内側を対象領域としてきりひらいた」「眼に見えるもの以外の、心のかたちや心のいろを十七音に託そうとした」とまとめている。

東野大八は『川柳総合事典』で、

阪井久良岐が〈矢車序開き〉を書いているが、中島紫痴郎が〈詩としての川柳〉と題し「川柳を詩にしたい。詩は時代の要求である」と強調しているのが眼をひく。

と記しており、この書き方だと、「矢車」は創刊時から詩としての川柳を目指していた、ということになるが、註で記したように中島紫痴郎の「詩としての川柳」は、創刊号には掲載されていないのである。

そこで、調べてみると、似たような記述が、二三号（明治44年2月）にあった。

「明治川柳の傾向及將來（續）」（六極庵）から抜粋する。

前回の明治川柳の傾向に述べたる如く、各派を通じて現下の川柳家の希望は、川柳を詩にしたい、而して一般詩界に比肩したい、否より以上に發展したいと言ふにあるのである。此又希望を充すには一般詩界と比肩する作品を得るには時代思潮の要求に應じなくてはならぬ、何んとなれば詩は時代の聲であるからである、と自覺もして居るのである。

けれども此希望を等しく抱て居るにも拘わらず尚ほ且つ三大派に別れて居る、

とあり、この後、当時の三派の説明が続く。「矢車」全三一号を調べても、「詩としての川柳」と題した文章は見つからず、東野大八は、この文章を要約したのではないかと思われるのである。『麻生路郎読本』に、東野大八の「麻生路郎物語」を再録したときに、物語中の引用文を原典で確認したところ、そのまま引用せずに要約した箇所があったので、そう思うのである。おそらくスペースの都合で、要約したのだと思う。

ともあれ、「矢車」が詩としての川柳を目指し、新傾向と呼ばれたのは確かである。いつごろから、そのような傾向があらわれたのかを、「矢車」誌の号を追って、見ていくことにする。

創刊号（明治42年4月）の目次を挙げておく。ページ数は、筆者が補った。

矢車序開き　岐　1
古　葛　籠（一）松　壽　園　3
川柳源三位考　桃　仙　坊　7
金　剛　箭　愛　染　明　王　10
桶　伏　白　馬　12
川　柳　調　帳　六　疊　坊　15
募　集　川　柳　16
墓。戸。里。　矢車同人選
傘　坂井久良岐選（ママ）　17
雑　吟　18
開　き　文　權　之　助　19
編　輯　局　より　20

松壽園、桃仙坊、愛染明王、白馬、六疊坊の文章は、すべて古句にかかわるものである。

20頁に、「矢車」同人として、市井凌花、緒形松壽園、中島紫痴郎、齋藤桃仙坊、森

井六疊坊、鈴木白馬、の名が見える。六疊坊は、「矢車」一二号（明治43年3月）から、本名の嘉十郎をもじって荷十の号に変える。『川柳総合事典』によると、紫痴郎の別号は、六極庵、愛染明王、竹翁、弓の介。

以後も、古句に関する文章を中心にした編集は変わらないが、八号（明治42年11月）の「金鈴の響」（愛染明王）に、こうある。

〈明治の詩界は硝子箱に人形を入れたやうな美麗なテカ〳〵して光る計りで働きのない叙情や、きまり切た文句の叙影に厭きて來て和歌に新體詩に皆主觀的に詩人の感想を強く云ひ現さうとしつ、あるようになつて來た之も時代に伴ふ變化である。此間に川柳ばかりがノンコのシアツク（筆者註―「ノンコ」はのらくらすること。「シアツク」は不明。御教示を乞う）にも無神經にも川柳の型は之でムいと計りに輕味や穿ちおかしみで滿足して居たならばどうである、（古句研究を止めろと云ふのではない）それこそ前世紀の遺物か時代遲れの天保親仁のやうに人から扱れるのは知れ切つた話だ。〈川柳が人事詩なる以上は其時代を追ふのは當り前の事だ、（中略）だから明治の潮流が主觀的なら其流れに從て行く中にも何か自分で發見するやうに心掛て常に驥尾に附てばかり居ないやうにしなくては駄目だ。〉

明治の詩界が主観を表現しようという流れにあることを意識して、川柳もこのままではいけないとしている点が注目される。

九号（明治42年12月）の「金剛箭」（愛染明王）に、こうある。

〈我等の＊(1)新しき試に就て＊(2)岐氏から我等の見地よりすれば現代に反抗する態度をとる之れ古川柳を研究し得て趣味を解するもの、必然歸着すべき結果に候と云つて來られた。我等は古句を研究し、古句を解し之を現代に適合すべく改善して以て現代を謳んとする者にして、現代に反抗的態度を取らんとせらる、氏と根本的意見を異にする者なる事を知り賜はゞ尚ほ一層明に我の岐氏ならざる事を思召さる、事と思ふ。斯くも意見を異にし又岐氏の御注意を無にしても尚ほ見捨てなさらぬ氏の胸量と熱心とを尊敬するのである〉

＊(1)「新しき試」とは、八号からこれまで募集していた課題吟とは別に、句数無制限で句（課題あり）を募り、それを編集部で選をし、「新川柳」として発表し始めたことだと思われる。七号の募集広告文は、「葉柳」の文章を引用している。葉柳の厳選主義は、幾年かの後に、その投句家が進歩した眼をもって自己の旧吟に対したときに落胆しないようにという思いで行っている。そして、〈然り我矢車も同様である、矢車は酷に厳選をして喜ぶ手合ではないのだ、自信のある句を望むのである〉と言っている。

＊(2)「岐氏」とは、阪井久良岐のこと。

久良岐は、創刊号から毎号文章を寄せ、「矢車」の指導者?（主宰ではない）であった。前に掲げた「矢車序開き」の〈古句を研究し古句の快樂美を味ひ爰に現代に超越した別天地の美に醉はふ〉からも分かるように、古句の世界に絶対的価値を認める立場であった。対して、「矢車」の面々は、現代を詠むために、古句を研究しようとする立場である。

このころから、阪井久良岐と矢車のメンバーとの考え方の違いが表面化してきたようだ。

（次回に続く）

本社 十二月句会

十二月五日（木）午後一時
アウィーナ大阪

穏やかな日和の七日、新年句会は百十七名（投句七名）の参加で開催。初出席は、太田としお氏（大阪市）山根妙子さん（八尾市）のお二人。句会に先立ち、先ごろ亡くなられた同人の、大石あすなろさん（美作市）に黙祷を捧げた。続いて「初歩教室年間賞」の三氏と昨年の月間賞永久保持者の、山本希久子さんが表彰された。

今月のお話は、小島蘭幸主幹「第一回路郎賞から」と題し、まず路郎氏の墓まいりで、九十周年記念大会の成功を祈願し、今年の決意を語られた。

路郎賞が応募制になったのは、平成十一年薫風主幹の時からで、第一回から平成十年までは、選考委員が投句された雑詠の中から選句するという大変な作業であったらしい。ちなみに応募制第一回路郎賞は、川上富子（富湖）さんであった。（ま）

月間賞は、矢倉五月さん（堺市）

（司会―蕉子・善純）（脇取―扶美代・真理子）（受付―敏治・奏子）（清記―勝弘）

席題「網」　三宅保州選

網の字を網と間違う倦怠期　武臣
ちょっと目が粗いんじゃない法の網　大輪
居酒屋の網に毎日ひっかかる　まつお
中国の網がだんだんでかくなる　完司
復興の網へ真心引っかかる　あや子
網破り今に言いたいことがある　ダン吉
スマホ見ながら網で餅焼く小正月　ひろ子
あっぱれな人がネットに引っかかる　絹子
逃げ切れぬメールの網にからめられ　希久子
ネットから逃げてわたしは深海魚　耕治
福袋私を変えた網タイツ　真理子
環状線網棚の傘ひと回り　紀子
溜まってるストレス網で濾過してる　篤子
どんな網にももろく破れる箇所がある　弘一
レントゲンの網にいのちを救われる　唯教
身の内に網持ち生きる大クジラ　はこべ
わたくしの網にかかってきた鯨　扶美代
逃げられたら困るあなたへ網を打つ　あや子
網かけて私とりこにしたお人　蕉子
網目の大きさ変えてあなたを選り分ける　あきこ
網かごで水を掬った片想い　寿子
網の目が大きすぎたかまだ一人　蕉子
青い鳥網にかかってくれないか　能子
ちいさめの網で今年は掬います　月子
太刀打ちのかなわぬ口へ網を掛け　完次
破れてる網も使ってみることに　月子
金網を越えて逃げてはいけません　敏治
でかい網持ってロマンをすくわんか　一歩
網張って小さい鬼を捕まえる　義子
向こう岸で網を引くのは母だろか　万紗子
網の目をくぐって生きる途中です　義
生きたくて虚飾の網を引き上げる　柳弘
鈴の鳴る網にゴロンと引っかかり　瑠美子
網破り逃げた魚を褒めてやる　郁夫
ナビの網張られて今日も放し飼い　直樹
美しい蜘蛛　美しい網をもつ　蘭幸

佳

整形して網にかかった彼といる　宏子
網の目を潜りめだかは生き残る　冨美子
うっかりと捕まる女郎蜘蛛の網　朋月
網棚に忘れたふりの恋一つ　恵
軽はずみな午後を悔いてる網タイツ　完次

人

とても大きな網に掬えたものがない　あきこ

地

網棚に置いた金塊見当たらぬ　満作

天

人間を飾にかける答案紙　寿之

軸

一網打尽とはこのことか多数決

兼題「腕」　安土　理恵選

アスリート腕見せ所ソチ五輪　紀雄
嫁の腕褒めて任せるお重箱　キヨミ
腕まくりして母ちゃんの初仕事　月子
マー君の腕に東北夢もらう　好文
腕だめし日本を賭けた消費税　求芽
演説の腕を上げたね総理殿　あや子
アベノミクス民の腕組みまだ続く　富子
二の腕は繕いようもなく翁　完司
母介護惜しまず動く細い腕　郁夫
父と子の年の差こえた腕相撲　菜月
腕ずくで一緒になって五十年　瑠美子
ラブラブでなし介護の腕を組んでいる　希久子
女から腕組みにくる下心　正雄
きみの腕の中にわたしを爆ぜさせる　あきこ
羽衣を脱げば誰にも負けぬ腕　日の出
私から腕を組んだの待てなくて　(久)千代
生きるとはロダンも腕で掘り下げる　ふりこ
腕相撲ほうれん草を食べておく　勝弘
二の腕の肉が暴いた若づくり　誠一
腕枕そんな時代もありました　保州
両腕を広げて母は待っている　郁夫
腕ふるう母の料理に偽装無し　わこ
重点を置かねば腕も冴えてこぬ　あきこ
君の両腕はわたしのハンモック　(矢)五月
ロボットの腕に何かが欠けている　ダン吉
振り上げた侭でメッキの剥げた腕　完次
母強しか弱い腕と言うなかれ　岳人
一大事仕事の鬼が腕を組む　絹子
上げた腕下ろしてならぬ自負がある　美智子
献血に差し出す腕は持っている　希久子
敏腕と言われ孤独に耐えている　楓楽
組んだ腕離すと運が逃げそうな　寿之
木枯らしだったわけありの二の腕だった　義
スクラムを組めば力が倍になる　としお
腕の無い埴輪が澄んだ目をしてる　完次
Tシャツの腕は明日をつかまえる　(楠)章子
沖縄という腕に荷物を乗せたがり　はこべ

佳

今が華腕いっぱいに抱きしめる　万紗子
両腕を翼に駆ける一輪車　俶子
腕はまだ吾子の重さを覚えてる　真理子
職人の無口は腕でカバーする　楓楽
ひらがなとひらがな温い腕を組む　寿之

人

ときどきは腕立て伏せで立ち上がる　よしみ

地

最高の相棒右腕左腕　真理子

天

私を創るわたくしの両腕　冨美子

軸

子ども三人抱いた腕ですお月様

兼題「さかずき」　川端　一歩選

さかずきを重ね今宵は宇宙人　雅明
杯を交して融けた義理の仲　キヨミ
さかずきに月を映して一人酒　たもつ
三パー分小さいさかずき出すお店　はこべ
結論が出てさかずきに手を伸ばす　見清
さかずきが歳考えて飲めと言う　完司

篤

さかずきは男の愚痴をじっと聞き　ばっは
うれしい日のさかずき大き目がよろし　保州
大盃を干して仲間にされました　ダン吉
盃が大事なことを言うている　あや子
マー君のさかずき金粉浮いている　修
献盃のあとは遺影もそっちのけ　裕之
酌み交わす男に二言あり得ない　富子
百歳を祝うさかずき上機嫌　弥生
さかずきは距離も迷いもない宝　朝子
返杯へ間接キスを意識する　茂
さかずきを妻が隠した休肝日　勝弘
熱燗を思いだしたら身が震う　美津子
目刺し好きチビリチビリと薫風師　みつ子
盃は友情すべて知っている　アキ
夢あまた浮べさかずき乾してゆく　見清
さかずきは聞いてた秘やかな吐息　久美子
さかずきを飲み干すまでにある思案　寿子
さかずきを置いて本音を吐き出そう　ひろ子
さかずきに復興誓うまぐろ船

独酌のさかずき亡父を呼んでくる　あきこ
絵手紙にさかずきふたつ書いてくる　耕治
さかずきを交すと湧いてくる笑顔　まつお
酒好きのうんちく猪口に始まって　理恵
さかずきを下に置かさぬおもてなし　かずお
外国人だけが金杯持つ国技　善純
さかずきを持つと女は艶っぽい　瑠美子
さかずきが行ったり来たり本音出る　紀華
さしつされつ猪口は小さいほうがよい　理恵
さかずきにひょっとこ顔でキス迫り　克三
祝杯に危ない時代来る予感　求芽
お局がやっと寿退社する　六点
さかずきの海に浮かべるわたしの夜　あきこ

佳

献杯で始まる喜寿の同期会　直樹
さかずきを返し人間らしくなる　武彦
盃を伏せる独りになりたくて　大輪
盃の底逢いたい人を棲まわせる　扶美代
さかずきの底に貼りつく今日のうつ　葉子

人

さかずきの人間讃歌聞いている　希久子

地

盃の底に沈んだ罪が浮く　俶子

天

盃上げて明日の世界と日本を　としお

軸

盃を交わす相手は選ばない

兼題「やんわり」　大内　朝子選

やんわりとたしなめている箸使い　萌子
からたちの道やんわりと逝かはった　アキ
やんわりと真綿のように消費税　和夫
やんわりとカムフラージュをする妬心　楓楽
やんわりと諭してあげる年の功　宣子
私には過ぎた御方と断られ　好文
やんわりの妻の仕掛けにご用心　ばっは
やさしさへ心やんわり温うなる　賢子
たしなみがやんわり覗く身八つ口　保州
あなたしか頼るお方がないのです　としお
やんわりと断ったのに鈍い人　まつお
やんわりと心の隙を突いてくる　玄也
やんわりと惚れた女房の風に乗る　忠明
人生の色にやんわりオムライス　完次
お世辞にはやんわり針を忍ばせる　郁夫
やんわりとツボを押されて目が覚める　靖鬼
切りますかやんわり主治医問いかける　日の出
やんわりの京都訛りに買わされる　扶美代
やんわりの妻の感触あれは夢　宏子
やんわりの効果か丸く収まった　紀乃
やんわりと図星つかれてうろたえる　唯教
淋しいな老父がやんわりなりすぎる　能子
切り札があってやんわり意見する　寿子
やんわりがこたえん人と住んでいる　耕治
やんわりと言われてよけい腹が立つ　ダン吉
夫の無理をやんわり受ける妻の愛　かずお
やんわりと肩を抱くから泣けてくる　瑠美子
斜めからやんわり視線浴びている　定昭
やんわりとハートを突いてくるピアス　富子
やんわりと刺された釘がよく疼く　楓楽
やんわりと刺さったトゲは抜けにくい　真理子
やんわりと終止符出してさようなら　公誠
やんわりの笑顔に何もかも許す　能子
やんわりと褒めてお尻を叩く妻　あや子
やんわりと小骨入ったお説教　月子
大虎をやんわりかわす年の功　理恵
やんわりの示唆がわたしを頷かす　あきこ

佳

やんわりと春の気配を背に受けて　美智子
やんわりと諭す祖母の目仏の目　みつ子
名人はやんわり遠い石を打つ　一歩
やんわりの揉み手の中にあるジョーカー　(矢)五月
しゃべらなくてもやんわりぬくい君のそば　葉子

人

弥陀の手にやんわり抱かれゆく浄土　いさお

地

やんわりの笑顔で渡っているこの世　理恵

天

やんわりと元旦になる朝ぼらけ　天笑

軸

七草で胃にやんわりのおもてなし

兼題「新しい」　村上　直樹選

新年のとびらときめく色を持つ　紀乃
躾糸抜いて初出の五ツ紋　柳伸
新しいくつ新しい音がする　月子
満載の欲で重たい絵馬供え　裕之
初暦めくる指先の念力　よしみ
花丸で埋めたいものよ新暦　アキ
天声人語今まっさらな朝を切る　柳弘
書初めに禁煙と書く十年目　茂
無病息災七草粥の事始め　柳弘
遷宮と昔のままの五十鈴川　宏子
山茶花を掃く新しい竹箒　瑠美子
新しい手帳に記す嬉しい日　耕治
夢抱き新成人が目で誓う　唯教
活火山新島を産み日々育ち　紀子
ハルカスの窓から望む生駒山　公誠
素うどんが消えてしまった新メニュー　大輪
食育の始まりまっさらな乳歯　奏子
若者の新語必死についていく　隆彦
新しい手口でやってくる詐欺師　美智代
新薬と新種ウイルスせめぎ合う　俶子
真っ新な命育む岩田帯　キヨミ
わたくしを真っ新にする次の恋　冨美子
反戦歌何度聴いても新しい　楓楽
ピカピカのランドセルから芽吹く春　冨美子
新しい智恵出てこいと酒を酌む　完司
新曲は10回耳に焼き付ける　弘光
新調の眼鏡幸せ連れてくる　アキ
新機能が慣れた機能を駆逐する　見清
新任地まずは地酒を教えられ　篤
次次と夢を見いだす趣味の道　堅坊
買い換えたスマホに軽く遊ばれる　かずお
新しい出合いもあった回り道　扶美代
新しい恋に出合えそうな予感　朝子
結果どうあれ新しい事に挑む癖　はこべ
新しい服だな恋をしているな　あや子
iPS医療に命かける親　日の出
掘り立ての筍嘘はつくまいて　完次
佳
2020温故知新のおもてなし　敏治
一冊の詩集くじけず日に新　弥生
ご破算にして真っさらなドラマ描く　寿子
新しい夢に五感が踊り出す　(久)千代
心地良い新風が吹く川柳塔　(久)千代
人
負け組にまだまっさらな明日がある　好
地
まだ匿っているわたくしの中の新　あきこ
天
腹を決め誰も歩いていない道　ダン吉
軸
立ち木に斤 勇気をくれた新一字

兼題「願い」　西出　楓楽選

沖縄に静かな空が蘇る　紀雄
ビリケンさんにちょいと触って来た願い　理恵
束にされいつか再生願う古紙　黒兎
願いは一つ妻よ長生きしておくれ　敏治
亡母さんを乗せてやりたいななつ星　冨美子
いつまでもうまいお酒が飲めるよう　完司
平凡が続けと願う台所　すみ子
駄馬二頭ただ穏やかに暮らしたい　賢子
ソチ五輪報われて欲しアスリート　蕉子
願いはひとつ子供の笑顔絶えさせぬ　能子
無理なお願いだと知っている鏡　希久子
お金より元気を願う後期です　順子
神さまに見えるよう絵馬かけなおす　(田)章子
ささやかな願いを結ぶ梅の枝　美智代
百円で一年すごす初詣で　朋月
お願いを聞きあきた神居留守する　宏子
淋しいことだ願うことがない　蘭幸
お願いの顔捨てました当選後　和夫
折入っての願いはやはり金の事　絹子
まだ懲りずトラの優勝祈願する　好文
孫入試絵馬を三枚書きました　(樵)章子
おおかたは聞き捨てらしいえべっさん　修
願いごと叶うの神籤彼に見せ　耕治
本年もせっせとくじを買うつもり　勝弘

大鍋へ願いを込めた大根焚き　(楠)章子
世界中に戦火の消える日を願う　紀乃
生涯に残せる一句をと願う　能子
花言葉願い叶うといいですね　寿子
願うなら努力なさいと月笑う　(矢)五月
汗水を流して叶う願い事　隆彦
ご破算に願いたいのは年の嵩　好
七色の風に包まれたい余生　アキ
願かけの数だけ濡れて立つ不動　俶子
贅沢な願いなのだろうか平和　敏治
終焉は秋の木の葉の散るように　菜月
拾い上げたのは願ってもないチャンス　扶美代

佳

九十年へ路郎薫風天翔る　たもつ
一票の願い届かぬもどかしさ　弘一
欲ボケの願いに神の開いた口　茂
宝くじはずれ安心して眠る　なぎさ
大望を抱いて追い風待っている　(久)千代

人

ご破算で願いましては秘密法　克三

地

五十鈴川渡る静かな願い事　完次

天

ひと粒の麦になればと書いている　(矢)五月

軸

来世は才色兼備お金持ち

句会燦燦

12月句会を読む　青砥（あおと）　たかこ

世の中の裾野気楽に生きている　玄也

世の中の裾野と、わざわざことわっているところに几帳面さが見える。気楽に生きるには裾野に限る。

思い切り枝をはらった身の軽さ　能子

ただ断捨離をしたでは面白くない、剪定に例えたところが面白い。枝をバッサバッサと切り落としているところが浮かぶ。

人間のエゴで剪定される松　武彦

庭の松だって自由に伸びたい。盆栽の松は、剪定され針金で形を整えられる。松の嘆きが聞こえてきそうである。

枝伸びる無限の空に誘われて　弘一

比喩としての「枝」が多かったように思う。この句のように無限の空に伸びる枝でありたい。

もう女捨てたら妻は相棒だ　天笑

相棒が元気で私つかれます　月子

夫婦の相性が、ぴったりであることが証明されていて楽しい。

ちっぽけな意地相棒にして生きる　アキ

いざというとき本当に頼りになる、と思う。

気高さは盲導犬に叶わない　堅坊

バスの中、大きな身体を飼い主の傍に折りたたみ、凛としたその横顔は本当に気高い。「叶わない」は「敵わない」？

めまいするほどの嫉妬をしてみたい　一歩

その前に狂うほどの恋をしなくっちゃ。

8パーセント如きにめまいするものか　たもつ

10パーセントへのほんの足固め？だとすると、そりゃめまいなんかしていられない。踏んばろう

老地衣

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

わかあゆ川柳会（島根）（前月分）松本はるみ報

探っても本性出さぬしたたかさ　澄子
木枯しの吹く夜は温い鍋にする　ちよえ
老骨の肩に食い入る荷の重さ　かつ子
日本晴れ老後も一役頑張ろう　英子
荷物ひとつこれがあるから生きられる　はるみ
お荷物にならないようにと汗をかき　好栄
晴れないで相合傘の雨蛙　恵美子
子の荷物ならない為のウォーキング　昌

米子住吉川柳会（鳥取）渡辺多美子報

裏通りのコスモス畑にぎやかに　登美枝
廃行の残った花壇蝶も去り　幹啓
風穴をあけて袋を楽にする　未延子
生きるため計器指図で舞っている　正二
美味しいと食べる幸せこの先も　多美子
鍋奉行二人になってご用済み　宏之
千枚の田に千枚の月の歌　紀の治
街灯の代わりに照らす月明かり　ひろし
鉢の中豊かな自然草ぼうぼう　公一
秋色の出番待ってたショール巻く　礼子

和歌山三幸川柳会　武本碧報

こっそりと読んで大人になりました　和子
声に出し読むと気が付く誤字脱字　みね
斜めに構え男は風を読みたがる　宏夫
大根の尻尾で明日を読んでみる　智三
斜め読み忍者が読んでいる書店　義雄
裏の裏ばかりを読んで病んでいる　美羽
拳骨の裏が今ごろ読めてきた　幹子
その先を読んで答が出来上がる　准一
深読みをすると躓くことがある　次根
借りた詩集返せぬままに友は逝き　イセ
広告も読み終え秋の夜は続く　起世子
ゴミの中に人間読んでいる鳥　ひろ子
読みかけた本を枕に高鼾　当代
新聞を読んで時代の風に乗る　絹子
読まぬ本買ってポイントためている　華哨
読み止しの頁が風とたわむれる　碧
亡き母に空似の人も逢いたくて　幸子
ままごとの仕草はやはり父母に似る　義泰
父と母どっちに似ても大事な子　美枝子
ディートリッヒを真似て帽子を買いにいく　章子
父と子の目先はどこか似て非なる　高夫
親似だと言われ眩しい父の背な　昇
不器用な母の姿に似て生きる　八重子
似ていても似ていなくても不肖の子　保州
ハングリー昭和に置いてきた日本　豊
秋風に飢えたこころを掬われる　昭枝
やさしさに飢えてサイトに群れている　菜摘
あたたかい活字に飢えた社会面　町子
花買って心の飢えを満たしてる　きく
飽食の世でも悲しい餓死ニュース　弘子
昭和一桁飢えは心の隅で生き　美子
親馬鹿が分からないのが子の自慢　かず子
自慢ともとれる金喰い虫なんて　俶子
目立たないことが自慢のだんご虫　純子
孫自慢されて傷つく人もいる　富子

竹原川柳会（広島）古田太虚報

新米の香り感謝は佛にも　規代
瀬戸内の温暖地方住む感謝　汎美
今日の無事ご先祖様へ感謝の掌　栄恵
合掌にかたちになってくる感謝　蘭幸
介護する多忙な妻よありがとう　半徳
御先祖の辛苦感謝の畑を打つ　弘子
三世代要に嫁が居る感謝　敬子
住み馴れて路地のやさしさ温かさ　房子
ミスかぐや路地を出てから帰らない　輝恵
帰省の子なつかしそうに路地に佇つ　慶子
おかっぱの少女に戻る路地の風　比呂子
路地を出て虹色になれビー玉よ　千代美
赤ん坊の泣き声がいい路地の道　白狐
大願成就本はゆっくり光りだす　幸子
名作集CDで聞く弱視です　静風
波瀾万丈頼山陽を読み耽る　淑子
自分への褒美に買った本二冊　歩美
卵焼きやっぱり母の味が良い　厚子
修羅くぐり愛の終着駅に立つ　力

決断は正しかったと千切れ雲　あゆみ
愛用のちびた筆にもある命　栄香
雨が降る地球冷やしているのです　笑子
転んでもダルマのように起き上がる　千枝
兄ちゃんが師匠次男やんちゃです　史子
鉛筆一本さまざまな顔持っている　一路

松露川柳会（鳥取）　山本　正光報

仲の良い友から誘い電話くる　静江
応援歌友と歌えば風に乗り　鈴枝
その都度に頂く友の旅みやげ　豊枝
ママ友のネットワークに助けられ　弘子
八十路坂友と歩んで絆持つ　公美枝
友の声電話の向う暖かい　久子
いい話時どきくれる友一人　智恵子
傷心の友へいたわる言葉選る　和代
仲よしの友が沢山居て温い　正光
聡明な友が案外出世せず　雄々

川柳塔すみよし（大阪）　森松まつお報

国産の横綱ほしい国技館　(奥)五月のん子
北国で産まれた人は冬強い　賢子
産着の中夢を握っているこぶし　安昭
産声の春爛漫に酔いしれて　哲矢
産むために補助金もっと出しましょう　公平
産声の子の瞳から詩が光る　直子
産卵の川のにおいは忘れない　柳弘
生きたくて虚飾の遺産食べ尽す　まつお
あちこちで子供産ませちゃいけません　由一
人形の目ぢからに負け捨てられず　桃花
いち押しは玉子焼きです娘の料理　朝子
迷うたらポンと背を押す母の風　隆昭
妻に背を押されてルビコンを渡る　舞夢
押しまくり妻にしましたけど今は　典子
あの時に母は背中を押してくれ　日の出
やんわりと後を押すのも妻の役　志津子
横やりが入ってからの馬鹿力　克博
今日の一日感謝しながら横になる　妙子
受賞者の横顔を知る文化の日　公誠
横着な男と暮して損ばかり　順子
横にいてじゃまにならないうちの人　安代
横町は素敵な出会いある予感　ゆみ子
気がつけば横に寝ていた青い鳥　満知子
横道にそれず育った子に感謝　裕之
喋るより横で聞いてる方が好き　芳香
横道にそれず歩けた君がいて　定子
横入り私絶対許さない　かりん
来日のスターのようなキャロライン　篤子
一点を見つめています熟慮中　たかこ
眠る前今日を見つめて書きとめる　伸子
介護の目に蕾ふくらむ梅古木　郁子
隣国の煙もこもこ先見えず　重信
授乳時に母をみつめるこの平和　
何もかも偽装疑う目で見つめ　

川柳塔なら　坊農　柳弘報

苦しみを楽しみにした凄い人　和夫
三猿の誓いも楽じゃないタヌキ　喜太郎
遷宮は千年の知恵守りつつ　博一
年金をぼしゃる楽隠居まで遥か　清

高橋宏臣選

箱ぞりががたがた滑る上り坂　則彦
裏向きのカードの中にあるエース　武人
砂浜に昨日のニュース落ちている　小雪
水曜日流れ着いたは無人島　武
特上のちりめんじゃこは縮んでる　笑風
盗聴器女の部屋は妖しすぎ　理恵
セロリ切る愛の迷路がまだ続く　真由
ミルフィーユやさしいウソに包まれる　正美
ドーナツの真ん中へんにあるコラム　和代
朗らかに育つ大根みな太い　麦青

佳句地十選（1月号から）

山岡冨美子選

負けるから愛しいのですタイガース　勝弘
先走り付いて来るのは影ばかり　歌留多
だらだらの言い訳主語が抜けている　恵
嫁さんに欠ける愛嬌僕に有る　(穂)正子
旅ゆかばウォッシュレットにホットする　公弘
笑うため鏡はあるとふと気付く　おたか
少年の助走路にあるまんが本　桂子
木漏れ日のような笑顔で老母がきた　たえこ
胸奥の温度は書いてないカルテ　理恵
お静かに小さな夢が目を醒ます　郁夫

表札にまもられている老母一人　怜依子
守る人有って愛憎絡み合う　将文
代代の棚田をまもる鍬になる　貴子
朝飯を今日も楽しく食べている　弘風
魂を奮い立たせるありがとう　紀子
くすぐって楽にしてやる楷書体　良一
ままならぬ風とたのしく四つに組む　成子
人間に神問いかける安楽死　寿之
へつらわず自分を守る雪の富士　ふりこ
百年の掟をまもる鬼瓦　國治
嵐に堪えしかと守った花の芯　富子
道端の本音に出会う立ち眩み　保子
木釘一本伝統守る宮大工　柳弘
この辺で息つぎなどをなさいませ　のりこ
丸くなりわが身をまもる団子虫　克己
命まで捧げて護る乳房の子　比呂志
凡婦ですどうぞお楽に不動様　真理子
抱きしめて母が守った子の命　惠美子
守るもの出来て男が引き締まる　あかり
小さいがあなたを守る傘になる　辰雄
かたくなに孤独をまもるざくろの実　洋三
灯台の灯りふる里まもってる　郁夫
学園の真ん中辺に薄氷　蕉子
楽観も悲観もあわせ持つらくだ　欣之
食堂の学僧音のない修業　ばっは
ドア開けたそこに楽しみ待ってたよ　順啓
ネクタイを締めると楽になる躾　信子
偽装表示している頃は楽でした　朱夏
秋の天軽音楽が降ってくる　蘭幸
ピラミットの一番下にいる父だ　朝子
花びらの軽さ命のはかなさと　タカ子

南大阪川柳会　津守　柳伸報

雑用は老いの仕事と手を上げる　直子
無駄はぶき雑用へらす工夫する　祥昭
雑用に追れ本分見失う　たもつ
雑用の汗を大事に二度の職　庸佑
箸使うマナーきっちり祖母仕付け　寿美子
京料理箸の運びが淑やかに　恭昌
リハビリの箸が一途に豆を追う　柳弘
菜箸に命吹き込むシェフの自負　楓楽
骨拾う箸はすべてを許してる　修
いつまでもお金の方が忙しい　栄子
村芝居何回も出る斬られ役　和雄
左利き忘年会に忙しい　正春
貧乏性うごいていなきゃ落ち着かず　弘子
予定表趣味と飲み会埋めつくし　歌留多
忙しい人ほどまめに浮気する　なぎさ
ジングルベル音につられてせかせかと　克己
忙しい論吉で家に居付かない　志華子
忙しい頃は人生真っ盛り　弘泰
退屈なますます嫌になるベッド　柳伸
スクラムを組むとますます上る士気　柳右子
歳かさねますます増える減らず口　昌紀
弁解にますます立場悪くなる　忠昭
コスモスが休耕田の是非を問う　ルイ子
追悼の山崎豊子の本を読む　紀乃
塩少し振ってみようかこの話　更紗
里の秋姉が待ってる温い風　ばっは
やりくりももうこれまでだ爆発だ
青い目の曾孫出来たとメール来る　一歩
モミジの手アンパンマンに首っ丈　勝弘
振り向けば八十年の悔いと自負　集一
福の神肩たたいても逃げてゆく　あや子

川柳塔打吹（鳥取）　野口　節子報

ゆうゆうとしてはおられぬエンディング　たけ代
ゆうゆうと心静かに喜寿の秋　清
主婦忘れゆうゆう遊ぶ旅の空　龍枝
ゆうゆう自適いつのまにやらボケが付く　紀美恵
ゆうゆうと遊びたいので忙しい　義人
ゆうゆうと今日の余白は胸の中　美知江
ひらがなのくにでゆうゆうさくらさく　三津子
次の世の踏み台なると枯れて行く　道子
執念で枯れても芽ぶき生き残る　久芽代
ススキ揺れ枯れた姿は蝉思う　恭子
自然界芽が出る季節枯れる時期　陽之助
遠回しに言われた意味がピンとこず　悦子
遠く住む娘が想われる秋夜長　芙美子
遠くでも宇宙に一度行きたいな　貴恵
遠からず逝く日の焼場見て回る　美代子
遠いのが極楽近いのが地獄　照彦
垣ひとつ無いのに遠いお隣さん　公恵
幸せを語れば遠い日にもどる　節子
手が触れるところに遠い胸がある　芳光
遠い遠い遠いバラ色の世界　石花菜
極楽は角を曲がって遥か先　滋
角の立つ話に入れ歯かみ合わず　玲子
角樽に米寿を祝う菊を活け　重忠
湯豆腐の白さに嘘や角はない　重利

角出さず爆笑もせず夫と居る　和子
還暦の角を曲がってパラダイス　くにこ
睨んだらすぐに引っ込む角である　紀の治
角が取れ丸くなったね腹回り　耕治
いつまでも角突き合わす神と神　野蒜
追い風も角を曲がれば向い風　玲坊

川柳ふうもん吟社（鳥取）**夏目一粋報**

あゝ古稀へ修正ペンが手離せぬ　洋々
へこんでる心を放つ秋の天　無限
働き者と推されて婿にもらったに　蟹郎
身勝手な男にこの娘ようやらん　妻子
本物とてっきり信じ買った壺　昌鼓
へコんでる時には藁も杖になる　地佳平
ええっちゃが出来ぬ自分が情けない　金祥
ロボットになれぬ勤務に愚痴ばかり　節子
整形に見事てっきり騙された　凱柳
親の恩ええっちゃ老母は我が看る　とも湖
知識なく外食すればこわい世だ　由美子
正論も無理が通ればヘコむだけ　清信
居酒屋にヘコんだ影が落ちている　一瑶
物忘れてっきりボケとみなあわて　栄子
食偽装今日も老舗が揺れている　毅
身勝手な解釈通らない世間　みゆき
渋抜いて少しまあるくなるつもり　美佐枝
古傷がヘコんだままでついて来る　天翔
いい笑顔てきり味方だと思う　房江
あの二人てっきりできている予感　美恵子
身勝手な親の都合で子を捨てる　圭子
薬飲めええっちゃ言うにしつこいよ　孝二
業績がへこみ回復当てはない　圭一郎
へこむ頬それはえくぼとちがいます　善夫
ヘコむ道何度も越えた夫婦仲　茂登子
言いそびれためらい傷がまたふえる　春名
わが家では食材偽装当り前　回春子
ヘコむほど人生暗く生きません　菖子
神風がてっきり吹くと信じてた　秋月
ロトシックスこの数字なら大当たり　弘康
日本晴れ私貴女にひと目ぼれ　清帆
身勝手なひと一人いて輪がくずれ　雅女
身勝手だ人の言い分聞かぬ耳　はつ江
好き勝手しても家族は目をつぶる　あしび
つまずいた石を蹴とばす身勝手さ　一粋

高知川柳社　小川てるみ報

アベノミクス束ね切れない党の内　ふき
花束は小さいが今日の主役です　千恵子
札束に人の弱さを見抜かれる　典雄
訳ありのリボンで結ぶ花の束　哲史
札束を解けば百人の諭吉　三郎
花束の中に隠れている妬心　てるみ

川柳塔唐津（佐賀）**仁部四郎報**

疲れてる妻の寝顔に苦労皺　松風
若者の話が見えず立つトイレ　蜂朗
代読の式辞カットはできません　四郎
手を入れず自然を生かすその配置　實
アリガトウ素直に言える子は素敵　高明
西之島噴火不気味な前ぶれか　節子

川柳茶ばしら（愛知）**関本かつ子報**

本人以外には渡さないお金　遡行
いざこざの無かったような夫婦仲　まみ子
おしゃもじの足るを知らない愚痴の数　美千代
順番が狂った時の胸騒ぎ　雅美
ピカピカに磨き迎える初日の出　百合
賛成の数で未来も決められる　かつ子

川柳塔おっぱこ吟社（香川）**川﨑ひかり報**

三年の夢を八十路で植える栗　放任
ダイエット チラリ横目にモンブラン　はつ恵
不揃いの栗それぞれにある個性　いさむ
爺ちゃんへ茹で栗置いて行った孫　弘
めでたさが箱一杯の栗饅頭　よしみ
DNA皆ドングリの背くらべ　ひかり

富柳会（大阪）**古田千華報**

気苦労も生活の中の糧にする　登子
引出しの奥で秘密が動き出す　千恵
弾けてはならぬと哭いた石榴の実　未知
若いなと言われついつい無理をする　佳子
パレットにまだ原色がある若さ　澄子
酷暑にも負けず切り株から若芽　浩子
活火山抱いて私の赤い旗　奏子
活性化を求めて遺伝子が騒ぐ　晴美
活き活きと無心の汗にある誇り　紅紫朗
もう一度恋に活きるという術後　伸雄
生きるとは活きる私は黙らない　ダン吉
触れたくは無いが避けては通れない　七朗

触角を立て顔色を探る蟻　武人
ストレスの指豆腐の角に触れたがる　慶子
触れ合った未練の袖が揉めている　惠
琴線に触れた辺りで編む絆　よしみ
喫水線あたりが触れに来る本音　アキ
俗信へてかてかになる撫仏　朝子
奥の奥誰にも言えぬ赤い月　寿之
もう時効そっと奥から顔を出す　和子
抽斗の奥に臍の緒かしこまる　初太郎
両の手で受ける温もりある言葉　彦次
正直の陰にこっそり潜む嘘　壽峰
真っ直ぐに世間を渡る律儀者　高鶯
真実を打ち明けてから遠くなり　柳子
まだ温い臨終なんて信じない　正治
鳩尾に朱い実弾持ち歩く　清
ふる里と再会赤い実がたわわ　安希子
邪魔もせず邪魔にもならず山椒の実　田鶴子
千年のロマンを赤い実が語る　洋子
おんぶして育てた頃が花だった　睦子
ちびてちびて鉛筆の芯実を結ぶ　希久子
まっすぐが好きまっすぐがむずかしい　欣之
伸びしろをたっぷり持っている手足　喜八郎
真実を一つ飲み込む義理がある　森子

川柳ささやま（兵庫）　遠山　可住報

受話器から生きる灯りを有難う　久子
花は咲く世はサービス老い唄う　美緒子
運命の瞬間五輪東京へ　純子
悪運の強い方へと触れたがり　美紗子
おまけより値引きの方がありがたい　哲男
掌のひらに運があるとは面白い　稠民
運は天にひいてみますかあみだくじ　真由
強運は神が授けたお裾分け　勇
サービスに記念写真よハイチーズ　多美子
おみくじで試す良いくじ持ち帰る　開子
忙しく師走を飾るルミナリエ　可住
孫三人安全運転祈願する　かほる
忙しく最新ニュースを追うキャスター　幸子
運の良さ顔に出ている良い笑顔　ちかゑ
サービスの過剰押売り遠慮する　照代
年の暮れ元気ならこそ忙しい　美智子

八尾市民川柳会（大阪）　土田　欣之報

北風に風のかたちを舞う枯れ葉　朝子
輝いた頃もあったなちびた靴　寿之
群れをなす鰯弱者の生きる知恵　壽峰
しっかりと宇宙を握るもみじの手　賀世子
旅立った笑い上戸の愛娘　高鶯
息つぎを上手に雑音をくぐる　加央里
笑って下せい荒れ果てた田畑　草風
寒暖に五百羅漢の泣き笑い　清
冬最中温い言葉を渡さねば　森子
紙なのに人を鬼にも邪にもする　常男
悪法を白紙にしたい秘密保護　紀雄
両手で顔を隠せば怖いものはない　耀一
食卓の一品になるいい笑顔　慶子
人間が白紙に戻るときけむり　欣之

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

極月の日暮れからムンクの叫び　小雪
せいいっぱいアクセル踏んで年括る　冨美子
十二月今年の垢を削ぎ落とす　ほのか
自画像を塗り替えながら十二月　あきこ
カレンダーあと一枚と淋しがり　佐一
十二月配当金は多かった　克子
リストラで無理に冬眠させられる　准一
冬眠から覚めればみんな消えていた　紀子
冬眠でもするか世間が騒がしい　大輪
昼もうとうと冬眠に似た暮らし　英子
煩悩も意地もすっぽり冬ごもり　寿子
たっぷりと母乳を飲んでいる命　保州
聞く耳を持たず自分で作る壁　泰女
メッセージ壁に残してお引っ越し　紀久子
生きるんだ壁に残した蝉の殻　千賀子
突き当たる壁に感謝の糧もらう　和香

川柳塔みちのく（青森）　小寺　花峯報

冬近し心せわしく柿をつる　小とみ
飛行機雲二つに切った青い空　一湖
冬近し津軽いよいよ押し黙る　美鈴
冬支度こんなに服があったっけ　綾子
冬近したまに冬眠してみたい　柳子
いらいらを母のおむすび柔らげる　初江
霜柱冬の匂いを嗅いでいる　ひとし
蔦沼を切り取るチャンスまだ来ない　則彦
津軽野に小節の効いた枯葉舞う　芳生
渋柿と妻を吊るして甘み出す　一呑
冬近しこころ急かせる雪囲い　花匠
焼芋を園児が囲む冬近し　井蛙
母に似た方に傾くやじろべえ　黙人

冬近し春の明かりも少し待ち　隆　樹
切腹はしない謝罪で茶を濁す　慕　情
ちちに似た羅漢咳して　そして冬　劦

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

陛下には手紙を渡すことなかれ　敦　子
バーゲンへママチャリの旅小半日　信　子
いつまでも若い若いは怪我のもと　嘉　子
情のある人だと言われ気を遣う　恵美代
からたちが春を待たずに逝くなんて　三　郎
うちの嫁晴れのち曇り忙しい　由　里
八起き目の次も転んだ達磨さん　一　聴
もの忘れ忘れた頃に思い出す　あゆみ
秘密保護みんなが貝になってゆく　葵
教室に通う料理が馴染めない　和　之
少しずつ消える里山原風景　純　宏
食べ納め去年も言ったむかご採る　陽　子
酔ったふり内緒話をみんな聞き　茂　子
シュレッダー通り綺麗な過去になる　みどり
勝者より敗者の気持ちよく分かる　章　子
主婦の目がさっと比べる籠の盛り　美恵子
置き上がりコボシ錆つくひまがない　安　子
鳳仙花ポンとはじけて自由の身　澄　子
荒波に放り出されて意地を出す　華　蓮
売る野菜嫁に出す気のお化粧を　菜　美
収穫後かかしのんびり日向ぼこ　和　代
継ぐ者ができて襟元正してる　一　眸
幕引きを神にまかせてなお不安　遊　子
オレオレに持って行かれるよう貯める　はるお
一徹を通すこの陽が落ちるまで　公　弘

川柳大阪　森松まつお報

ほっとくと危ないやんか秘密法　美世子
まずまずで終れば最高つりいらぬ　喜　楽
まずまずの髪型金がかかってる　まつお
無に還る日までまずまず来ないだろ　弥　生
まずまずの暮しが狂う消費税　一　歩
まずまずも少し足りぬと鬼コーチ　（奥）五　月
ささやかな幸せ熱いお茶すする　笑　風
私には直ぐ熱くなる妻である　善　純
熱いものあり反戦のペンを取る　ダン吉
熱のあるうちにやんわり愚痴一つ　万紗子
熱燗に湯豆腐あれば冬越せる　勝　弘
飛べるだけ飛んでみたいな熱気球　信　酔
軽い口日本列島熱を出す　紀　雄
人間の仕打ちに熱を出す地球　堅　坊
大切な人の秘密はのぞかない　芳　香
献金が医療機関を汚染する　彦　太
深海に潜ってしまう秘密です　比呂志
自分史に書けない過去に責められる　川　童
あこがれが恋に変わっている秘密　柳　昌
秘め事を隠し切れない青い天　あかり
嘘をつき嘘が重なり墓穴ほる　和
まだ何か隠してそうな百貨店　由　一
ワイドショー人の秘密を売り物に　公　平
口止めをされる話は聞かんとく　柳　弘
ここだけの話や言うてあちこちで　珠　生
これ秘密言えば勝手に歩き出す　かよこ
いつまでも男の好きな秘密基地　朝　子
政治家の好きな言葉に前倒し　隆　司

くよくよも思案もせずにケセラセラ　鉄　心
お正月祝いの膳ににらみ鯛　功
バナメエビ上下ドレス忙しい　司

倉吉川柳会（鳥取）竹信　照彦報

世界中しぐれどころか土砂降りだ　次　男
老いの身がしぐれにあって風邪を引き　智恵子
しぐれ月暑さ過ぎたぞ冬支度　紀美恵
しぐれ降る駆け込む軒もない通り　雄　大
仲間から一人が消えて秋時雨　美ッ千
暑くなれ夏にはうまい「宇治しぐれ」　けいこ
くっきりと貧乏人とお金持ち　石花菜
くっきりと歌舞伎をまねた隈を引く　玲　坊
馬にかまれ歯形が肩にくっきりと　重　忠
カレーの染みくっきり残る一張羅　龍　枝
リトマス紙くっきり君はブルーだよ　悠　子
くっきりと湯船の中は柚子の色　祐　子
でこぼこをなぞって歩く白い杖　英　子
母の字をなぞって覚え子は育ち　瑞　子
ぼくの後なぞって来いと陽が沈む　完　司
なぞっても母の型にまだ遠い　康　子
今日も又なぞりなおして生きている　恭　子
地図なぞり娘の住む所思い馳せ　風　露
電話する九十代の兄元気　和　子
本棚で安堵している太閤記　玲　子
カーテンが開いて元気と安堵する　萩　江
今日も又手足も口も良く動く　由紀子
安堵して眠れぬ熊が町に出る　茶　子
仏壇に花を供えてから散歩　美代子
病人も医者の顔見りゃ安堵する　貞　子

傘持たぬ旅の時雨に高い傘　照彦

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

東の間の夢夢としてさめました　久子
東の間の審議で口を縛られる　春代
東の間と今は思える子育て期　桂子
東の間も惜しみ働くスマホ指　郁子
ひとときのまどろみ母は子に還る　美智代
東の間の幸せほっと露天風呂　正子
東の間と思えばいとし生きること　純子
誤解生む警官を見て走るとは　信男
生んだ子と共に歩んで親になる　順子
これだけは是非と女房の家事指南　勝
是是非非の真実見抜く度量なし　柳童
ぜひぜひと請われて嫁に来た不覚　幹治
世話になりぜひお会いして倍返し　長一
未来へといま原発の是非を問う　黒兎
ワインなら妻生意気に指を立て　久仁子
酒好きが理由をつける酒の量　正代

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

もう幕は下りる頃だと拍手する　叮紅
幕あがるホール拍手に目に涙　注湖
幕間にそっと隣を気遣って　ゆき
幕があき夢がいっぱい盛り上がる　ちえこ
ボス猿を演じる俺はピエロだよ　芳山
寒椿演じることは何もない　博子
代役に私の度胸試される　久絵
神妙に演じた後に舌が出る　民子
人間を演じる今日の飯も食う　とも子
晩秋へ弾き語りする木守柿　畔
究極はいっそピエロになってみる　知恵子
嫁いだら近くて遠い里だった　芳恵
遠い日を思い出させる山と川　禮子
お月様今宵は傍に居て欲しい　らふ
遠大な計画奥歯噛みしめる　左余
遠い日のロマンを辿るくすり指　幸代
子の想い親の想いが遠すぎる　寿代
封切ればあなたが遠くなるようで　美智子
腰据えてピンチの壁へ立ち向かう　淞丘
水たまりピンチ承知でとんでみる　桂子
ピンチになると神様に会いにいく　久枝
ピンチこそチャンスというが難しい　輝山
乗り越えりゃピンチの後は青い空　草庵
ピンチにはくじけぬ意志を持っている　長吉
嬉しい時悲しい時も飲んでいる　幸子
上達につながるものを飲んでいく　柳歩
ノンアルコールでも酔っている私　千里
演台に立って次々人を飲む　青帆
降圧剤飲み終えてからする喧嘩　弘充
競い合いサプリメントを飲む傘寿　昌枝

わかあゆ川柳会（島根）松本はるみ報

違反ひとつ知らない内に積み重ね　恵美子
しんしんと一人が似合う夜が更ける　澄子
努力とは言わず運が良いと言い　ちよえ
まっいいか小さい違反で通り抜け　かつ子
肩すかしされたからこそ強くなり　英子
肩の手は君の優しさ風の中　はるみ
ほどほどの力で勝った亀の足　好栄
雑音ですまぬ身銭をきる話　昌

長柳会（大阪）坂上　淳司報

金さんと銀さん黄泉で栄誉賞　淳司
取り敢えず私も七ツ足してみる　正博
デパ地下で香る松茸通り抜け　登美子
的外れ捜査会議は遣り直し　武男
不用意なあの一言が悔やまれる　敬二
夢を見た外れ馬券の紙吹雪　靖博
寒風に吹雪となって散る馬券　ともこ
初夢は彼をゲットしクルージング　輝子
衣食住足りない頃の小さい夢　芳野
八十路来て未だ夢を持つ諦めず　正子
午年にいいことあれと夢託す　孝代
黄身二つ得したような目玉焼き　篤
内緒借り疑惑の答え的外れ　幸子
大阪の粉もんどれも外れなし　（穂）正子
馬づらを芸の肥やしに三枚目　修
世のためにせめてなりたや馬の足　克三
母の愛無料奉仕という美学　隆彦
思春期が列を外れて闊歩する　久美子
来年の春へ夢見るカレンダー　三和子
双子でも満額でした母の愛　和代
双子減税すればニッポン生き返る　直樹

あかつき川柳会（大阪）山本　柳昌報

森林浴胸いっぱいに吸うみどり　敏治
産声が母の乳房へおちょぼ口　鉄心
深呼吸してもやっぱり腹がたつ　六点
遠慮して遠慮して吸うタバコなり　直子

吸い飲みを上手く使えて退院し　美智子
木枯しに友人思い吸うたばこ　三成
神仏は困ったときに思いだす　勝弘
一分間黙祷をして使者と会う　祥昭
口きかぬ仏に答貰う歳　哲男
祈るのに理屈をつけて除夜の鐘　柳弘
マンデラの祈り続けた虹の国　のぶ久
立ち話妖しい奴と機密法　美花
安らぎが欲しい地球のそこかしこ　菜々子
手を振って大地をひたすらに歩く　ダン吉
核実験たとえ地下でも許さない　信二
チューリップ指折り数え待つ出芽　たかこ
地上とは天国までの一里塚　たもつ
人間は借りがいっぱいこの地上　ばっは
地下に居て地上の風を恋しがる　和雄
エンジェルよ僕の背中にそっときて　忠昭
ここだけの話は迂闊にはできぬ　敏子
衛星の汚染写真も秘密です　武
そのうちに山も砂漠もアスファルト　大気
蓋すれどどこかが漏れる汚染水　秀夫
法案に蓋をするのは多数決　信子
身も蓋も無い嘘ついてする破滅　壽峰
ゴタゴタを丸くおさめた落とし蓋　奏子
蓋全部開けんと嘘はばれますよ　篤
寝言いうたか心の蓋がゆるんだか　耕治
原発事故地獄の蓋を吹っ飛ばす　堅坊
まだ蓋をとるなと奉行怖い顔　いさお
醜聞に蓋して五輪おもてなし　克己
闇鍋のふたを開ければ増税か　紀乃
弱点を見せぬ笑顔で蓋をする　朝子
ワンカップ幸せ色の音であく　穏夫

西宮北口川柳会（兵庫）　藤井　宏造報

男気が見て見ぬふりはできぬもの　じろう
お母さんには優しい言葉だけでよい　わこ
喧嘩して実る夫婦の四十年　みよし
あこがれは雲の如くにふわりかな　伯備
くれるなら五百万ほど現生で　勝弘
贈答も賄賂も同じ匂いする　朋月
マンボウのように悠々でかい奴　盛夫
母みたいな母になりたく真似てみる　歳子
終章はせめて実りのあるものに　秋果
やりくりで一家支えた肝っ玉　淑子
実る日を信じ柚子の木十八年　正和
重ね着で家族一つの部屋に棲む　キヨミ
先まわりしても同じ花だった　求芽
やりくりは妻に任せて五十年　哲男
一度だけ本気で祈ったことがある　一徳
子の声も聞きたくもあり贈り物　光子
いつの日か見事に咲いて散りまする　玲子
あこがれの人の斜めに席を取る　千代
輝く目五歳の夢は花屋さん　弘子
贈答品味より値段気にかかる　遼子
実りある過ぎゆく古希を慈しむ　文香
やりくりは妻に任せて僕昼寝　利子
猛練習そのうちきっと実を結ぶ　武臣
鈍感な私を威す静電気　敏夫
実る日を祈ると母は切手貼る　嘉代子
句集手に真っ赤な秋を抱いている　千賀子
あこがれの胸に期待背中に故郷を出る　浩司
わたくしの樹に友という実がたわわ　折杭
よく笑う妻神様の贈り物　毅
父の気遣い新居に表札が届く　美籠
やりくり上手なのに男の運がない　忠
杖つけば杖つく影をいとおしむ　武彦
実をつけて娘見事な花になる　宏造
もてすぎてやりくりつかぬ予定表　茂
やさしい目やはり苦労をした人だ　美津子

川柳藤井寺（大阪）　鴨谷瑠美子報

その夢をいつかカラーにする努力　奏子
いい年へ夢ふくらます冬桜　みつこ
車座ででっかい夢を語り合う　まつお
見えぬのに自転車に乗る夢をみた　英夫
長寿願う私の夢はでっかいぞ　みよ子
年重ね夢の数だけ枝を張る　キーキー
朝の夢覚めて一人の茶をすする　龍一
特高に突然逮捕された夢　勝弘
二十年神も夢見た御遷宮　絹枝
テレビ見て急ぎ駆け込む脳ドック　喜代子
急げ急げ極楽行きの舟が出る　いさお
急いでも地球の自転変わらない　フジ子
人の世やどうにもならぬ事ばかり　美代子
家路急ぐ何の理由もないけれど　扶美代
急がずに昔話も熱燗も　瑠美子
居酒屋で心の隅を大掃除　清之
旅プランまず故郷の駅に立つ　ヨシ枝
プラン通り進み安堵の舞台裏　大子
ぴったりと寿命と合わせ使う金　信二
旅プランみんな勝手な事を言う　六点

この先のプランは未だ白紙です　雄太
年寄りは年寄りなりのプラン立て　雅枝
百まで生きるプランを立ててあり　悦子
人生はプラン通りに行くもんか　光男
元旦の計を守ったことがない　一歩

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

幸せな犬だないつも尾を振って　弘子
逢える日も逢えぬ日も好き名簿繰る　美ッ千
まだ呆けていないつもりの物忘れ　(西)和子
尾っぽなく甘えるふりも出来ません　鈴
会えるまで夢のスイッチつけたまま　すみれ
名簿から浮かぶ校舎ではない　咲和
人の世に迷惑ばかりかけている　螢
尾と鰭を付けて鯨は蘇る　照彦
朝刊はお悔やみ欄で読み捨てる　いさお
むずむずと伸びたがってる尾骶骨　盛桜
人間の裏を見てから飽が来る　八重
誰にでも尻尾振るから任されぬ　実満
野良着にも飽きたと言える暮し向き　孔美子
前脳が故障スイッチ入らない　露子
一世紀食べても飽きぬ米の飯　惣子
母さんのスイッチ切れて淋しい日　みさ子
愛されて猫の尾っぽは良く動く　(岩)和子
飽きがきた不況まだまだ続きそう　くに子
黒髪の名簿にぎわす花いのち　富久江
くり返し飽きた話を聞いている　かおる
口軽の今だ尾を引く傷を持つ　満
十二月スイッチずっと入りのまま　小鹿
スイッチオン介護ロボットどっこいしょ　蟹郎
祝年の名簿を探す敬老日　美代子

詐欺師が喜ぶ生年月日入り名簿　茶子

豊中もくせい川柳会（大阪）藤井　則彦報

ぐらぐらと沸いて薬缶が笛を吹く　庸佑
ストーカーされてみたいと思う齢　肇
さあどうすると詰め寄ってきた年の暮れ　かずお
大勢にもまれて磨く自分色　堅坊
俺の外さらにイケメン居るらしい　徹
付き合いもさらに削ってサッパリと　勲
風見鶏風を掴めば風に向く　(永)玲子
壊すまい泣くまいとしてはや五十　武彦
笑おうか良い事さらに増えるよう　美佐子
クラス会おれやおれやとズラを取る　幹治
原発を壊す過程を見届ける　美津子
将来の夢はと聞かれ困り果て　不動
わかってる皆まで言うなボロが出る　満子
朝ドラは今佳境ですパン焦がす　美智代
皆様のお力を借る気の弱り　見清
我慢我慢自分にそっと言い聞かす　千鶴子
自分では三重丸で出す没句　茂
溜め息が恒例の母十二月　(岩)玲子
頂点に立っても変わらない目線　則彦
衿まきを二重にまいて冬の月　紀華
お邪魔でも手造りの椅子壊せない　正彦
自分らしく生きるぜいたくなことだ　義
病得て夫婦の絆強くなる　美籠
現世は自己表現の晴舞台　健二
壊しても丸になれないまま四角　葉子
皆の言う通りにしたら自己嫌悪　千代
冬の陽へさらに動かぬ影法師　求芽
十二月人のいるとこだけ歩く　啓子

はびきの市民川柳会（大阪）永田　章司報

百万円札はメモ用紙でした　みつこ
口実が笑える時は許します　喜久子
九十九折紅葉満喫バスツアー　庸佑
ばあちゃんの手はマジックで痛み取る　ヨシ枝
防寒衣着込んで巡る紅葉狩り　ちづる
大地けり手をふり前を見て歩く　かつ美
三度目の口実友が居なくなり　登志子
来たで来たであの人来たら何かある　光男
トラブルがトラブルを生む会見場　久仁子
肩を揉むもむ手が温いあなたの手　アヤ子
柿すだれ古道の里を染めあげて　美喜
年寄って腰のトラブル困ります　敏
職人の手から生れる国宝級　フジ
安閑の日々トラブルなんぞ向う岸　シルク
生きている限りは消えぬ愛と憎　泰子
手の痛みが生きてきた道思い出す　雄太
握手して一票入れて騙された　いさお
あれこれと口実僕が萎んでる　ダン吉
エンジンのトラブルらしい倦怠期　六点
滝壺にもみじがはらり浮く挽歌　美代子
トラブルも踏み台にする昇り竜　章司

京都塔の会　桝本　宏子報

即吟を急かせるように紅葉散る　武彦
修身の通りに生きて疎まれる　則彦
会議室暖炉は今も主を待つ　求芽
我が気質良きも悪しきも父母に似る　紀子
叱るのも叱られるのも皆修業　大子
大木の何んと愛らしい紅葉の手　千枝子

おばあさんの修業しているところです　義
末席に連なり同じ酒を呑む　啓子
修正テープで消した本音が悩ましい　英旺
宿坊の朝の修業で心澄む　みどり
勘違い重なるミスにああしんど　輝美
落葉舞う少し迷いがあるように　弘之
借景のもみじとコラボする命　朝子
原発は忘れ一先ず紅葉狩り　堅坊
要らぬもの客に連なり買いました　文代
ラッシュ時に顔の補修が進んでる　益子
修身のなくなってから世の乱れ　義昭
渋滞のなかで楽しむ京の秋　葉子
連なった沢庵笑う今朝の幸　満子
願わくは脳の修理を一番に　ふりこ
アメ玉で修めるわたし悪い癖　宏子
へとへとのときに嬉しいチョコレート　わこ
誉め言葉連ねるよりもバラ一輪　美智代
花嫁修業すんでそろそろ婿さがし　扶美代
へとへとでも食べれる妻と残す僕　すみ子
へとへとへ神が下さる休息日　義子
へとへとの老老介護噛い合う　肇
父曰く子を育てるは親修行　弥生
尋常科で修めた九九が役に立つ　たもつ
吟行会枯葉シャワーにかん呼する　めぐ
育てた子おさめてかなしはれ姿　弘子
とび石に年の差が出る川渡り　ゆみ
寒椿葉は緑々とつぼみ見ず　迪子

川柳花の輪（大阪）　岡本　薫報

核のゴミ未来の人が背負うのか　陽
未来より近い将来案じてる　あや乃
シーベルトの数値に暮れた冬野菜　公子
陽が沈み朝日恋しい老いの春　楽鬼
現在に追われ未来はケセラセラ　勇太朗
次の世は無口な妻をめとりたい　薫
難病の未来を照らすiPS　克衛
気忙しくなぜか追われる年の暮れ　昭好
決めている墓などいらぬ風になる　敬子
ロボットに介護されてる近未来　みちる
子が宿り未来明るくなって来る　泰子

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

バス停に寄贈座布団花模様　美江
裏表紙綴じて無心に組む座禅　仁
子の快復祈る無心の百度踏む　朝子
熱燗で聖よしこの夜老ふたり　賢子
まずい寿司ガリが旨いと誉めておく　博
被災地に無心に働くボランティア　薫
一張羅着ると手足が畏まる　寿子
寄贈され喜べぬ品でかい石　銀杏
巻きずしの端っこ母は好きらしい　仁清
惚れている分だけレモン厚く切る　郁夫
乳含ませ我が子見守る母無心　尚世
真夜中におかきポリポリビデオ見る　公子
若い時聴かず今聴く歌謡曲　さち子
被災地に寄贈する夢5千万　麗
行く年を前に見直しする懺悔　高鷲
永田町の暴走みなで取り締まる　鈍甲
最高の笑顔で孫は無心する　美智子
今日もまた世界遺産を食べている　弘風
五目寿司祭り囃しを遠く聞く　柳弘
献体という崇高な死の美学　祥昭
ご免なさいと言わずに花は枯れて散る　弘一
喪中はがき寒ざむ見てる木守り柿　洋
猫の手もリストラされて求職中　修
無心にはなれぬ年金下がりだし　かすみ
隠し芸マジック披露する幹事　三郎
線引きの出来ぬ五欲の無限大　壽峰
年末に美談ほっこりする心　ルイ子
老舗にも外国産の混じる寿司　博泉

翠　洋　会（大阪）　佐々木満作報

不機嫌な朝は目刺しを頭から　理恵
頭痛です幾らにしょうかお年玉　紀子
暑さ寒さに弱い頭脳を持て余す　希久子
金銭がからむと頭動き出す　すみ子
愛してるアンコール攻め落ちました　舞夢
きれいだなんてもう一度言ってみて　眞澄
人生のアンコールらし病癒え　楓楽
万雷のアンコールああ幕下りる　照子
空っぽの脳に響いたアンコール　日の出
叶うなら冥土の君にアンコール　志華子
アンコール黒澤の剛小津の柔　蕉子
アンコールの声を待ってる舞台裏　桃花
ビデオなら何度もできるアンコール　善之
寝不足を通勤電車で取り戻す　げんえい
寝不足の顔を車内でメイキャップ　弘子
真夜中のスマホがぼくを離さない　富子
氷川ショー見た夜ばあちゃん寝つかれず　恭昌
明日検査思い煩い寝不足に　公平
寝不足のままで夕暮れのままで　義
キープしたボトル棚から会釈する　正雄
虚と実の狭間で学ぶ生きる智恵　集一

倍返し怖くて妻に逆らえず　浩二
オリンピック見たくて目指す白寿まで　知之
ウップンが喉につまったまま師走　捷也
死ぬことは大仕事なり歳暮れる　千歩
午年は健康体で望みたい　満作
窓ぎわに本音で語る椅子がある　昭

川柳塔さかい（大阪）　村上　玄也報

正直に言えば気になるあのジャッジ　誠一
死刑判決裁判長は苦悩する　としお
ようもまあ別れもせんと半世紀　敏治
はや師走ポインセチアに気付かされ　和夫
離婚したことはないけどあこがれる　日の出
くり返し離婚が出来る甲斐性者　時雄
青春はいいな何時でもゴーサイン　唯教
離婚する夢をみてたらご飯です　像山
バツイチが一番持てるクラス会　清
政界与党一方的なゴーサイン　世紀子
お歳だと軽く済ませる検査表　清晋
いい話リッチ気分にしてくれる　扶美代
盛大に祝いましょうよ五男五女　みつこ
バツイチのあの明るさは何だろう　好
贔屓の目ジャッジに起こるブーイング　健吾
あれそれで判断できるのも夫婦　さくら
一合の酒でリッチな気分する　朋月
うちリッチ松茸飯にキャビアのせ　永久
辛口の友情だった助け舟　ばっは
誠意ある粋なはからいご立派だ　のん子
生きていくハリまだ期待されている　篤子
判断を間違え命助かった　舞夢
判断はスパコンよりも直感だ　愿
大空を仰ぎリッチな気分です　かりん
酒の出る前に答は聞いておく　五月
判断に苦しむ罪な御節介　俶子
ぽんぽんの判断ずっと甘いまま　半銭
ポケットに諭吉があって温かい　雅明
リッチではないと財布は知っている　玄也
おせち料理金箔入りの豪華版　八千代
裁判員は辛い判断迫られる　光
朝露を踏んで紅葉の散歩道　和幸
美人だが喉の辺りを見てしまう　澄空
素人の判断情が先走る　冬虹
清潔が一番店もご馳走も　天笑

岩美川柳会（鳥取）　石谷美恵子報

不平不満辛抱しても痩せません　蟹郎
リストラに想定外と不平言う　忠良
無言劇眉間の皺にある不平　一瑶
不平言う口がだんだん尖り出す　節子
結納金不満だったとまだ愚痴る　茶子
青空を仰ぎ不平の風払う　和子
リタイヤの孤独に届く請求書　一粋
簡単に折れたら敵の思うツボ　圭一郎
骨折って開いた土地が荒れてくる　重忠
民の声聞かぬ矢は折れ行き詰まる　幸安
やさしさが折れた心に染みてくる　たぬ
曲がっても折れぬ竹には意地がある　菖子
踏み出した足に引けぬと折れてくる　清帆
九十度折れてモンペの亡母恋し　天翔
プライドがポキポキ折れる失意の日　雅女
奥様の死角で渡す請求書　美恵子

六甲川柳会（兵庫）　伊勢田　毅報

絶食七日点滴だけと仲が良い　みつ子
鈍な夫賢い妻がフォローする　浩司
一言のいや味も鈍く明日に利く　照子
愚痴言うと鏡がぐちを言ってくる　道子
鏡の汚れ磨いてみても老いの顔　忠貞
今日もまた鏡さっと拭き勝負する　弘
いい夫婦互いを映す鏡もつ　博史
鏡みる昨日の吾に別れ告げ　妙子
鏡みてニキビつぶした少年期　武臣
ありがとう感謝の今日が去って行く　繁義
去り際が大事と母の老い支度　加寿子
過ぎ去りし愛をグラスで温める　千賀子
どなたとも分ち合いたい慈しみ　文香
さよならの法話じわじわ身に沁みる　武彦
じわじわと人の勝手を突く自然　盛夫
じわじわと歩み寄っての仲直り　美恵子
過去は過去新たに線を引き直す　和郎
電子音だけではあきてきた一人　宏造
干せるだけ干した渋柿冬暖簾　洋一
共白髪残り火燃やす夫婦愛　勤
冬の夜お鍋と酒があればいい　邦子
逆らった亡父の無言が分る今　ひろ
妻の風呂返事があってほっとする　寿朗
また一人喪中ハガキに友想う　保雄
七たびの馬を追かけ早や傘寿　弘子
震災の復興を問うルミナリエ　利子
忘れてた時計に過去が動き出す　能子
大空をぐいと飲み干す大ジョッキ　無限
亡母さんのそっくりさんが居る鏡　美穂

はやる手を巧みにさばく鍋奉行　毅
一発で決着つけるホームラン　光久
あこがれの人は宇宙のどのあたり　いわゑ
古稀すぎて超特売になる月日　楓楽

川柳あまがさき（兵庫）　**加川　靖鬼報**

元気なら齢とることも又楽し　美也子
余生かけ手づくり年賀しみじみと　咲貴
まちがえず薬飲むのも仕事です　初音
いろいろと胸に収めて年の暮　蔦子
邪魔くさい出さないかんか年賀状　寛十郎
共白髪肌が合っての下り坂　泰子
今はもう見ないたき火としもやけと　洋子
初春に年賀が来ない元気かな　富夫
定年で夢を持ちえず飲みに行く　柳明
勇気出し本音を言っておこられる　寿美子
体調を崩した夏が過ぎて冬　志激
言えないが愛をこめてる花束に　幸香
根性も意気地もないから長らえる　健二
古里の香りりんごの荷が届く　雪菜
父の書く年賀の箸で祝った日　和子
お猪口よりガブ飲みコップ出る本音　里江
年一度面影浮かべ書く賀状　純
松茸の隣りに負けず焼くサンマ　五月
武庫之荘落葉の似合う街となり　野薫
こんなにも私はひとり雪は舞う　ひとみ
年賀から馬のいななき聞こえてる　靖鬼
流行語より清水の筆一字　勝巳
師走とは片付けること捨てること　千津子
両隣り下戸でよかったマイペース　耕治
こ時世かメールに負けてゆくメール　かずお

初春の初音のポストから賀状　菜々子
飲みなさい本音引き出す妻の技　祐康
顔に名がしっくり合わぬ娘がデビュー　見清
向かい風受けて本音を研ぎ澄ます　ヨシエ
いらん事言うていつでも悔いている　朋月
年賀にと大吟醸が届く筈　正和
雪舟の庭にしっくり正座する　哲夫
日溜りでのんびりページくる至福　美籠
罵声には強いが囁きには弱い　哲男
柿食うてしばらくは待つ奈良の鐘　晴美

大山滝句座（鳥取）　**新家　完司報**

どのあたりだろうか蛇の首根っこ　芳山
ドヤ顔で北朝鮮のアナウンス　寿代
頑丈な竿で夕日を釣り上げる　博子
次の世は表日本に生まれたい　石花菜
面白い一年だったなあ友よ　照彦
一ページめくると明日の地図がある　紀の治
千円を拾ったような良い天気　芳光
無礼講の席にコロンボまで混じる　くにこ
無茶少しして青春が活気づく　鬼一
混浴で若さをもらうおじいさん　久絵
海上に勝手に無茶な線を引く　麦青
トロ箱の雑魚に混じれば鯛も雑魚　蟹郎
人間の底へけものの血も混じり　美恵子
自画像は少しぼかしている未来　忠良
悪友に混じるとロクなことがない　圭一郎
あしたという未来があって安眠す　大鯰
喜寿にしてぼんやり未来見えてきた　玲坊
行く末はどんな人でも川渡る　幹啓
紅一点混じってからが盛り上がる　雄大

顔に出る嘘をついてはなりませぬ　けいこ
嘘一つ無茶な言い訳人ぞ知る　恭子
百年後見れぬが植えておく苗木　幸子
年一度大振る舞いのお正月　鈴野
何にでも手を合わせたい嬉しい日　久子
閻魔さま恩赦大赦はありますか　正
転けた過去教訓にして夢を追う　すみゑ
人の声途絶えて雪の降る気配　完司

城北川柳会（大阪）　**近藤　正報**

無二の友に思い出ばかり書く手紙　美智子
限りある命を覗く聴診器　柳弘
カルシュムしっかり効かせ金毘羅へ　ばっは
レンジチンゆたんぽ抱いて渋い夢　たもつ
介護終え君に勲章あげたいな　杁香
好い人を演じきるのは限界です　縣筰
浜風に骨のずいまで一夜干し　志華子
限界をさとって休むことにする　ルイ子
眼差しを見れば疑う余地はない　満作
目が悪い腰が痛いと不義理する　実
樹木葬骨は大地へしかと溶け　野鶴
忍という文字は笑顔の裏に書く　集一
少し金足してぎくしゃくなくなった　修
口実の友の電話を待っている　弘風
散骨は桜舞い散る瀬戸の海　直樹
生中は五杯ぐらいが限度です　勝弘
核のゴミミラクルはない溜まるのみ　一歩
涙腺で三文芝居する女　仁
根性は骨太なれど骨粗鬆　和夫
口実はどうあろうとも駄目は駄目　倫子

口実を作って嫁がやってくる　典子
ミラクルに恋が芽生えてどないしよ　あさ子
紅葉坂にわか着物が闊歩する　千恵子
風邪引いてさぼる口実出来ました　榮子
限界を知った男のラストラン　武彦
百歳がミラクル起こす詩集編む　克己
もう限界まだいけそうや深呼吸　朝子
生花になって物言う枯れた枝　堅坊
この時代普通に生きている奇跡　賢子
マンモスの骨一片にみる宇宙　麗
恋なのかすぐに約束してしまう　義昭
マイペース鼻高からず低からず　郁夫
限界を知って階段一つ降り　洋志

川柳さんだ（兵庫）　田中　章子報

旧姓に戻ったドラマ聞かされる　正和
ありがとう母が最後に書く手紙　一子
古希の会欠席と書く生と書く　ちあき
文書けば百年の恋水のあわ　健二
色あせた荷物でしょうか燃えた恋　忠
足腰を鍛え荷物になるまいぞ　美籠
十七文字売れないドラマ書いてます　淑子
生きていることがドラマだ素晴らしい　光久
自分史のドラマに少し色を付け　宣子
生きてきた足跡すべてドラマです　富夫
忘れたいことヘボソボソお念仏　菜々子
どん底でもらった愛を忘れない　真由
和やかに忘れた振りも明日のため　つな子
置き場所を忘れ財布に笑われる　俊昭
へそくりの隠した場所を妻に聞く　好文
まあまあの出来で渡ってきた世間　キヨミ
まあまあでんな大阪弁のご挨拶　野薫
まあまあと妥協しながら丸く住む　ヨシエ
まあまあの出来妻として母として　ひとみ
まあまあと言えた一年良しとする　喜久子
書き初めの午の一字が飛び跳ねる　婦美子
ありのまま腹割ったから眠れない　恭子
和を唱え輪を踏みにじる多数党　和雄
向い合い夫に吠えてるマントヒヒ　順子
罪と罰二三浮気をした程度　茂山
ロザリオを母の遺体にそっと添え　雄太郎
小春日の本とわたしの走馬灯　千津子
少年よ駆けよ駿馬の蹄持ち　祐康
終焉はこういうことかとおぼろげに　哲夫
友だちは鏡あの人歳とった　章子
軽いがな私の年金紙コップ　廣子
尻に敷け金も命も預けてる　晃
サラリーマン朝ドラ見てる暇はない　雅尚
秋へちまムンクの顔でぶら下がる　一泉
最大のドラマこの世の呱々の声　哲男

岸和田川柳会（大阪）　佐藤　幸子報

いざという時物言う妻の底力　蛙城
ろうそくの淡い光はおしゃべりで　昭
ここ一番集中力が物を言う　益祥
早期退職ライフワークの鍬を打つ　清
力抜くことを覚えて楽になり　玄也
さりげなく子に負けてやる腕相撲　香代
実力があると煽てる落し穴　和美
心経を唱え淋しさ紛らわす　仁緑
サヨナラを汽笛に言わす鰯雲　信二
川柳でシルバーライフ送る日々　幸子
月冴える地球の裏は飢えの列　ダン吉
マイライフ虹色にする趣味に会う　隆昭
薄紅をさして貴方に逢いにゆく　珠子
婚活へ淡い期待の勝負服　忠太
力量を隠す男の美学です　大輔
余生とは何だ老人バカにして　宏之
記憶力も少し冴えていた若さ　弘子
重すぎる一生生きた鶴彬　英夫
肩の力抜けば仲間が寄ってくる　ひろ子
お互いに力んでしまう初対面　保州
恋かしらリトマス試験紙舐めてみる　みつ江
マアいいやと互いに言って生きている　宗博
風に揺れ淡い香りのシクラメン　正幸
枯葉舞い思い出すのは淡い恋　義泰
あの人を想い目が冴え眠れない　康信
幽玄のみやびに冴える薪能　柳弘

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	16日(日) 14時締切 早い・古い・公用・自由吟	寝屋川市立総合センター　4階　第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
川柳 藤井寺	16日(日) 14時締切 前略・釜・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	16日(日) 13時30分開場 アリバイ・半分・のびのび	淡輪17区集会所　南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳塔 わかやま 吟社	16日(日) 14時10分締切 兼　題=失礼·キーワード·それぞれ 課題吟=あるいは	和歌山ビッグ愛　〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼　題　〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
豊中 もくせい 川柳会	17日(月) 13時40分締切 マスク・羨む・ぼんやり 自由吟	豊中市中央公民館 4F　阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2－8－4　江見見清
川柳 さんだ	18日(火) 13時30分締切 苦手・レシート・守る あれこれ・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5－2－4　堀　正和
川柳塔 すみよし	22日(土) 14時15分締切 一緒・アンテナ・いたずら	住吉区民センター　南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2－4－9 古今堂蕉子
和歌山 三幸 川柳会	22日(土) 12時30分開場 遺産・太陽・坂	和歌山商工会議所　4階　第2会議室 〒640-8570 和歌山市役所西隣 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市民 川柳会	23日(日) 14時締切 咳・染まる・ゆらゆら・面	綾南の森　公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	23日(日) 13時30分開場 スロー・棚上げ・そのまま	開発ビル　2F　ホール　鳥取市片原1－107 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
南大阪 川柳会	24日(月) 18時開場 覗く・郷里・かゆい・雑詠	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線·堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松露 川柳会	24日(月) 19時30分締切 丸・安泰・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194－2 山本正光
京都 塔の会	25日(火) 14時締切 エネルギー・量・呼ぶ	京都ハートピア　地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328－202　都倉求芽
川柳クラブ わたの花	28日(金) 10時開場 歌・逢う・天使・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1－4－8　西川義明

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

2月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	1日(土) 14時締切 財布・説く・うっとり・自由吟	旭区老人福祉センター　3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18　神夏磯典子
富柳会	1日(土) 14時締切 モンスター・化学・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　TEL 0721-25-0603 川柳とんだばやし富柳会　池　森子
倉吉川柳会	1日(土) 14時締切 きっかけ・洗う・土	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳あまがさき	4日(火) 14時締切 拗ねる・血・ずるずる・自由吟	尼崎女性センター　トレピエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2－45－8　山田耕治
川柳塔なら	6日(水) 14時締切 出る・影・追加	奈良市立中部公民館　4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2－1－24－901　安土理恵
川柳大阪	8日(土) 14時締切 鈍い・裸・予定	地下鉄・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔さかい	8日(金) 13時開場 鬼・貧しい 折り句＝にほへ	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3－4－31　村上玄也
川柳塔打吹	8日(土) 14時締切 指・スイッチ・弱い	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
川柳塔まつえ吟社	8日(土) 13時45分締切 空気・メガネ・拾う・そわそわ	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366　錦織禮子
八尾市民川柳会	9日(日) 14時締切 合掌・神・磨く・雑詠	八尾神社内　西郷会館　3F 近鉄八尾駅西口・徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
西宮北口川柳会	10日(月) 14時締切 他人・高い・ぬくぬく・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分　プレラにしのみや 〒662-0084 西宮市樋之池10－18－104　福島弘子
ほたる川柳同好会	11日(火) 13時30分締切 陸・噛む・ころころ	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル　5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
あかつき川柳会	14日(金) 14時締切 踏む・物・反抗	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル 2階） 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586－14－102　森村美花
岸和田川柳会	15日(土) 14時締切 風情・乾く・さらさら バランス	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13－19 中岡香代
川柳塔みちのく	15日(土) 17時締切 穴・あたふた・焦る	弘前市桶屋町4－7　居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161　平川市杉館宮元53－1　小寺花峯

柳界展望

★第33回川柳塔鹿野みか月川柳大会は平成25年11月24日、鹿野町総合福祉センターで開催。同人成績次の通り。

第一位　両川　無限
どの町に置いてもそぐわない戦車

準優勝　倉益　一瑤
裸木の如く無欲にさっぱりと　新家　完司

優勝　両川　洋々
おんな現役あんたの子なら産んだげる　両川　洋々

成仏へ七つの欲が捨てられぬ　中村　金祥

打ち止めと書いて静かにペンを置く　斉尾くにこ

一番の横着者だ息をせぬ　倉益　一瑤

捨てられた悔しさバネに咲いた花　竹口　清信

★第32回没句供養大会は平成25年12月15日、鳥取市新日本海新聞社本社ビルで開催。同人成績

☆木津川計先生は、一月五日(日)京都府立府民ホール・アルティで〝一人語り劇場〟「王将」を口演。好評を博した。また八作目の〝一人語り劇場〟は4月26日(土)2時～芦屋ルナホールにて（電話0797・71・3151「地獄絵絵解き・それから」を口演。東京初口演は9月20日(土)2時～、紀尾井小ホール。「無法松の一生」を語ります。

▼訃　報▲

■大石あすなろさん（同人・美作市）は1月3日に逝去。行年84。

▽新誌友紹介△

三田市　**木村マユミ**
紹介者　北野　哲男

防府市　**坂本　加代**
紹介者　新家　完司

神戸市　**芳賀　博子**

富山市　**山下　功**

▽お詫びして訂正△

▼1月号＝P73下段12行目、ライバルと買・叩き合う→**肩**・叩き合う。P101 11行目、古今金・→古今**堂**・。P102 5行目、忠雄・→忠**昭**・。P111 28行目、天皇を紙・と→**神**・と。

▼12月号＝P12下段4行目、どなたにも邪魔はさせ・ない一人部屋→**させ**・**ない**・。

▼12月号＝P117上段28行目

両の手をあけているのに待ちぼうけ

P117下段5行目

物忘れ一級免許が欲しいほど

P118中段28行目

ネットには無作法という落し穴

P118下段6行目

ずけずけと言うには空が青すぎる

以上4句の**作者は千恵子さん**でした。深くお詫びして訂正します。

常任理事会＝1月7日(火)

①20回川柳塔まつり、90周年記念川柳大会について②拡大会議事前アンケート③定例確認事項④各部報告事項⑤その他

次回＝2月7日(金)AM10時～

新同人紹介

藤井寿代（ふじい　としよ）
―完司・芳山・淞丘推薦

全日本川柳鳥取大会記念
第14回 春はくろぼこ川柳大会

日　時　**4月13日（日）** 10時開場
場　所　鳥取市さざんか会館５Ｆ
　　JR鳥取駅南口徒歩約３分

Ⅰ　事前投句の部
（各題２句、3月10日(月) 締切）
「狙　う」後藤美恵子・木天　麦青 共選
「結　ぶ」藤原　鬼桜・内田　久枝 共選
「捜　す」辻　嬉久子・黒田　能子 共選
投句料　1,000円（郵便小為替）

Ⅱ　当日の部（欠席投句締切 4月2日(水)）
「　旅　」　土橋　旗一　選
「　歌　」　西出　楓楽　選
「　紙　」　天根　夢草　選
「　砂　」　平山　繁夫　選
「　指　」　河内　天笑　選

当日会費　2,000円（発表誌・昼食呈）
欠席投句　1,000円（郵便小為替・発表誌呈）
問い合わせ　〒689-0343 鳥取市気高町飯里84-4
　　鈴木公弘（TEL・FAX 0857-84-2886）
主　催　**川柳同友会みらい**

日光東照宮400年式年大祭奉祝
のぞみ川柳会10周年記念
川柳大会のご案内

奉祝記念　**投句の部**　各題２句
課　題　「　祭　」
　選者…五十嵐修・坂根寛哉・村上氷筆
　　髙瀬霜石・原田否可立
　　「　日　」
　選者…斎藤はる香・前川千津子
　　植野美津江・松本文子
　　佐藤美枝子
用　紙　自由（清記選。住所・氏名・電話番号明記）
締　切　**２月末日（当日消印有効）**
投句料　１口　1000円（複数口応募可）
投句先　〒193-0832 八王子市散田町2-31-3
　　播本充子あて
主　催　**のぞみ川柳会10周年記念**
　　川柳大会実行委員会
事務局　のぞみ川柳会　代表　播本充子
　　（TEL 042-665-3172）

朝日なにわ柳壇　今年の十秀

— 25年12月21日　朝日新聞発表 —　（太字は本社同人）

川柳塔社理事長　**西出　楓楽　選**

最優秀句
戦せぬ国のモデルである誇り　鳥居　宏

秀　句
国境を蝶はふわりと飛び越える
働きたい人は働けますように
正直に生きて可もなく不可もなく
平等に朝がくるから素晴しい
てっぺんに人類いるという驕り
お言葉に甘え低温火傷（やけど）する
ぽつぽつに一期一会の雨宿り
半分が叶（かな）った夢を持て余す
おおきにが大阪らしい温かさ

若松　雅枝　雨森　茂喜
山本　照男
内藤　光枝
次井　義泰
吉道航太郎
笠田　幹治
吉村久仁雄
佐々木四郎

番傘川柳本社主幹　**田中　新一　選**

最優秀句
喝采の視線に背すじ伸びてくる　百々　寿子

秀　句
終活に挑み景色が変わり出す
ぼろぼろになっても旗は降ろさない
補助線一本悩んだことが嘘のよう
白む空すべては腹の中にあり
寂しいが身軽になって翔んでいる
語るほど酔いが醒め行く理想論
人は笑える崩れても壊れても
老いはときどき夢に酔い嘘に酔う
逆転の一手へ満を持す静か

笠嶋　恵美　井本　健治
上嶋　幸雀
村上　　良
松本あや子
角丸　眞嗣
吉道航太郎
吉松隆太郎
竹村　穏夫

編集後記

★旅人は焚火を借りて別れけり　　薫風

★1月2日、3日と箱根路を駆け抜ける新年の風物詩・箱根駅伝は今年九〇回を迎えた。襷をつなぐために選抜された学生はひたすら寒中を走り続ける。時間内に襷が繋がらないときは、即棄権となる。今回は往路の2区9キロで山梨学院の選手が疲労骨折でリタイア。当人はもちろん関係者の無念を思う。

★襷を繋ぐことは歴史を作ることである。歴史を作ることは取りも直さず伝統を継承することである。川柳塔は今秋創刊九〇周年を迎える。一本の松明を掲げて立ち上がった麻生路郎のもとに集った多くの川柳人の想いは、次々とバトンタッチされ伝統を形成する。

★たかが川柳ではない。されど川柳への想い。志は熱く、深く、重い。人によっては祈りであり、癒しであり、生きる活力源である。九〇周年を記念して合同句集が発行される。皆さん一人一人の襷が繋がり、歴史の証人にもなろう。95頁「せんりゅう飛行船」の「貴重な記録『合同句集』」をお読み頂きたい。

★私が川柳を始めた平成の初め、「きゃらぼく句会」が主催する「忘年句会」は憧れのステージであった。全国各地から多くの著名な川柳人が鳥取県米子市に集ったのである。川柳塔わかやまの福本英子さんと、今は亡き堀端三男さんに連れられて初めて参加したのは、平成二年の26回句会。

★きゃらぼく句会の名物は会員の皆さんの「おもてなし」であった。句会当日の踊りやお芝居などの余興、翌日の観光案内など後々までの語り草になった。その忘年句会を華やかに盛り上げられたのが、今号に田中亜弥さんの思い出をお書きくださった八木千代さん。行間から嗚咽が漏れてくるようであった。　（朱）

○編集日の昼食は、コンビニのおにぎりが定番。フイルムを抜くと、パリパリの海苔というのが凄い。ほとんどが三角おにぎりで、中の具もバラエティに富んで、安くて旨いのが嬉しい。

○NHKの朝ドラ「ごちそうさん」で主人公が義妹に持たせたお弁当に、三角おにぎりを入れたのだが、関西では、三角おにぎりは忌み事の時にしか作らないと知らされる。西と東の文化の違いはあろうが、今の関西人の大半が、そんな習慣があったことさえ知らないのではないだろうか。

○こんな句があった。

哲学の道で美味しいにぎりめし

この時の握りめしは三角か俵型か気になる所だが、おにぎりは三角、おむすびは俵型と言う説や、関西はおにぎり、関東はおむすびと言うらしいが、いずれにしろ野外で食べるおにぎりは美味しい。　（ま）

原稿募集

◇エッセー・書評など
一行18字67行まで
同人に限る

◇ひとこと
一行15字20行まで
内容自由、同人・誌友

締切　毎月24日

どちらもタイトルは別につけて下さい。
原稿の採否は編集部に一任願います。

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

種目「　　」発表（4月号）

地名　　市都道府県

姓雅号

きりとりせん

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「張り切る」（2月15日締切）

4月号発表

大内　朝子 選 ――共選―― 竹治ちかし 選

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

B　A

地名

市都
県道
府　姓
雅
号

切らないで下さい

B　A

地名

市都
県道
府　姓
雅
号

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

年　月　日

きりとりせん

氏名		住所	〒　－	電話	－　－	紹介者	

○　年　月から半年　5000円
○　年　月から一年　9800円
該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201
川柳塔社（電話　06－6779－3490）
振替　00980－4－298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

本社２月句会

とき　２月７日㈮　13時開場・13時40分締切
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　４階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし「川柳でたどる昭和後期」西出楓楽

席題「　　」鴨谷瑠美子選

兼題「　咳　」伊達郁夫選
「開　く」北村賢子選
「チャンス」久保田千代選
「鋭　い」木本朱夏選
「直　接」小島蘭幸選
（各題２句以内）

会費　１０００円　投句料　５００円（切手可）

本社３月句会
６日（木）午後１時から

兼題「仲　間」「沈　む」「めらめら」
「怖　い」「見　学」

作品募集

４月号発表（２月15日締切）

川柳塔（８句）小島蘭幸選
水煙抄（８句）川上大輪選
愛染帖（３句）新家完司選
檸檬抄「張り切る」（２句）竹治ちかし　大内朝子　共選
一路集（３句）「屋　根」池森子選
「カンパ」夏目一粋選
「はつらつ」佐々木満作選
初歩教室「苦　労」（３句）山口光久担当

５月号
檸檬抄「　心　」
一路集「一　途」「サポート」「そこそこ」
初歩教室「コレクション」

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第32年度　夜市川柳募集

第９回「　力　」川上大輪選
ハガキに３句　**２月20日**締切

投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**川柳塔さかい**

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇一四年（平成二十六年）二月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
発行所　**川柳塔社**
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル２０１号室
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十六年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇四一号　川柳塔　二月号
定価　八百円（送料　八十四円）

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの
つきごま

長い間親しまれてきたオニザキの「すりごま」は、名称を変更し、パッケージを一新いたしました。
オニザキのすりごまは、元々すり鉢ですったゴマではなく、杵と臼を使った杵つき製法で出来た「すりごま」です。
今までと変わらぬ、風味豊かな味わいをご堪能ください。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東３丁目７番８号　〒584-0023
TEL 0721-25-7210　FAX 0721-25-9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町４丁目５番８号　〒103-0021
（日本橋川村ビル４F）
TEL 03-5255-5158　FAX 03-5255-5159
http://www.koki-envelope.com

雑誌 05703－2